理念の継承

操風会70周年記念誌

理念の継承

操風会70周年記念誌

理念の継承

操風会70周年記念誌

現在の岡山旭東病院、岡山リハビリテーション病院（2020年）

空から見た倉田地区の変遷

1980年（提供　国土地理院）

1990年（提供　国土地理院）

2007年（提供　国土地理院）

2020年（提供　国土地理院）

施設の変遷（岡山リハビリテーション病院）

1956年　東山病院

1957年　東山病院

1978年頃　東山病院

1981年頃　東山病院

2000年　岡山あさひ病院

2007年頃　岡山リハビリテーション病院

2013年　岡山ハッピィライフ操風

2011年　岡山リハビリテーション病院（倉田へ移転）

施設の変遷（岡山旭東病院）

1983年　旭東整形外科医院

1991年　岡山旭東病院

2004年　岡山旭東病院

2014年　岡山旭東病院

1997年　岡山旭東病院全景

2000年　岡山旭東病院全景

2014年　岡山旭東病院全景

2004年　岡山旭東病院全景

2020年　岡山旭東病院全景

岡山旭東病院

岡山リハビリテーション病院

岡山ハッピィライフ操風

70周年記念祝賀会

（2023年9月30日　ANA クラウンプラザホテル岡山）

三船文彰、荒木渉による感動的なチェロとピアノのコンサート

司会　岡山旭東病院事務長　諏訪仁一

開式の辞　操風会理事長　土井基之

記念式典参加職員

祝辞　岡山大学　那須保友学長

祝辞　岡山県病院協会　難波義夫会長

祝辞　黒住教　黒住宗道教主

閉式の辞　操風会専務理事　土井章弘

祝賀会司会　財団営業本部長　河村武人

開宴の挨拶　岡山旭東病院院長　吉岡純二

会場の様子

乾杯の挨拶　岡山市医師会　平田洋会長

病院紹介　岡山旭東病院副院長　土井英之

病院紹介　岡山リハビリテーション病院副院長　鼠尾晋太郎

閉宴の挨拶　岡山リハビリテーション病院院長　十河みどり

乾杯の様子

閉会の三本締め

公益財団法人操風会の変遷と今後の発展

公益財団法人 操風会

理事長　土井 基之

財団法人操風会は、戦後昭和28年（1953）に、高畠正夫と土井健男の両義兄弟が、医療に対する高邁なる志によって設立いたしました。我が操風会の基礎を創設した、その思いが今でも脈々と継続していることを誇りに思っております。戦後の社会の混乱のなかで理想の医療を目指して奮闘していたことが、思い起こされます。その道も社会の変遷、衛生状態の改善にて、疾病構造の変化から、我々の医療体制もその変化に対応すべく変わらなければなりませんでした。結核疾患の減少、トラホームの眼疾患の治療対象の変化等であり、結核治療病院は、老人介護病院へ、新たな眼疾患患者に対する早期の最新の治療体制への変換であります。老人病院へ変遷、その後の時代の養成をみこしてリハビリテーション専門病院への転換でありました。また、今後は外科対象の疾患が多くなる思いで、昭和58年（1953）整形外科医院を開設、その後、脳外科も開設して脳・神経・運動器疾患の総合的専門病院として発展させてきました。我々の財力からして、総合病院になるだけの力がないとの判断で、この二つの分野で、岡山リハビリテーション病院との総合力を期待して、オンリーワンの医療機関として生き延びる決意をいたしました。また、医療事業と介護保険事業を通じて切れ目のない地域包括医療施設として、サービス付き高齢者向け住宅も運営いたしております。我が法人は高い公益性の事業を目指す医療機関として、平成31年（2019）公益財団法人の申請を行い認められました。

今後の操風会の目指す方向は、専門病院としての研究施設の充実と設立、予防医学の発展に力を注ぐ組織の構築、職員一人ひとりに対する福祉事業の充実を計り、職員の幸せなくして良き医療ができないとの信念で操風会を充実させてまいります。また医療、介護を通して、より良き施設として発展、国民健康（身体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべて満たされた状態：ＷＨＯ）の充実のため、今後は特に予防医学の分野を充実させていく所存であります。

公益財団法人　操風会　創立70周年に寄せて

―不易流行の病院経営―

国立大学法人岡山大学　学長

那須 保友

公益財団法人操風会創立70年まことにおめでとうございます。

操風会グループの中核病院である、岡山旭東病院は脳・神経・運動器疾患の総合的専門病院として高品質かつ最先端の医療を提供してこられました。私も、大学病院勤務時代には脳転移を来した患者様に対する最先端のサイバーナイフ治療において大変お世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。岡山旭東病院はまさにこの領域におけるフロントランナーを貫いてこられたといっても過言ではありません。

財団は４つの経営理念（坂の上の雲）に向かって歩んでおられますが、私が注目させていただいたのは４番目の**「職員ひとりひとりが幸せで、やりがいのある病院」**です。理念作成の時に４番目のこのフレーズを入れることにはいろいろ議論があったと伺いました。ちなみに経営理念に職員の幸せを謳っている代表的な企業は、稲盛和夫が創立した京セラであります。

私は本年４月に、国立大学法人岡山大学の学長に就任いたしましたが、その際**「不易流行」**を経営の根幹に据えると表明いたしました。不易流行は松尾芭蕉の俳諧の理念であり、時代が変わろうとも不変なもの・変えてはいけないもの（不易）と、時代の変化、社会の要求や期待に応える形で変化させていかねばならぬもの（流行）があるということで、大学経営における不易流行を以下に定義しました。

不易：岡山大学に関わる過去・現在・未来の人々（マルチステークホルダー）の持続的で多様な幸せ（well-being）の実現を追求すること。

流行：国内外の社会情勢を見極め、国の施策や地域の思いを先取りし先導する組織経営改革・人材育成・研究を行うこと。

大学にとってのステークホルダーは、学生、その父兄、患者様そしてもちろん職員です。職員の物心両面の幸せが実現してこそ、岡山大学が地域と地球の課題解決を通して人類社会の持続的発展に貢献することが可能となります。操風会の経営理念を読ませていただき、我が意を得たりという思いです。

まさに操風会は**「不易流行の病院経営」**を職員一丸となり実践して、今日の発展を遂げられたものと考えます。これは組織が持続的に発展する原理原則であり、創立70年を迎えた操風会は今後もさらに発展されるものと確信しております。

益々のご発展を祈念して祝辞とさせていただきます。

公益財団法人 操風会の創立70周年に寄せて

一般社団法人 岡山県病院協会 会長

難波 義夫

（特定医療法人社団同仁会金光病院
理事長・院長）

公益財団法人操風会創立70周年まことにおめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

操風会は眼科医院と内科病院を母体として創立されたということですが、私は、物心ついたころには学区内に東山病院があり、より身近な感覚であったと記憶しております。昭和の終わりに岡山旭東病院を開設され、整形外科、脳神経外科を中心に、次々に最新の設備、医療技術を取り入れられ発展されました。また、最新医療のみでなく、急性期を過ぎたリハビリから、療養施設を次々に併設されていかれました。

特記すべきは、最新の医療を次々に取り入れるだけでなく、「生きる・暮らしを守る・人間らしく生きる」という医療・福祉にとって重要な理念のもと、患者様だけでなく働く職員のやりがい・幸せを追い続ける経営をされており、我々医療関係の経営者にとっては目標となる存在で、背中を一所懸命追っていますが、なかなか追いつけません。

病院内だけの事業でなく、医学の研究、育成にもまた、岡山のスポーツ団体や文化事業、ミャンマーの医療人育成事業、日中友好にも寄与され、操風会の懐の深さに感服いたします。世の中の流れが、人間の限りない欲望によって、あらぬ方向に進んでいる中で、操風会は「快適な、人間味のある温かい医療と療養環境を備えた病院」を目指し、癒し・笑い・ユーモアを取り入れておられます。いわゆる、他者の気持ちを推し量り、協調する「共感力」を大切にされている経営方針だと思われます。我々医療人にとって最も大切なことと思われます。

章弘先生は、岡山県病院協会の会長を長年務められ、日本病院会の学会も主催され、多くの業績を残されています。私が、会長を拝命され、不安でしたが章弘先生を手本に努めてまいりました。しかしとても追いつくことはかなわず、いつも、温かく、励まし、ご助言をいただき感謝しております。

操風会が、ますます発展され、地域の医療・福祉だけでなく、社会全般に貢献され、我々の手本とし今後も活躍されることを祈念いたします。

「操風会創立70周年記念誌」の発刊にあたって

岡山県医師会長
松山 正春

公益財団法人操風会 岡山旭東病院様が創立70周年を迎えられましたことに、心からお喜びを申し上げます。

私事になりますが、私は岡山市門田に住んでおりました。操山から吹いてくる爽やかな下風“操風”に育まれて成長しました。そして操山や奥市は私たちの遊び場でもありました。当然、前身の東山病院の周りも私たちの縄張りでした。私が10歳のころには、岡山には病院はあまりありませんでした。東山病院は私たちにとっては、珍しい存在として見ていました。

私の中では、操風会の歴史はほとんど記憶しております。

操風会 東山病院開設当時の日本の医療は、開業医を中心とした民間に支えられていました。その主な疾病は国民病ともいわれていた結核でした。東山病院も結核の診療を主に行っていただいていました。我が国には、結核の診療から始まって地域の基幹病院へと進化していった医療機関が多数あります。操風会もその一つであるといっていいでしょう。

しかし、結核も抗菌薬の登場などで封じ込めることに成功し、我が国の疾病構造は変化していきます。加えて、医療制度もしばしば変更され、地域の先生方を翻弄した時代でもありました。

「操風会の創設」の第１章に“逆風と転換”と記されていますように、苦境を乗り越えて、ますます発展しておられます。整形外科を専門とする旭東整形外科病院に脳神経外科専門医を招聘し、岡山旭東病院を開設されました。さらには、時代のニーズに対応するリハビリテーションに力を注ぎ、回復期リハビリテーション病院を開設されました。

経営理念の一つに、“他の医療機関・福祉施設と共に良い医療を支える病院”とあるように、岡山旭東病院は常に地域に開かれており、病診連携を密にし、さらに高齢者施設等からの要望にしっかりと応えていただいています。私たち医師会員にとって、これほど心強いことはありません。私たちの日常の医療を支える最後の砦としての機能を十分に果たしていただいています。

コロナ後の医療はどのように変化するのか想像もできませんが、今後も、岡山旭東病院様には時代の先端を走っていただき、地域包括ケアシステムの要として、岡山県医師会と共に岡山県民の医療・介護・福祉に貢献していただくことを期待しております。

公益財団法人操風会様には、100年に向けて全職員挙げて益々のご発展を祈念しております。

敬仰と称賛の心のままに

黒住教教主
黒住 宗道

戦後復興の槌音が響く中に誕生した財団法人操風会が、令和の幕開けとともに公益財団法人に“進化”して、本年財団創立70周年を迎えられたことに対して、衷心よりお慶びを申し上げます。

この度、祝辞を述べさせていただく栄に浴し、参考資料として同封された沿革史を感慨深く読み終え、敬仰と称賛の心のままに祝意を綴っています。

とりわけ感銘を受けたのは、1988年（昭和63）６月25日の「第１回院内研究会」に始まる「患者さんのための医療の実現をめざして、勉強し互いに発表し合う場」を継続して開催し、1993年（平成５）からは、病院の羅針盤ともいうべき経営指針の発表会を開いて、病院の財務内容を全て職員と取引銀行に開示して来られたことです。

「病院の職員は患者さんのために働いているが、そのあたりまえのことが実行できていないことがある」と、さりげなく記された一言に、当財団が後に「公益財団」として新たな時代を迎えることになる原点を垣間見た思いです。

とは申せ、最初から順調に事が進むはずもなく、「院長が言っていることはきれいごとだ！」とか「病院に経営理念など、儲け主義ではないか！」等の反発を乗り越えての職場環境の改善であり意識改革であったことを土井章弘先生から伺い、一層感銘を深くしました。今や、全職員の総意によって成立した４項目の経営理念を柱に、「患者さんのため」と「職員ひとりひとりのため」を明確に打ち出して、他の機関・施設と共に地域医療体制の向上を目指しておられる姿は、これまでの不断のご努力の結果以外の何物でもないことを改めて確認し、敬仰と称賛の思いは増すばかりです。

３年３ヵ月間の“コロナ禍”を経て、私たちは「あたりまえの有り難さ」を実感しました。当分“コロナ禍”は続くようですから油断は禁物ですが、自由に行動できること、集って楽しく過ごせること、何よりも元気に健康でいられること等々、まさに“ハッピィライフ”の有り難さを「コロナだったからこそ」より深く気づかされました。

「公益とは、みんなが『あったらいいな･･･』と思うもの」（因みに「公共は、みんなにとって『ないと困る』もの」）なのだそうですが、「公益財団法人操風会」が、益々人々にとって「あったらいいな」以上の「なくてはならない」存在として、尊い社会的使命を果たされますことを心から祈念して、お祝いの言葉といたします。

写真特集

現在の岡山旭東病院、岡山リハビリテーション病院(2020年)　2

空から見た倉田地区の変遷　4

施設の変遷(岡山リハビリテーション病院)　4

施設の変遷(岡山旭東病院)　6

施設紹介　8

70周年記念祝賀会(2023年9月30日　ANAクラウンプラザホテル岡山)　10

ごあいさつ

公益財団法人操風会の変遷と今後の発展　公益財団法人操風会理事長　土井基之　14

祝辞

公益財団法人操風会創立70周年に寄せて―不易流行の病院経営―　国立大学法人岡山大学学長　那須保友　16

公益財団法人操風会の創立70周年に寄せて　一般社団法人岡山県病院協会会長　難波義夫　17

「操風会創立70周年記念誌」の発刊にあたって　岡山県医師会長　松山正春　18

敬仰と称賛の心のままに　黒住教教主　黒住宗道　19

第Ⅰ部　70年のあゆみ

序章　**操風会の創立**(1947～1952) …… 24

第1章　**逆風と転換**(1953～1982) …… 27

第2章　**基盤づくり**(1983～1997) …… 32

Ⅰ　組織の変遷　32

Ⅱ　人とモノの変遷　36

Ⅲ　職場環境の改善　42

Ⅳ　病院行事と地域活動　45

第3章　**成長と発展**(1998～2006) …… 52

Ⅰ　組織の変遷　52

Ⅱ　人とモノの変遷　54

Ⅲ　職場環境の改善　62

Ⅳ　病院行事と地域活動　65

第4章　**改革と連携強化**(2007～2010) …… 72

Ⅰ　組織の変遷　72

Ⅱ　人とモノの変遷　72

Ⅲ　職場環境の改善　78

Ⅳ　病院行事と地域活動　80

第5章　**移転と地域包括**(2011～2018) …… 84

Ⅰ　組織の変遷　84

Ⅱ　人とモノの変遷　88

Ⅲ　職場環境の改善　93

Ⅳ　病院行事と地域活動　95

第6章　**公益化と進展**(2019～) …… 100

Ⅰ　組織の変遷　100

Ⅱ　人とモノの変遷　101

Ⅲ　職場環境の改善　111

Ⅳ　病院行事と地域活動　113

操風会70周年記念誌発刊に寄せて　岡山旭東病院 院長　吉岡純二　120

操風会70周年記念に寄せて　岡山リハビリテーション病院 院長　十河みどり　121

第Ⅱ部　未来へのメッセージ

操風会の未来を語る座談会 …… 124

操風会　未来へ　岡山旭東病院 副院長　土井英之　132

操風会の未来へ向けて　岡山リハビリテーション病院 副院長　鼠尾晋太郎　133

アンケート　**職員の心の声**　～未来への架け橋～ …… 134

第Ⅲ部　資料編

経営理念　138

理事会　139

組織図　140

財団法人役員履歴・歴代理事　142

操風会職員数の推移　144

操風会総医業収益の推移　146

岡山旭東病院手術件数の推移　148

岡山旭東病院入退院患者数・平均在院日数の推移　150

岡山リハビリテーション病院入退院患者数・平均在院日数の推移　152

岡山旭東病院患者満足度調査　154

職員やりがい度調査　156

岡山旭東病院　Gross Hospital Happiness（病院内総幸福）～GHHで測る病院職員の豊かさ～　157

年表　158

編集を終えて　公益財団法人操風会専務理事　総院長　土井章弘　166

70周年記念誌実行委員からひと言　168

「理念の継承」は、70周年記念誌を編纂するにあたり、実行委員会で掲げたテーマです。操風会が掲げる理念を、次世代につなげていきたいという願いを込めています。

マークは市街地の中心部を流れる旭川の「旭」という文字を図案化したものです。ハートは職員と患者の心のふれあいを示し、未来にはばたこうとする鳥がやさしくハートをつつみこむイメージです。十字は医療活動を示しています。

第Ⅰ部

70年のあゆみ

序 章

操風会の創立

（1947～1952）

操風会の淵源

財団法人操風会は1953年（昭和28）６月、２人の開業医によって設立された。

１人は1935年11月に岡山市川崎町（現・岡山市北区京橋町３番先）に高畠眼科医院を開業した高畠正夫であり、もう１人は1947年（昭和23）12月に岡山市細堀町（現・岡山市北区表町３丁目）に土井内科医院を開業した土井健男だった。土井は高畠の義弟であった。

２人は戦中・戦後の物資の乏しい時期に、岡山市の中心地でともに医業を営んできた。1945年（昭和20）６月29日の岡山大空襲では、岡山市の中心部は焼け野原となり、多くの死傷者を出していた。

戦後の医療政策の変遷

1945年（昭和20）８月15日の終戦以降、当時の厚生省は「医療公営」の方針のもと戦争中に設立された日本医療団を拡充し、戦災都市には開業を許可せず、焼け残った学校、会社等の建物を使って病院、診療所を開設し、罹災した医師を半強制的に診療に従事させた。

しかし、乏しい医療機材や薬剤では十分な治療ができず、また、インフレが進むなか、低い給料では生活に追われ、非能率的な医療しか実施できなかった。

前列中央から右へ土井須賀夫、益、健男、章弘（1951年ごろ）

そこで、厚生省も元の開業医制度を認める方向へ転換し、1947年（昭和22）11月には日本医療団は解散し、同時に新生日本医師会が誕生した。大病院は国公立でもよいが、医師と患者の信頼関係を大切にする個人開業医制度が必要であるとの認識に変わったのである。

1955年（昭和30）頃から、焼け跡に家を建てて開業する医師がぼつぼつと現れ始めた。しかし、戦後の日本経済は困難と混乱のなかにあり、財産税の創設、相続税の税率大幅引き上げにより、医師の死亡後は家族が納税のために病院を売却し、廃業せざるをえない例も多かった。岡山市で明治時代から隆盛を極めた弓之町の石本病院の廃業は、その最たるものであった。

厚生省でも医療機関の存続をはかるために医療法人の構想を打ち出したが、大蔵省との折衝が手間取り、1950年（昭和25）８月にようやく医療法人制度が施行された。しかし、大蔵省の主張に屈して、できたものは最初の理想より大幅に後退し、法人税率も営利法人（株式会社、有限会社、合資会社等）と同率で、また相続税も低減されなかった。

財団法人操風会設立まで

このような背景のもとに、岡山県衛生部長大森誠は、数年前から県下の医師らに民法第34条による公益法人たる財団法人の設立を奨励指導し、県下には医業を行う財団法人が多数出現し、その数は東京都についで多かった。

高畠正夫はそこに着目し、1950年（昭和25）頃から調査を重ね、既設の財団法人である川崎病院、河田病院、慈圭会、六車病院等に設立手続き等を尋ね歩いて構想を練り、義弟土井健男と法人設立を図った。

法人設立について最初の記録は、1951年（昭和26）５月、財団法人操風会許可申請書を三木知事に見てもらった。

それから後も構想を練り、文章は東山病院事務長の本後太郎が健筆を揮い、法規は川崎祐宣の紹介で、岡山市弓之町の司法書士・梅井清美と、土井の六高柔道部の１年後輩である松岡一章弁護士に相談し、経理は川崎の紹介で岡山市高柳の経理士・内田勇治郎に相談しながら準備を進めた。

1953年（昭和28）２月、東山病院設立に際して町内会の反対を鎮めて

もらった礼に高畠と土井は大森を訪ね、具体的に法人設立申請の手続きを聞き、４月にふたりで知事に面会した。

そして５月30日、設立申請書を提出し、６月15日付で岡山県指令医第2583号をもって財団法人操風会の設立が許可された。

（以上、高畠正夫著『私の回顧録』一部抜粋、昭和58年参照）

土井健男の回想

また、高畠とともに操風会を設立した土井健男は、当時のことを以下のように綴っている。

「昭和20年８月15日の終戦を朝鮮平壌で迎え、妻子と別れ、私はソ連の捕虜となり、シベリヤでの抑留生活を余儀なくされました。やっと、昭和22年秋に日本に帰りました。その年、細堀町にて義兄（高畠正夫）の厚意で内科を開業し、ついで25年には川崎町に移転致しました。当時結核が国民病として恐れられており、年間20万人の死亡で今の癌と同じ感覚ではなかったかと思います。治療といっても人工気胸や肺の手術で、後は自然治癒力を待つこと以外にないという状態でありました。土井内科医院は有床診療所として妻が給食を受け持ち、毎日が往診と外来で今でもよく働いたと思います。そして、私は結核の患者さんも多く、結核の専門病院を創ろうという夢がありました。

昭和25年には、津山で赤堀病院が岡山では川崎病院、河田病院が財団法人の許可を受けました。昭和28年頃は結核患者も多く、眼科ではトラホームが流行し、義兄高畠正夫と協力して、私財を投じて昭和28年５月30日財団法人操風会を設立申請いたしました。当時、県知事は三木行治氏（高畠正夫とは医学部の同級生）でありましたが、大森衛生部長の勧めもあり、財団設立をすることができました。」

（『財団法人操風会創立40周年記念誌』）

第１章
逆風と転換
（1953～1982）

財団法人操風会を設立

土井健男夫妻

当時の市民は、国民病ともいわれる肺結核とトラコーマの蔓延に生活を脅かされていた。

こうしたなか、結核患者に対応するため、1953年（昭和28）1月、岡山市中区奥市に東山病院（54床）を開院させ、川崎町から患者を移した。患者と従業員の増加に対し経営の安定と更なる事業拡張に向けて、同年6月、高畠正夫と土井健男は私財を投じて、財団法人操風会を設立した。

東山病院外観

財団法人は世のため人のためになることをする団体ということで、民法第34条によって許可を得た法人で、許可当初は医療も公益事業であった。当法人は、育英事業、医学医術の研究及びその後援、スポーツの振興及びその後援の公益事業に努力している。

操風の由来は、当時の法人事務所のある東山病院が操山の麓にあったこと、設立者である高畠正夫と土井健男が旧制第六高等学校（現在の岡山朝日高校）出身で、土井が当時、日本一強かった柔道部に所属しており、「ときわに青き操山の山下風にさらされてあしたゆうべに鍛へたる我が部のそなえ今成れり」という部歌から「操風」ととったとされている。

当時生まれた公益法人には、淳風会、梁風会、慈風会があり、「風」という名が評判よかったとされている。岡山旭東病院の北方に操山の松の緑が見え、いつまでも若い青春の心を失わず努力してほしいとの願いが込められている。

（広報誌「愛」1989年２月より）

財団法人操風会設立趣意書

以下は、財団法人操風会設立趣意書の全文である。

「おもうに、終戦以来のわが国は破壊と疲弊のどん底から立ち上がって真に臥薪嘗胆の幸苦をいたし、ようやく平和独立の日を迎えたのでありますが、由来天然の資源乏しく、過剰の人口に悩む国情は容易に国力の恢復を許さず、加うるに巨額の賠償を負担する将来もまた、はなはだ多難のことと申さねばなりません。

さればわが国民は海外諸国民に比し数倍の努力を払って、この難局に処さねばならぬわけでありますが、現段階において、わが国民大衆は経済的にも衛生的にも保障に欠くるいわゆる最低生活に甘んじながら、け

なげにも新生日本再建の槌を日夜振りつづけているのであります。しかる状態においては一歩を誤まればたちまち疾病に昌され、その職を失い、生計、医薬の資に窮する者多く、特に結核、トラコーマの諸症はその最多数を占め、国家の前途真に憂うべきものがあります。

現に、医療公営、諸施設の拡充、医学医術の発達、新薬の発見等にもかかわらず、亡国病ともいうべき肺結核の患者は日を追って増加し、生活条件の低下は眼疾特にトラコーマの蔓延をきたし、頃日来の不肖等の検診に見るも１日も等閑を許されざる状態にあり、更に敗戦のもたらす戦争未亡人、戦傷者諸士の生活不幸はまことに語るに忍びぬものがあります。

大衆の困窮生活と相まってこれら諸病が国民病として猖獗するに至っては、国力の伸張、民族の発展を阻むゆゆしき大事でありますから、これの根本的対策は焦眉の急務でありまた国家百年の大計でなくてはなりません。

もとより当局におかれても保健施設に、更生事業に、教育に、産業振興に全力を尽くされていることはつとに感謝するところでありますが、おのずから国家予算にも限度がありこれら対策は未だ十分とはいい難く、目的達成のためには一般国民の理解と民間有志の献身的協力が必要であります。

かねて我々有志は前記の観点に立脚し右問題につき、深甚なる関心をもって、民間公共の施設を種々検討した結果、ここに成案を得ましたので不肖等設立者となり、微財と微力を投じて公益財団法人操風会を設立し、熱情を集中していささか公共の福祉に貢献せんとするものであります。

本財団は叙上の信念にのっとり公益法人の趣旨を体し、

一　医療施設を整備改善し医療奉公の完璧を期する。即ち資力を結集して日進月歩の医学に併行した最新の施設を整え、万人平等なる医療の均霑を志す。

二　育英寮の設置運営

祖国の復興は一にかかって次代をになう優秀な青年学徒の養成にありますが、県下僻地には、恵まれた天分を有しながら貧窮の環境に厄されて空しく向学の志を捨てる二男、三男が少なくありません。これら身心卓抜の若人に教育の機会を与え、人材輩出を念じていわゆる人産物の助長を図り、思想堅実、意志強固にして将来社会公共に尽くし、後輩の指導を誤らぬ優秀人士の育成功長に寄与する。

三　授産事業場の設置運営

戦争未亡人、引揚者、戦傷者等働くに職なく路頭に迷う人々に仕事を与え、不幸なる人生に再起の道を開き生活の拠点を彼等の手に確実に把握せしめんとする。以上の事業を行い微力を致してここにいささか国策に添わんとする次第であります。

昭和28年5月30日　財団法人操風会」

（前掲高畠正夫著『私の回顧録』より、一部漢字をひらがなにし、一部熟語はルビをふった）

なお、1950年（昭和25）８月には医療法人制度が施行されていたが、操風会が医療法人でなく財団法人（現在は公益財団法人）になったのは、前述したように、医療法人の税率が営利法人と同率だったためである。当時、岡山県には川崎病院、河田病院、慈圭会、六車病院など、財団法人の病院が多くあった。

高畠正夫は1954年（昭和29）４月から２年間、岡山市医師会の副会長を務めた。

また、土井健男は1955年（昭和30）から岡山県医師会職員としても活動をはじめ、理事、社会保障部副部長として地域医療を支えてきた。

建物・設備の増改築

1956年（昭和31）４月に東山病院本館を建築。鉄筋コンクリート３階建て、延床面積858㎡、136床の結核病院として機能転換を図った。そのため、外科も併設し手術室も備えた。

東山病院新館新築中（1956年9月）

東山病院を訪れた橋本龍太郎氏（中央）とともに

東山病院新館（1957年2月）

土井健男（左）と看護婦長

当時の様子

東山病院落成式（1981年10月）

その後、結核患者が減少したため、東山病院は一時、経営にいきづまった時期もある。しかし、市内の他の病院が結核患者を診なくなったことや、いちはやく高齢者医療に取り組むようになったことから、東山病院は勢いを取り戻した。

そして、1974年（昭和49）には木造病棟２棟を取り壊し、鉄筋コンクリート３階建て本館1,260㎡を新築、旧館も改築した。さらに、1978年（昭和53）３月には鉄筋コンクリート３階建ての結核病棟742㎡を新築して32床の結核病棟とし、一般病棟とあわせて158床となった。

一方、高畠眼科は1955年（昭和30）12月、岡山市三浜町（現・南区三浜町）に眼科三浜分院を開設（1968年（昭和43）に休院、1980年（昭和55）廃院）、翌56年（昭和31）４月には本院において延床面積132㎡、鉄筋コンクリート２階建ての診療棟を新築した。

その後、高畠眼科は1979年（昭和54）11月、鉄筋コンクリート５階建て、延床面積1,046㎡の建物を新築し、院長も正夫の長男・稔に交替し、白内障などの眼内手術に力を入れるようになった。

高齢者医療への転換

1960年代に入り日本は高度経済成長によって国民生活が豊かになってきた。1961年（昭和36）には国民皆保険制度が実施され、現代的な医療制度も日本社会に徐々に普及していった。

戦後の食糧難から復興を経て高度経済成長期に入ると、国民生活も向上して食糧事情や公衆衛生もよくなり、ストレプトマイシンの普及ともあいまって結核も漸減していった。

1973年（昭和48）、国立岡山病院の事務部長だった土居和夫が、定年退職を機に東山病院に赴任し、同病院の高齢者医療への転換を図るとともに、病棟の増改築に着手した。そして、1981年（昭和56）９月、延べ床面積914㎡の管理棟を建設し、東山病院は199床を備える長期入院の高齢者中心の病院に転換した。

このころから高齢化社会の到来が社会問題化する。1973年（昭和48）に70歳以上の老人医療費無料化制度が実施されたが、1982年（昭和57）には老人保健法が成立して自己負担（窓口１割負担）が復活、この法律は2006年（平成18）に「高齢者の医療の確保に関する法律」と改められて今日に至る。日本の高齢者福祉と健康保健法をめぐり大きな変化のあった時代である。

こうした医療と社会の動きに対応すべく、財団法人操風会は次のステップを模索し、歩み始めた。

Column　旭東整形外科医院創設について　　土井基之

小生は1969年（昭和44）学園闘争が華やかなりし時代に大学閉鎖となり、やっとその年の秋に半年遅れで卒業しました。その頃は（一部今でもそうである如く）卒業と同時にどこかの科を選んで入局していました。しかし、我々44卒生は、入局せずに岡大の勢力病院の180病院から直接各病院に打診して、いかなる教育をしてもらうかお伺いをたて、各個人が病院と１年間契約していました。私は、外科系の科を希望し、多くの症例が経験できるとの望みにて岡山の川崎病院の外科で研修をすることにしました。研修が終わるころ、那須先生という立派な整形外科医に感銘を受け、そのもとで指導を受けさせていただきました。それと同時に、今後は整形外科患者を扱う機会が多くなると思い、岡大の整形外科に入局いたしました。引き続き十数年川崎病院で働いて大変勉強になりました。その間那須教授、坂手院長や多くの医師に面倒を見ていただいたことは感謝にたえません。

私の父が1953年（昭和28）財団法人操風会東山病院を設立しておりました。その時から川崎祐宣先生に理事をしていただいておりました。その関係もあり、川崎病院就職中は、川崎病院の最上階にあった川崎院長の部屋に何回か呼ばれて、医師としての心構えを御教授していただきました。感謝にたえません。

その後のいろいろな出来事の後、1983年（昭和58）10月、19床で旭東整形外科医院を開設いたしました。開業した場所は現在の倉田の地で、その斡旋をご厄介になった河野氏は、その少し前に川崎病院に診察を受けに来て、私がいかなる人物か鑑定にきた方でした。

10月30日の開院式は、思い出深いものとなりました。開院式当日に三女が生まれ、病院の発展と子どもの成長とが重なり、大変よい思い出となっています。開院時の従業員は、事務長（楠田）、放射線技師長（菅田）、看護婦長（藤田）、事務員（安田）、看護師、看護学生の総勢9人でした。レセプトの詳細などは事務長任せで、収支のこともあまり気にせず必死で患者の治療をしておりました。菅田氏ともかなり議論し、毎日その日のお金の清算やら患者さんへの対応に追われ、従業員には辛くあたることもあったようです。収支はずっと赤字で操風会に助けてもらっていました。それでもその頃は外傷患者がかなり運ばれてきており、月に30件から40件の手術を夜間でもおこなっておりました。看護師の加治さんには夜間の手術でも何の不服も言わずテキパキと働いていただき感謝しています。また、鷹取医師には大変苦労をおかけしました。というのも初めの頃だったので、夜間当直でほとんど毎日医院に寝泊まりしており、そのため、昼間に医院を抜けなくてはならないことが度々ありましたが、その事情を説明することが私には不得手で、鷹取先生には不愉快な思いをさせ迷惑をかけておりました。先生は（私と大変違って）患者と言い争うことは一度もなく、そのような先生を頼りにしておりました。川崎病院からの医師の応援もあり徐々に患者は増加していきました。

旭東整形外科医院外観全景

1988年（昭和63）1月、私の兄の土井章弘が長年香川県立病院脳外科部長として活躍しておりましたが、当院の更なる発展のため岡山旭東病院院長として帰岡いたしました。

（財団理事長）

第２章

基盤づくり

（1983～1997）

1980年ごろの倉田地区周辺
（出典：国土地理院、一部抜粋）

Ⅰ　組織の変遷

旭東整形外科医院の開院

財団では、将来構想のもと、新たに岡山市中区倉田地区に病院用地の取得に動いた。

1983年（昭和58）９月に開設許可がおり、10月、常勤医１名で旭東整形外科医院が開院した。片山建築設計事務所が設計、穴吹工務店岡山支店が施工し、鉄筋コンクリート３階建て、延面積1,695㎡、109床の建物で、岡山市の第12回優秀建築物として表彰された。

開院に合わせ、開院式と財団設立の30周年を祝う記念式典が開かれた。

11月４日に実施されたアキレス腱縫合術が、旭東整形外科医院手術室での第１症例となった。

当時の状況について、岡山旭東病院事務長を務めた楠田正樹は次のように述べている。

「当時病院の周囲には建物がまばらに点在しているだけで、市街地から少し離れて旭川のほとりに位置する病院のまわりは市内の喧噪には程遠い春の若草、秋の稲穂と広く田園風景が広がり、のどかなたたずまいが多く残っていました。

当初の計画設計は、将来的に地域の中核病院にするための設計になっていましたが、最初は19床の診療所（整形外科・理学診療科）として「旭東整形外科医院」が当時職員十数人で開院しました。

1年後の昭和59年10月には土井基之院長のがんばりで患者さんも増え、経営効率を考えて３階の宿舎を改築し、40床の「旭東整形外科病院」として再スタートしました。」

（『財団法人操風会創立40周年記念誌』）

旭東整形外科医院玄関ホール

旭東整形外科医院院長室

旭東整形外科医院外観（1983年）

旭東整形外科病院から岡山旭東病院へ

前述したように、このころから高齢化社会に対応すべく国の高齢者医療制度の転換が図られ、地域医療整備計画によって各医療圏における病床規制も検討されはじめた。それにより、兄弟が協力して病院運営に当たる構想計画を急ぐ必要が出てきたため、法人で協議の結果、香川県立中央病院脳神経外科主任部長であった兄の土井章弘を院長に迎え、新体制で病院経営を行うため、増床して病院機能の充実を図ろうと、増改築工事の計画に着手した。

1988年（昭和63）、第１次病院増改築工事が完成し、１月１日付で病院名を旭東整形外科病院から岡山旭東病院に変更した。院長には土井章弘、副院長に土井基之が就任した。土井章弘が脳神経外科医師、土井基之が整形外科医師として脳・神経・運動器疾患の総合的専門病院を目指すことになった。併せてこの時期、理学療法室、作業療法室、言語療法室を完備した。

２月28日には、岡山国際ホテルで岡山旭東病院の開院式を開催した。約200人を招き院内を披露、各医療設備の見学会を行った。

３月、岡山旭東病院が正式に開院した。脳神経外科、整形外科、神経内科、リハビリテーション科、循環器科、放射線科、麻酔科を標榜し、高度な専門医療を提供できるよう経営理念を掲げた。病床数は102床、県下初の超電導磁石式磁気共鳴画像診断装置（MRI）をはじめ、血管Ｘ線撮影装置、全身CTスキャナシステム、核医学イメージングシステム、高圧酸素治療装置などの脳神経運動器専門病院を開設するための最先端医療機器と脳神経外科集中治療室７床（NCU）を備え、また、実施可能検査項目は生化学・血液・生理・輸血であり、血液ガス分析装置も導入し

岡山旭東病院開院披露宴
（1988年2月28日）

岡山旭東病院外観

MRI検査室（1988年2月）

MRI装置導入の記事
（1988年３月10日 山陽新聞社提供）

東山病院外観

西館OPENイベント

た。そして、臨床検査室も整備した。東山病院の援助に支えられての新たなスタートであった。

特に県内初の超電導磁石式MRIは、開発初期の永久磁石型のMRI装置と比べて飛躍的に画質が向上したため、県内外の大学病院をはじめ多くの病院から検査依頼を受け、初年度は2220件の撮影を実施した。

療養型病院・東山病院、急性期病院・岡山旭東病院へ役割分担

1992年（平成４）６月、第２次医療法改正案が成立した。主な内容は、高度先進医療を担う「特定機能病院」、慢性患者の長期療養を担う「療養型病床群」の制度化を図ったことである。それを受け、東山病院は療養型への転換、それと併せ、岡山旭東病院の急性期医療整備のため、病床60床を東山病院から岡山旭東病院へ移床が計画された。

岡山旭東病院はその後、1991年（平成３）８月に第２次病院増改築工事として新検査棟が完成し、脳ドック検査を開始した。また、1997年（平成９）４月には第３次病院増改築工事として３階建ての西館が完成し、３階病棟を開設し病床数は124床となった。さらに翌98年（平成10）５月には西館２階病棟も開設し、病床数は162床となった。

西館の完成により、理学療法室、作業療法室、言語療法室、リハビリテーション科診察室、医療ソーシャルワーカーの相談室等が充実し、総合リハビリ施設として認可を受けた。

リハビリテーション科の新設

東山病院は長期入院の老人病院になっており、患者や家族からは終身

理学療法室（1992年）

長谷川医師が赴任し西館のお披露目

西館新リハビリテーション室（1997年4月）

Column　リハビリテーション科の変遷　　長谷川寿美玲

私が旭東整形外科病院へ入職した1987年頃は、リハビリテーションは物療整形外科治療の一部（温熱、電気、牽引、マッサージなど）と考えれらており、リハビリテーション専門医の存在も知られていなかった。リハビリテーション科が診療科として標榜を認められたのは先のことで、当時はまだ言語聴覚の身体障害者指定医は耳鼻科に限定されていた。

当院では、まず西井マッサージ師、看護婦1名と共に外来や入院患者の治療を始めた。当時の東山病院は結核患者が減少し、老人病院となっており、患者や家族には終身入院できる「終の棲家」と評価されていたが、当時の土居事務長はリハビリを行う老人病院へ転換しようとしていた。そして、操風会は急性期病院と慢性期病院を担うリハビリテーション体制を目指すことになった。

理学療法士（以下PTと略す）、作業療法士（以下OT）は国家資格となっていたが、養成校は全国でも少なく岡山県では川崎リハビリテーション学院1校であった。言語聴覚士（以下ST）は大学卒業後国立養成校が1校あるだけで国家資格はなく、教育学部の特殊課程実習3カ月を経験し、教員免許を持つ病院STが訓練に当たっていた。

1988年に岡山旭東病院が開院し、4月からPT（長江）、OT（可児）、香川県立中央病院から言語療法経験者のST（河村）が加わり、リハビリ医師、マッサージ師との5人で初期体制ができた。施設認可を受けるため、リハビリ処方せん、評価表、実施記録表は川崎医大で使用しているものを参考に作成し、3カ月の試行期間を経て作業療法施設の認可を取得した。

東山病院は、手術室をリハビリテーション訓練室に改築し、週1回長谷川が出向して菊池婦長の協力の下、リハビリ助手と一緒に入院患者の訓練を行うようになった。寝たきり患者を車椅子に乗せる、平行棒で起立や歩行訓練するなどで看護職員にリハビリの概念を知ってもらった。

1989年3月にOT１名が退職したが、4月には経験者2名を迎えて認可施設は継続でき、PTも新卒2名を採用して、運動療法施設基準も取得した。同時期、PTとOTに東山病院へ出向してもらい、運動療法と作業療法の施設認可を取得できた。STも週1回、午後に東山病院で訓練を開始した。

1990年、PT・OTの教育実習施設になったことで、リハビリ職員の採用は安定して行えるようになった。リハビリテーション専門医の指導医資格を保持していたため、専門医研修施設としての申請を行うことができ、1999年4月からリハビリテーション専門医教育施設として川崎医科大学から後期研修のリハ科医師（目谷先生）が派遣された。リハビリテーション科医師が2名になったことで、各科からのコンサルタントだけでなく病棟主治医としてリハビリテーション科10床を担当することができ、若いリハビリテーション科医師によりVE検査、装具診などでリハビリ医療の先端技術が導入できるようになった。

2000年の介護保険法により医療体系が変化していく中で、急性期から慢性期への受け皿となった岡山あさひ病院（旧東山病院、現岡山リハビリテーション病院）の役割は大きかった。当時から開始してきたPT、OTの人的交流は今も続いており、その後デイケアや訪問看護ステーションたんぽぽができている。

新棟披露（1997年4月）（太田（OT）・日笠（OT）・川大明石教授・長谷川）

リハビリ（左後：可児（OT）・長江（PT）・河村（ST）・前方：四方（MSW）・長谷川）

平均在院期間の短縮と病床利用率が勘案され、西館2階で回復期リハビリ病棟を開始し、橋本先生が専従となった。一般病棟と外来診察は長谷川が担ってきたが、2004年のDPC開始後、回復期リハビリ病棟の継続が困難となり2005年度に廃止された。

2006年に橋本医師が専門医に合格し、地元の病院勤務を希望されたため、リハビリテーション科での入院受け入れは9月末で終了となった。2007年～2009年常勤や、非常勤医と長谷川でリハビリテーション科外来と他科からのコンサルテーションに応じていたが、大学からの派遣は次第に困難となった。

リハビリテーション科医師の需要は回復期リハビリテーション病棟が増えるにつれ増加したが、逆に川崎医科大学リハビリテーション科入局者は増加しないため常勤医師の獲得は困難となった。更にリハビリテーションは回復期でという流れも加速している。

リハビリテーションはチーム医療を必須としている。看護、栄養・給食、放射線、ケースワーカーのチーム医療が進んだ。特に嚥下関連ではVF検査や治療食など勉強会を定期的に行ってくれた看護部に感謝したい。

（岡山旭東病院リハビリテーション科顧問）

旭東整形外科医院手術室

物療室（1983年）

岡山旭東病院開院当時の医師たち
（1989年）

古和総婦長告別式

入院できる「終の棲家」と評価されていた。しかし、土居事務長はリハビリを行う老人病院への転換を考え、操風会として急性期病院（岡山旭東病院）と慢性期病院（東山病院）とで行うリハビリテーション体制をめざした。

当時、リハビリテーションとは物療整形外科治療の一部（温熱、電気、牽引、マッサージ等）と考える医療者（東山病院の医師を含め）が多く、リハビリテーション専門医の存在は知られていなかった。また、リハビリテーション科が診療科として標榜を認められたのは1996年（平成８）のことであり、また言語聴覚の身体障害者指定医は耳鼻科に限定されていた。

1987年（昭和62）５月、川崎医大リハビリテーション科の医局から、長谷川寿美玲医師が旭東整形外科病院に赴任、1988年（昭和63）岡山旭東病院でリハビリテーション科の開設をめざして理学療法士、作業療法士、言語聴覚士を雇い入れ、看護師と共に外来や入院患者の治療を開始した。岡山旭東病院のリハビリテーション体制が始動した。

Ⅱ　人とモノの変遷

旭東整形外科医院開院後のスタッフ増員等

1983年（昭和58）年11月に旭東整形外科医院が開院したときには、医師１名（土井基之）、看護師５名、放射線技師１名、事務員２名の計９名の人員に、一般撮影装置、Ｘ線ＴＶ装置、移動型透視診断装置、移動型撮影装置各１台の装備でスタートした。

翌84年（昭和59）12月に病床数が19床から40床に増えると、看護師２名、准看護師５名、補助者４名（うち看護学生２名）の計11名になり、勤務体制は日勤と日勤当直体制をとり、外来・病棟・手術を全員で兼務した。

1985年（昭和60）４月に細木総婦長が着任し、看護管理日誌ができたが、細木総婦長は11月に退職、後任に古和総婦長が着任した。1986年（昭和61）４月、看護師全員が「看護の質の向上」「看護職が働き続けられる環境づくり」「看護領域の開発・展開」を使命とする日本看護協会に加入した。古和総婦長は翌86年11月の叙勲で「勲五等瑞宝章」を受章し、その１年後の87年11月３日にくも膜下出血で逝去された。その後は坂本婦長が総婦長代理として就任した。

岡山旭東病院開院に向けた増員と手術件数の増加

1988年（昭和63）の岡山旭東病院開院に伴う増床に備え、87年には看護師11名、准看護師16名、補助者４名（うち看護学生２名）の31名体制となり、６月から外来は独立、病棟は夜勤２人体制となった。また、脳・神経外科領域ケアの看護研修として、５月に香川県立中央病院で３週間の研修（６名）、６月から11月にかけて大阪脳神経外科病院で研修（４名）を行い、11月に基準看護１類を届け出た。

1988年（昭和63）３月の岡山旭東病院開院時には、常勤医師５名（脳神経外科２名、整形外科２名、リハビリテーション科１名）で診療を開始した。後に香川医科大学、岡山大学放射線科から各1名の研修医や医師が加わり、放射線科医師は脳外科手術にも参加した。

開院当初の手術件数は整形外科165件、脳神経外科65件（うち開頭術26件）で、頭部の手術はまだ少なく、脊椎、末梢神経手術も積極的に行った。後に神経内科に常勤医が加わり、岡山大学麻酔科から非常勤麻酔科医も加わり緊急手術にも対応できるようになった。

看護体制は一層の充実を図り、病棟・外来・手術室へ管理者を配置した。また、NCU（脳神経外科集中治療室）７床も稼働した。

1990年（平成３年）には、岡山旭東病院の脳神経外科手術件数は100件を超え、脳神経外科専門医訓練施設Ｃ項に、翌年（1991年）には151件で大学病院と同格の脳神経外科専門医訓練施設Ａ項となった。また、リハビリテーション科では専門医教育施設となり、川崎医科大学より研修医が派遣され、1992年入院治療が開始された。

1992年、岡山旭東病院に骨塩定量装置が導入された。この頃には、整形外科の手術件数は、200件を超えるようになった。放射線科医、脳神経外科医が増員され、1994年には脳神経外科の手術件数は200件を超えた。1996年には、麻酔科医が赴任し、整形外科の手術件数は300件を超えるようになった。1997年内科医２名が赴任し、内科系診療も充実するようになった。

医療福祉相談室の開設と「患者様の声」の設置

1988年（昭和63）４月には医療福祉相談室を開設し、社会福祉士の医療ソーシャルワーカー（ＭＳＷ）1名を配置した。疾病を有する患者らが、地域や家庭において自立した生活を送ることができるように、社会福祉の立場か

医師カンファレンス風景

ナースステーション（1992年）

受付

Patient's Voice（1993年）

ら患者や家族の抱える心理的・社会的な問題の解決・調整を援助し、社会復帰の促進を図る医療福祉相談の専門職として、相談を開始した。

また、翌89年5月には、患者、家族と病院のコミュニケーションツールとしてご意見箱「患者様の声」を設置し、病院の改善活動の一翼を担った。

作業療法施設の認可取得と東山病院のリハビリテーション訓練室の設置

1988年（昭和63）４月から岡山旭東病院では、新卒の理学療法士、作業療法士と、香川県立中央病院からの言語聴覚士が加わり、リハビリテーション医、マッサージ師との５人で作業療法を開始するための体制を整え、11月に作業療法施設の認可を得た。

それと並行して、東山病院は手術室をリハビリテーション訓練室に改築し入院患者の訓練を開始した。

当時、東山病院にはリハビリスタッフが常勤しておらず、岡山旭東病院から出向していたが、リハビリテーション訓練室ができて２名が東山病院へ異動となった。

1989年（平成元）９月には、岡山旭東病院は運動療法施設基準も取得した。

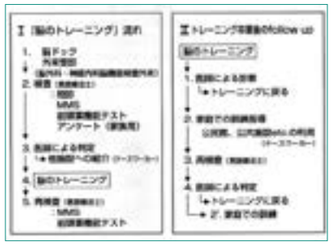
東山病院リハビリテーション室

早期認知症患者の外来プロジェクト、「脳トレ」の開始

1989年（平成元）４月、岡山旭東病院では早期認知症患者の外来プロジェクト、脳トレを開始した。

当時の土井章弘院長が中心となって取り組み、MMSE（ミニメンタルステート検査）が25点以上でも前頭葉機能が低下するなど、生活面で影響が出ているような患者層に対して、患者と家族が３ヵ月１クールとして、土曜日の午後、外来で対応した。これは当時、浜松医療センター方式と呼ばれ、急性期病院として取り組む「早期認知症患者への集団療法」であった。

脳のトレーニング（脳トレ）と称したこの取り組みは、今では聞きなれた名称であるものの、当時学会では異論を呈されることもあった。しかし、生活場面での実践や、家族の態度が受容的に変化することで、症状の悪化に一定の抑止効果を確認することができた。その後、時代の流れや診療報酬改定に応じた勤務体制の変更などにより、得られた成果は活かしつつ、かたちを変えていくことになった。



脳トレの流れ
（『脳のドック』P48より）

高畠正夫名誉理事長、土居和夫事務局長の逝去

1990年（平成２）１月、財団法人操風会の生みの親であり、長年財団を運営してきた高畠正夫名誉理事長が逝去された。岡山ライオンズクラブの創立会員であり、後に会長として社会にも寄与してきた。また、1993年（平成５）3月には、財団の発展のため中心的役割を果たしてきた土居和夫事務局長が逝去した。時代の流れを読み、いち早く老人医療の重要性を先見し、病院経営の安定を計った功績は多大なものであった。

県下初の脳ドックを開設

1991年（平成３）８月４日、岡山旭東病院は県下初の脳ドックを開設した。以下はそれを報じる７月14日付の「山陽新聞」の記事だ。

「脳出血や脳血管性の痴呆など脳の病気を早期発見・予防する「脳の人間ドック」が８月４日から岡山市倉田の岡山旭東病院（土井章弘院長）にオープンする。脳ドックは２、３年前から札幌、京都を皮切りに全国各地で普及し始めており、県下では同病院が初めて。

脳の検査はこれまで、脳血管に造影剤を入れてエックス線でみる脳血管造影法が一般的だったが、入院が必要な上、まれにショックを起こすこともある。脳ドックが可能となったのは脳の内部を輪切りにし断層撮影できるMRI（磁気共鳴診断装置）の登場。超伝導磁石による磁場の性質を利用したもので、受診者は横になっているだけで全く負担を感じないまま検査できる。

同病院は、脳血管だけを浮きあがらせる最新のMRIを導入、専用の脳ドックセンター（二階建て）を建設した。検診は①医師による脳の機能テスト②検査（MRI、採血、心電図）－などがセットで、所要時間は約３時間。結果をもとに生活指導や栄養指導、異常があれば精密検査も行う。受診料は４万円。予約制で当面１日２、３人を予定している。

脳疾患での死者は、県下で年間2,335人（平成元）。助かった人もほとんどがまひや言語障害などの後遺症を伴う。同病院の土井院長は「脳の疾患は自覚症状がなく、突然発症することが多い。危険な個所を事前に発見、予防できるドックの意義は大きい」と話している。」

また、「山陽新聞」は1992年（平成４）１月９日の記事で、当院の脳ドック受診者100名のうち29名に脳梗塞や脳動脈瘤の異常所見が見つか

MRI検査（1992年）

ったことを報じている。同記事によると、受診者の内訳は20代から80代までの男性53名、女性47名で、50～60代が62名を占める。異常所見の内訳は脳梗塞25名、脳内出血２名、腫瘍、脳動脈瘤が各１名だった。

院内保育施設の設置と夜間警備員の採用

院内保育園「どんぐり園」(1992年)

この頃の岡山旭東病院の看護職員総数は58人で、退職者も多く、夜勤可能者の数が減り、夜勤回数月平均10回以上と過去最悪の状態となっていた。そこで1992年（平成４）12月、院内保育施設を設置し、育児休暇明けの復職支援、新採用者の獲得に努めた。開設当時は４ヵ月から１歳の幼児４名を保育した。

また同時期、夜間警備員２名を採用し、夜間警備の充実を図った。夜勤看護師にとって心強く、働く環境の改善につながった。

コンピュータの導入

どんぐり園の様子

1994年（平成６）、岡山旭東病院では、医事OAコンピュータを導入した。1996年（平成８）には院内LANを施行し、各部署にネットワークケーブルを配線、e-mailの利用が可能となった。翌97年１月にはパソコン21台、プリンター４台を導入した。1998年（平成10）６月にはWEBサーバを設置、７月には病院ホームページを公開した。11月からは、計72回にわたって、院内でパソコン教室を開催し、職員の教育を行い、IT化の流れがはじまった。

経皮的レーザー椎間板減圧術（PLDD）治療開始

1996年（平成８）７月、岡山旭東病院では、椎間板ヘルニアに対してレーザー照射によって蒸散する治療として、PLDDを開始した。当時は保険適用ではなかったが、それまでの外科的治療より侵襲性の低い治療であり、1997年（平成９）１月までに10例の治療を行なった。この治療は、2016年までに371例を行なったが、自由診療であったこと、他の治療法の出現等により、当院での治療は終了した。

Column　理念経営と経営指針書について　　土井章弘

当財団の経営理念は、①安心して、生命をゆだねられる病院　②快適な、人間味のある温かい医療と療養環境を備えた病院　③他の医療機関・福祉施設と共に良い医療を支える病院　④職員ひとりひとりが幸せで、やりがいのある病院の４つですが、この理念は職員討論を重ねて現在の形になりました。経営理念は「坂の上の雲（司馬遼太郎の著書『坂の上の雲』から引用）」であって、到達することのできない「目的」であり「夢」でもあります。経営指針書は目標であり、これは、年々変わっていくものです。

私が勤務医だった時代に、中小企業家同友会の教育講演会「教育は死なず」若林繁太先生（長野篠ノ井旭高校校長）に参加する機会がありました。校長自ら落ちこぼれの生徒を更生させるという講演でしたが、中小企業の社長達が教育問題に関心を持ち参加していることに感動したの覚えています。岡山旭東病院の院長として岡山に戻ってきたとき、岡山県中小企業家同友会は設立（1985年）間もない頃でしたが、香川同友会の紹介で、当時の事務局長（磨田俊司）の勧誘を受けて入会しました。「良い経営者になろう」「良い会社にしよう」「良い経営環境にしよう」の三つの目的と、自主・民主・連帯の精神を基本の取り組みに「国民や地域と共に歩む中小企業」を目指し、経営理念のもと、全員参加型で経営指針を成文化すること、毎年経営指針の発表と経理の公開をすること、スタッフ全員で経営をしていくことなどを学びました。

1.　第一回経営指針発表会

1990年、建築間もない大会議室で第一回経営指針発表会を開催しました。経営理念と10頁程度の経営指針を大会議室で発表しました。当時の病院には、理念や計画などは殆どありませんでした。職員にとっても初めての経験となり、「院長の言っていることはきれいごとだ！」「病院に理念経営など、儲け主義ではないか！」と反発も多くありました。第一回経営指針発表会は静かに幕を閉じましたが、このとき一番良かったのは、私自身がこの方針で行こうと心を決めることができたことでした。

2.　全職員の討議で決まった4つ目の経営理念

経営理念を策定した当初は、①安心して生命のゆだねられる病院　②快適な、人間味のある温かい医療環境を備えた病院　③他の医療機関と共に良い医療を支える病院の３つでしたが、奈良同友会の報告会へ参加した際に「職員のことが書かれていない」との指摘を受けました。早速、帰りの新幹線で「職員一人一人の人生の花が咲くことを念じ求める」を考案し、職員に提案したところ「院長に念じてもらっても、どうにもならない」と紛糾され、当時の高見英敏事務次長が「職員ひとりひとりが幸せでやりがいのある病院」と纏めてくれ、他の理念も職員で話し合って現在の4つの経営理念になりました。

3.　経営指針書の重要性に目覚める、第一回経営危機

1993年頃、東山病院から60床移床する計画を立てました。穴吹工務店（当時穴吹夏治会長）に増改築を依頼して、今の西館建築を進めていたところ、当時の楠田事務長に、このまま建築にはいると倒産する可能性があると諌言されました。学会出張を自粛し、あらゆる経費を見直し、私と基之副院長の給与を減額、事務長も自主的に減額してくれましたが、人間尊重の経営を目指していたため職員は辞めさせたくはなく、退職者の不補充による職員の自然減で耐え凌ぎました。このときメインバンクだった中国銀行の小橋支店（支店長は後の泉史博頭取）に「経営指針書」を持っていき、病院の窮状を訴えたところ「経営指針書のような計画をもってきてくれた病院はない」と借金の元金償還を待ってくれました。その２年後には、黒字決算と成り、1997年、新しく西館病棟とリハビリ訓練室が完成しました。

同友会の労使見解の中にある「経営者である以上、いかに環境が厳しくとも、時代の変化に対応して、経営を維持発展させる責任があります」が経営者の心構えを教えてくれました。

私は、岡山県中小企業家同友会の代表理事を21年間（1992～2013）務め、中小企業家同友会全国協議会副会長も（2013~2015）務めさせて頂いた中で、同友会の仲間から、経営のヒントを沢山得ることが出来ました。特に三宅昭二氏（三宅産業社長・香川同友会代表理事）とは逝去されるまで、40年にわたる交友がありました。心より感謝申し上げます。　　（財団専務理事・総院長）

患者食堂でのコンサート

患者食堂オープン

1997年（平成９）８月、岡山旭東病院では、本館３階に患者専用食堂をオープンした。

食堂には、普通のテーブルと車椅子専用のテーブルを置き、車椅子の患者さんも利用できる仕様にした。栄養・給食部から２名が出て食堂に待機し、配膳やスープ、盛り付けの容易な副食については、食堂で温めて温かいものを提供した。

利用日は月・水・金を本館２階、火・木・土を西館３階、本館３階とし、昼食は正午から午後１時、夕食は午後５時50分から６時20分とした。

開設当初は、食堂の利用に戸惑いもあったが、食堂が患者さん同士の交流の場ともなり、「食事の時間が楽しくなった」という意見も聞かれた。また、職員による病院食堂オープンコンサートなども開催した。

たんぽぽ開所式

たんぽぽのスタッフ（1998年2月）

訪問看護ステーション「たんぽぽ」スタート

1997年（平成９）11月19日、訪問看護事業所として岡山県で66番目の認定を受け、12月１日に訪問看護ステーション「たんぽぽ」を開設した（12月４日に開所式を開催）。訪問看護師３名、訪問担当療法士１名でのスタートで、利用者は10名であった。

経営理念は、①人を大切にする心で支援します、②利用者の信頼を喜びとします、③人間の持つ可能性を追求します、④地域とともに歩みます、である。

開設と同時に地域の開業医と連携し、４医院の医師から紹介を受け、訪問看護・リハビリを実施した。

2000年（平成12）４月に介護保険制度が始まり、居住介護支援事業所からの依頼が増えていった。

Ⅲ　職場環境の改善

第1回院内研究会の開催

病院の職員は患者さんのために働いているが、そのあたりまえのことが実行できないことがある。そこで、患者さんのための医療の実現をめざして、勉強し互いに発表しあう場として、1988年（昭和63）６月25日岡山旭東病院４階会議室で第１回院内研究会が開かれた（この年は４回開催）。

院内研修会（1988年７月）

院内研修会（1988年７月）

経営指針書作成開始・経営指針発表会開始

1990年（平成２）から岡山旭東病院では、病院の羅針盤ともいうべき経営指針書の作成を開始した。1993年（平成５）１月に第１回目となる経営指針の発表会を開き、病院の財務内容を全て職員と取引銀行に開示した。

東山病院でも1997年（平成９）から経営指針書の作成と発表会を開始した。経営指針書の作成に当たっては、職員による経営指針検討シートの記載や、病院長と副院長による各部署のヒアリングの実施等により、職員の意見を吸い上げて作成している。

Column　訪問看護リハビリステーションたんぽぽ　　井上マサヨ・谷部明子

開設への思い
～綿ぼうしとともにあなたの所へうかがいます～

病院を退院後、在宅療養を継続される方々が自宅で明るく安心して生活していけるように、1997年11月19日岡山県より66番目の認定を受け、12月1日付で、看護とリハビリテーションが共働して生活を支える「訪問看護ステーションたんぽぽ」を開設しました。

「誰でも年を重ねるにつれ、家族のぬくもりを感じ慣れ親しんだ我が家でいつまでも暮らしたい」このような生活を希望する患者さん・ご家族の思いには深いものがあります。核家族化が進み、高齢者の一人暮らしや、高齢夫婦のみの世帯・共働き世帯の増加により家族に頼った在宅生活は難しくなっていました。また、経験に頼った介護を続けていると、介護者が体を壊したり、適切な処置ができず床ずれを悪化させてしまうなど、介護や看護の知識や技術が不足しているために苦労したり辛い生活を送ることもあります。

たんぽぽスタッフ

必要な時に必要なサービスを綿毛とともに利用者のお宅に届けたいという開設者の思いを受け継いで、主治医の指示のもと専門職として、看護とリハビリの側面から利用者のニーズに沿ったサービスを提供しています。

「太陽のように明るい黄色、ふわふわとした白い綿毛のように寄り添い、利用者の思いを看護とリハビリで共働し、その人らしい生活を支援したい」というのが「たんぽぽ」の由来になっています。

たんぽぽ訪問看護の様子

入院日数の短縮化、医療の進化により在宅でのがん治療など、療養生活に不安を感じている利用者、終末期を自宅で過ごしたいと思われる利用者は増えています。

今後も、生活を困難にしている要因をサポートし、安全に安心、安楽な在宅生活が送られるよう在宅チームの一員として、24時間365日支援していきます。

（岡山旭東病院看護部長・訪問看護リハビリステーションたんぽぽ管理者）

リーダー研修（1999年、高柳先生）

リーダー研修の実施

病院も多くの職員で成り立った企業体である。病院が意思を持った生命体であるとするならば、それぞれの部署が生き生きと躍動するためには、まず院長を含めてリーダーの自覚が大切だ。

そんな問題意識から1990年（平成２）７月13日・14日、建部町の宿舎サンタケベで、１泊研修を実施した。

研修は、土井基之副院長の挨拶で始まり、楠田事務長から病院運営の現状について報告がなされた。次いで土井章弘院長が病院におけるPRについて基調報告を行い、「自然にもれる高貴な香りに魅了されて人が集まる。ちょうど蝶が花に集まるように、そんな香りに包まれた病院文化（企業文化）を創っていくことが理想的なPRではないか」との言葉があった。

第一回中堅職員研修（1997年10月）

全職員対象の一般職員研修

1997年（平成９）10月17日から18日にかけて、全職員対象の一般職員研修が済生会病院の研修施設（牛窓ブルーハイツ）で行われた。

リーダー同士のコミュニケーションはある程度できていたが、全職員の意見を聞く機会がなかったため、経営理念の学習、職員同士のコミュニケーション、病院の経営状態の情報公開などを行い、ともに育ちあう研修会をめざした。翌98年２月13日、14日にも第２回研修を行った。

参加者は第１回は28名（東山病院４名）、第２回は21名（東山病院４名）であった。

スリッパ（1991年）

スリッパの廃止

岡山旭東病院では、靴がなくなった、スリッパが汚いなどの苦情があり、いずれスリッパ廃止をと考えていた。1995年（平成７）６月、「病院医療の質に関する研究会」による第三者評価を受け、「スリッパの使用について再考願いたい」という評価を受けた。その結果を踏まえて院内で検討し、翌96年７月にスリッパを廃止した。

患者アンケートでは廃止の意見が強かったが、病院側からは、「廊下の清掃を頻繁にやらないといけない」「清掃コストが高くなる」「病院が汚くなる」など反対意見が多かった。廃止した結果は、患者さんにも好評で、職員も靴の紛失等で対応する苦労がなくなった。

また、1998年（平成10）に岡山あさひ病院も療養型病床群転換整備事業による病院改修工事の竣工を機に、スリッパを廃止した。

Ⅳ　病院行事と地域活動

愛の会の発足

経済の発展に伴う公衆衛生の整備、保険制度の普及、医学の進歩により、多くの疾病が克服され長寿社会になったが、人間の寿命は無限ではない。そこで、健康で生きがいのある毎日でありたいと願う人々に対して、脳・神経・運動器の専門病院として、特色のある健康情報を提供する手段のひとつとして、健康に関心のある人々を対象にした「愛の会」を設立した。事務局は、医療ソーシャルワーカー、管理栄養士が担当した。

1989年（平成元）４月14日、岡山旭東病院１階待合ロビーで第１回健康教室として「脳卒中って何でしょう？」を開催し、土井章弘院長が講師を務めた。毎週金曜日の午後１時から愛の会を開催し、健康瓦版「お元気ですか」を毎月１～２回発行した。そのほかにも、レクリエーションや親睦会などを開催した。

健康瓦版「お元気ですか」

健康教室「第1回 愛の会」

言語友の会「ふれ愛の会」がスタート

岡山旭東病院が開院して1年半が過ぎ、言語療法を受ける患者さんが増えてきた。急性期には訓練室で集中的に行い、家庭や地域で生きた言葉を使うことを目標とするが、言葉の障害は、社会生活で大変なハンディキャップとなり、家の中に閉じ籠もりがちで、家族もほとんど口をきかなくなる。

「あの人、顔を見んけど、どうしよん。通って来とるんかな。」こんなスタッフの言葉から、交流のできる場を設けようと、1989年（平成元）９月９日、言語患者交流会「ふれ愛の会」がスタートした。

この日、岡山旭東病院４階会議室で開催された第１回ふれ愛の会では、患者さん方の意見により、毎月第1土曜日を「ふれ愛の会」の日と決定し、

ふれ愛の会（1990年）

社会生活の前段階として、コミュニケーションの場を提供することを目的とした。

病院誌「愛」

病院誌「愛」の創刊

病院誌「愛」は、こころとこころの通じ合いを目的としたコミュニケーション誌として岡山旭東病院で1989年（平成元）に誕生。毎月1日を発行日とした。

編集担当は、言語聴覚士、医療ソーシャルワーカー、医療秘書で、職員、患者さんや地域の人々、病院外部の人々に伝える目的で発行された。

発行５日目には院内のロビーからなくなるほどの人気を博した。しかし、1994年（平成6）の７月号通巻第78号を最後に、財政事情から約1年間休刊した。翌95年秋より装いを新たに季刊誌として復刊した。

図書コーナーが誕生

病院図書コーナーが1989年（平成元）７月、岡山旭東病院の地階エレベーターを降りてすぐの場所に誕生した。ほとんどの本が患者さんや職員、他の病院の医師などの寄贈によるもので、蔵書数約1,700冊でスタートした。本はラベルを貼り、カード入れにカードを入れて貸出可能とした。

ジャンルは小説を中心とした文学、歴史、旅行記、芸術、料理等の本に、日経ビジネス、PHP、TIME等の雑誌のほか、労災、保険、社会保障などに関する本や平易な医学書、食事指導書までそろっていた。

図書コーナーで閲覧できるほか、雑誌類の一部は外来コーナーで読むこともできた。また、入院・外来患者なら誰でも借りることができ、一度に２冊まで１週間借りられた。入院中の患者さんで図書コーナーまで来ることができない患者さんは、病棟の看護師に頼んで借りることもできた。

同年11月11日までに約700冊、1日平均6〜7冊の本が貸し出された。ジャンル別では、マンガ、小説、趣味の本など読みやすい本が多かった。

2004年（平成16）には、患者図書室「患者様ライブラリー」が本館２階に移設され、蔵書4,500冊を有するまでになった。そして、患者さんはもちろん地域住民にも開放され、１人10冊まで貸出可能となった。

地下図書コーナー（1991年）

「約２ヵ月間入院しているという男性（37）は図書室の常連の一人。「ここに来ると入院生活を忘れて、本の世界に没頭できるんです」と笑う。」

（「山陽新聞」2010年12月12日付記事）

高齢者学級の取り組み

1988年（昭和63）12月６日から岡山旭東病院では年に２回ペースで、地域の公民館で高齢者学級を開催し、高齢者に脳の健康に関心を持って

Column　人を生かす経営〜人材育成の原点〜　土井章弘

中小企業家同友会の学習会での大田堯先生との出逢いから「教育」は「共に育つ」こと、共育が人の育つ環境を育てていくことを学びました。大田先生は、東京大学教育学部名誉教授・元都留文科大学学長であり、中小企業家同友会の「共育」を普遍的なものにしてくださいました。大田先生は「生命の特徴は、ちがう、かかわる、かわる、こと。人はひとりひとりが違い、自己中心であり、それが人権のもとにある。しかし、どこかで互いに依存している。かわる、ということも生命の特徴。蝶々が青虫から大きくなって蛹に成り美しい蝶々にかわっていく。人も自分で学んで変わっていく。人間は自分たちを創りだした文化に学び、間違いや躓き、忘却を糧としながら、ちがいを超えて、互いに結びあい協力しあう、すべてを身につけることができる。文化を創造的に学ぶことで身につけた、かかわりあいの知恵のことを教養とよぶのだ、と私は思う」と語られました。「人を生かす経営から、人が生きる経営に」を理想とされたのだと思います。石川啄木の「一握の砂」に「こころよく、我に働く仕事あれ、それをし遂げて死なんと欲す」をよく引用されました。こころよく働く仕事があれば、ひとは生きがいを持って仕事ができると思います。

共に育つ：1951年（昭和26）、当時中学三年生　佐藤藤三郎氏の答辞（やまびこ学校・無着成恭先生）

１）いつも力を合わせて行こう。
２）かげでこそこそしないで行こう。
３）いいことを進んで実行しよう。
４）働く事が一番すきになろう。
５）何でも何故？と考える人になろう。
６）いつでも、もっといい方法はないか、さがそう。

これが実践できれば、「共に育っていける」のではないかと思います。

めだかの学校という童謡をご存じでしょうか。

「めだかの学校」　童謡　唱歌　作詞　茶木滋

めだかのがっこうのめだかたち　　だれがせいとか　せんせいか
だれがせいとか　せんせいか　　みんなで　げんきにあそんでる

病院は、人材育成の学校「めだかの学校」だと思っています。職員ひとりひとりが先生であり、生徒でもあります。教える人も教わる人も共に育つ「共育」です。岡山旭東病院には「めだかの学校」という温室があり、メダカを飼っています。

人材育成は、当院の発展と同時に社会の発展に寄与するものと考えています。

（財団専務理事・総院長）

もらうよう取り組んだ。どの会場も出席者が多く、かつ非常に熱心で、終了後には具体的な質問がいくつも飛び交い、健康に関する意識の高まりが感じられた。

岡山旭東病院では、静岡県の浜松医療センターをモデルとして、脳の集団検診の実施等、地域住民により密接した医療を提供していくことを目指した。高齢者学級は、そのための健康情報の提供と収集を兼ねた取り組みだった。

第1回岡山旭東病院フェスティバル

1990年（平成２）10月12日から14日にかけて、第1回岡山旭東病院フェスティバルが開催された。

期間中、健康教室、コンサート、中庭の茶会、ロビーの展示会、バザー、ビデオ上映、健康相談、リハビリの体力測定などが行われ、バザーの収益金で車椅子２台を購入した。

自分たちが楽しむだけのお祭りでなく、病院の一般診療を続けるなかでの催しとして取り組まれ、企画段階から活発な意見が交わされた。

不安のなかでスタートしたフェスティバルであったが、開催してみると、初日の健康教室アンコール講義「ぼけない方法教えます」（院長）、「腰はなぜ痛くなるのでしょう」（副院長）など大盛況で、２日目のパネルディスカッションでは、様々な立場の人々に、これからの岡山旭東病院のあり方、進むべき道を示唆してもらうことができた。

２日目の夜に催された玉野マンドリンクラブによる音楽会は、つめかけた聴衆でロビーが満員になり、マンドリンのやさしい音色が聴衆を魅了した。

３日目は秋晴れに恵まれ、患者さんと地域住民、全職員による地域と一体となった病院祭にふさわしく、屋外での模擬店（うどん・たこ焼き・綿菓子・ポップコーン・風船・ヨーヨー釣り）はどれも予想以上の出来栄えで、予定時刻の１時間も前に完売となってしまった。また、中庭で開かれたお茶会も、「わび・さび」の世界に浸る機会を与えてくれた。

計画から実行まで手探りであった病院フェスティバルは予想以上の参加者があり、結果的に大成功を収めた。

第1回病院フェスティバル（1990年10月13日）

第1回病院フェスティバルでの「コンサート」

第1回病院フェスティバルでの「健康教室」

共育文化大学を開始

1992年（平成４）１月18日午後、第１回共育文化大学が岡山旭東病院４階会議室で開かれた。

これは、私たちが生きていくための心の栄養になるようにという主旨で企画された病院内に開かれた大学である。講師は、医療分野に限らず、幅広い分野から、その道の達人を招くことになった。当初は職員だけを対象にしていたが、講義の内容によっては患者さん、その家族の皆さんにも広く参加を呼びかけた。

第1回の講師は平井ゆりかご保育園の杉妙子園長で、「職場を持つお母さんの子育て論－託児所の現状より」と題する講義を行った。次いで、２月19日には青木内科小児科医院の青木佳之院長を講師に、「病児療育について」の講義を行った。

共育文化大学（1992年）

『臨床MRI入門』の刊行

1990年（平成２）３月、西本詮監修で土井章弘、土井基之、吉岡純二らを編者とする『臨床MRI入門－脳神経・運動器疾患の検査のポイント』が南江堂から刊行された。

本書では、脳腫瘍や脳血管障害などの頭蓋内疾患はもとより、脊髄を取り巻く脊椎骨・軟骨、さらには四肢骨・関節・靭帯などの運動器病変についても、神経疾患と関連して要求されるMRI画像の知識をあわせて解説している。

岡山旭東病院の医師らが編集・執筆に関わった初の医学書となった。

『臨床MRI入門』を刊行（「年報」より）

臨床MRI入門

Column　お取引先担当者様との懇談会開催　　大月俊之

当院では開院当初から、病院のみで経営をするのではなく「チーム経営」、すなわち地域の方々、お取引いただいている事業所も含めた「チーム」で経営することで病院が成り立っていると考えてきました。そのため、日頃からお取り引きいただいている事業所の皆様、病院モニターの方々と職員とが相互に親睦を図りながら、大きな転換期を迎えている医療について事業所の考えや互いの抱える課題などについて忌憚のない意見を交換し合い、「チーム」として学び、共に育つことを目的に懇談会を開催してきました。

第1回取引業者との懇談会

第1回目の懇談会は、1998年（平成10）6月27日（土）、本館４階会議室で「顧客満足について」をテーマに開催しました。岡山県中小企業研修情報センター青木勝男氏から「企業の環境整備を考える」のご講演をいただき、職員と取引先担当者とのパネル討論を行ないました。第2回からは講演会後に軽食による懇親会を開催し、第3回からは当院栄養課が料理を振る舞い、現在の懇談会形式で開催するようになりました。演者は、医療経営者や企業経営者のみならず、森岡まさ子氏、クリニクラウン 塚原成幸氏など多方面でご活躍の方による特別講演に加え、ソプラノ歌手村上彩子氏、ヴァイオリン 松北優里氏らによるコンサートを行うなど、「共に育つ」ということを経営のみならず、文化においても学ぶという観点から様々な分野の方々にご協力を賜り実施することができました。

懇親会のようす（2019年）

2008年の第11回には、91社143名の最多の参加をいただきましたが、会場のキャパシティを超えるほどで細かなサービスが行き届かない状況となりました。その後の12回より1社2名までの参加とさせていただくようになりました。しかし、2019年に第22回を開催して以降、新型コロナウィルスの感染拡大により開催を中止しておりました。2023年にようやく第23回を開催することができました。

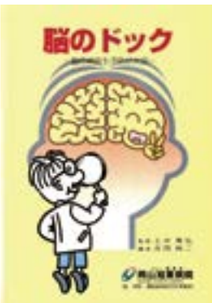
（岡山旭東病院業務管理課課長）

コンサートのようす

栄養課による料理

脳ドックの小冊子作成

岡山旭東病院でMRIシステムのSignaが稼働し始め、念願であった脳ドックが始まったのは1991年（平成３）８月であった。当時、人間ドックは普及していたが検査項目に脳は入っておらず、脳卒中予防に貢献したいという思いから始まった。それから２年余りの間に約1,000人が脳ドックを受けた。その結果、突然死の一因であるくも膜下出血だけでなく、まだ症状が出ていない脳梗塞や未破裂脳動脈瘤の発見、痴ほう（認知症）の予防が期待できることが分かった。これらの一部は日本脳ドック研究会で発表されたが、一般の人向けの脳ドックについての小冊子をつくることになり、脳ドックに関わっている職員15名による分担執筆によって、各人がその専門分野について書くというかたちの小冊子が制作された。



脳のドック

内容は、脳ドックの歴史から始まり、どのような検査が行われ、それによってどのようなことが期待できるかなど、一般の人々に分かりやすく解説するものであった。また、岡山大学脳神経外科・大本堯史教授、浅利正二助教授に特別寄稿をいただき、51ページの小冊子が完成し、院内の売店や書店で販売された。

脳ドックを受けた人々を集めて、報告と予防教育として1992年（平成4）9月19日に「愛脳会」第1回集会を開催した。その後、1996年（平成8）には「会員制 愛脳会」を60名で発足した。

愛脳会の講演（1992年9月19日）

「交通死亡事故防止支援の医師の会」の結成

1990年（平成２）４月、交通事故患者の治療に当たっている岡山県下の脳外科医らが「交通死亡事故防止支援の医師の会」を結成し、岡山旭東病院の土井章弘院長が代表に就いた。会を結成したのは、ほかに岡山労災病院、国立岡山病院、岡山赤十字病院、水島中央病院の脳外科医ら６名。

「土井院長は事故でけがをした人が病院に運ばれ、治療を受ける様子や、一命は取り止めたものの、時間のかかるリハビリテーションの苦労を、直接診療に当たる医師が大勢の人に話すことで、事故防止になるのでは－と、会の結成を計画。知人の脳外科医らの賛同を得て、このほど発足式を行った。」

（「山陽新聞」1990年４月14日付記事）

第三者機関による評価を受審

1995年（平成７）６月28日、岡山旭東病院は「病院医療の質に関する研究会」による第三者の評価を受審した。この会は日本医科大学管理学教室に事務局があり、病院の機能評価をどのように進めるかを研究している機関であった。

その後、1998年（平成10）９月25日には、日本医療機能評価機構の第三者評価を受審した。

それによると、当院は「脳神経運動器疾患の総合病院」と明確に位置づけ、患者・職員がともに学び、ともに育つ「共育」の精神を掲げている。また、院長の「病院は最高のサービス業」という理念も、病院機能評価の受審に対する強い意欲も、高く評価できる。しかしながら、病床規模の拡大後間がないためか、管理・業務面においていくつかの改善項目が見受けられる――との評価を受けた。

第３章

成長と発展

（1998～2006）

岡山旭東病院外観（2004年８月）

岡山あさひ病院外観

Ⅰ　組織の変遷

岡山旭東病院の増改築

岡山旭東病院は2000年（平成12）６月に第４次病院増改築工事が完成、同年７月には脳卒中センターが完成し治療を開始した。これにより、リハビリテーション科への患者紹介が迅速に行われ、早期リハビリテーションが可能になり、早い人では、入院当日から病棟訓練を開始した。さらに、リハビリテーションスタッフが病棟の申し送りに参加するなど、病棟とリハビリテーションの関わりが深くなった。さらに2004年（平成16）８月には本館改修工事が完了し、第５次病院増改築工事が完成した。

東山病院を岡山あさひ病院へ名称変更

東山病院は、1997年（平成９）６月より老人保健拠出金事業助成金（療養型病床群転換整備事業分）の交付を受けて改修工事を行った。しかし、広い病棟面積を要する療養型病床の基準を満たすためには199床の病床は確保できないため、1997年（平成９）、岡山旭東病院に60床を転床し、139床に減床した。翌98年５月には、療養型病床群整備事業の要件とされていた病床削減のため、10床を国に返還し129床となった。また、病院機能は老人病院からリハビリテーション専門病院への転換を図った。

1998年（平成10）４月、名称を「岡山あさひ病院」と改め、土井健男名誉院長、鼠尾祥三院長の新体制のもと新たなスタートを切った。

改名にあたっては法人内の全職員から名称を応募し、投票で決定した。ただ、地域住民には「東山病院」の印象が根強く、「岡山あさひ病院」として認知されるには長い歳月を要した。

以来、岡山あさひ病院はリハビリテーション病院として機能強化し、入院はリハビリ目的の患者のみを受け入れるようになった。亜急性期の脳卒中患者が大半を占め、平均在院日数は90日程度となった。

リハビリテーションの機能の充実

岡山あさひ病院では、療養型病床群転換整備事業に併せてリハビリ訓練室を中館２階より北館１階に拡張移転し、理学療法（Ⅱ）・作業療法（Ⅱ）の施設基準を取得した。しかしリハビリテーション専門病院を目指す中でリハビリテーションの最上位の施設基準取得を計画し、1999年（平成11）にリハビリ訓練室の改修工事に着手した。改修の内容は北館1階にあった作業療法室と通所リハビリテーションを中館1階に移設し理学療法室を拡張、中館1階の厨房・職員食堂は南館1階に移設するというものであった。

設計施工から約１年の歳月をかけ2000年（平成12）5月に総合リハビリーション施設の施設基準を取得した。また、もう一つのリハビリテーションの施設基準である言語聴覚療法についても施設基準の取得を目指し、2002年（平成14）4月に言語聴覚療法（Ⅱ）を、そして同年12月には言語聴覚療法（Ⅰ）と集団コミュニケーション療法料の施設基準を取得した。その後の2006年（平成18）4月には診療報酬改定により、リハビリテーションは理学・作業・言語聴覚療法料より疾患別リハビリテーション料に診療料が移行した。それに伴い脳血管疾患等リハビリテーション料（Ⅰ）・運動器リハビリテーション料（Ⅰ）の施設基準を取得した。また、2016年（平成28）4月に廃用症候群リハビリテーション料が新設され、当該リハビリテーション料（Ⅰ）の施設基準も取得している。

居宅介護支援事業所の開設

1999年（平成11）４月の介護保険法の施行を受けて、10月に、岡山あさひ病院に「ケアプランサービスあさひ」、岡山旭東病院に「ケアプランサービス旭東」を開設した。両居宅介護支援事業所ともケアマネージャー１名でのスタートであったが各々３名まで増員し、地域の要介護者の介護サービス利用にあたってのケアプラン作成等に寄与してきた。2010年（平成22）には「ケアプランサービス旭東」を「ケアプランサービスあさひ」に統合している。2011年（平成23）11月の岡山リハビリテーション病院の新築移転の際には「ケアプランサービスあさひ」も倉田の地に移転する計画であったが、倉田は岡山市都市計画による市街化調整地域に該当していため移転の許可がおりず、旧病院跡地の奥市に事業所を留めることとなった。その後の2013年（平成25）４月の旧病院跡地でのサービス付き高齢者向け住宅「岡山ハッピィライフ操風」の開所に伴い、その４階に「ケアプランサービス操風」として現在も運営している。

ケアプランサービスあさひ

売店

エムアンドエルジャパンの設立

2001年（平成13）７月、操風会の職員が株主となり、エムアンドエルジャパン株式会社が設立された。社名はメディカル（medical）のMとライフケア（lifecare）のＬに由来する。

主な事業内容は、医療機器の販売及び病院内の医療消耗品の在庫管理、岡山旭東病院の売店の運営、病室のテレビ・冷蔵庫の貸し出し、駐車場の管理業務などであった。売店事業は、2023年（令和５）９月にコンビニエンスストアとしてリニューアルオープンした。

Ⅱ　人とモノの変遷

岡山旭東病院専門性の強化

1998年（平成10）４月、岡山旭東病院では、高度医療機器の増加に伴い、医療機器の保守管理・教育等を担うため臨床工学課を独立させた。1999年（平成11）に麻酔科医が１名増員し、ICU管理が可能になった。2000年（平成12）にはサイバーナイフ治療導入のため、サイバーナイフ専任医２名となった。2001年（平成13）４月に神経内科医が２名増員され３名体制となり、脳梗塞、頭痛、めまいなどを一手に引き受け、神経内科退院患者は480人、外来新患数は3,800人を超え、翌年には神経内科退院患者は670名を超え、外来新患数は5,100人を超えた。2003年（平成15）４月に整形外科医が１名加わり３名体制となり、10月には脳神経外科医も１名加わり５名体制となった。一方で神経内科医は２名体制となった。

2004年（平成16）４月、放射線科医が赴任しPET・RIセンターが稼働し、脳ドック専任医も赴任して健診センターが充実した。また、手術室には脳外科用ナビゲーションシステムやモニタリングが導入され、手術の安全性が飛躍的に向上した。

岡山あさひ病院の病床再編

1998年（平成10）5月から岡山あさひ病院は、療養型病床群転換整備事業完了により療養型病床90床・一般病床39床で再スタートしたが、介護保険法の施行を受け、入院リハビリ機能の強化のため繰り返し病床の再編を実施した。

長期老人病院からの転換のために、一般病棟38床は一般病棟入院基本料（3:1看護）の施設基準を取得した。これにより一般病棟は入院期間（平均在院日数）60日以内を要件とする病棟となり、月に最低10名の入院患者受け入れが必要となった。看護にとっては大変な業務量の増加を招いたが、病院変革のため病棟看護師の理解と協力のもと実現した。その後、一般病棟は他病院からリハビリ目的で転院して来られる患者様の受入病棟となった。

2000年（平成12）４月の介護保険法施行を受けて、県の要請もあり介護療養型医療施設38床を医療療養病床からの転換により取得した。併せてその病床の中で２床をショートステイ（短期入所療養介護）の病床として在宅支援に活用した。しかしその後は回復期リハビリテーション病床増床のため、段階的に介護療養病床を医療療養病床・回復期リハビリ病床へ転換し、2006年（平成18）５月をもって全ての介護病床を医療病床へ転換した。

2000年（平成12）４月に診療報酬で制度化された回復期リハビリテーション病棟入院料の施設基準を2001年（平成13）11月に北３階病棟38床で取得した。2002年（平成14）６月に北２階病棟52床、2006年（平成18）７月に全ての療養病床（北２・北３階病棟90床）を増床した。その当時にはほぼ全ての入院患者さんが回復期リハビリテーション病棟入院料の適応であったが、一般病棟は患者食堂がなく、また廊下幅も手狭であったため、回復期リハビリテーション病棟入院料の施設基準の取得はできなかった。しかし2011年（平成23）11月の病院の新築移転を機に、129床の全ての病床を回復期リハビリテーション病床とすることができた。また入院料の加算として、2011年（平成23）６月に365日リハによる「休日リハビリテーション提供加算」を、2012年（平成24）６月に１患者１日６単位以上のリハビリテーションの提供による「リハビリテーション充実加算」を、そして2014年（平成26）５月には医師・社会福祉士の病棟専従配置による「体制強化加算」を取得している。

岡山あさひ病院中庭

岡山あさひ病院リハ室

岡山あさひ病院CT

岡山あさひ病院で病室のネームプレート廃止

1998年（平成10）４月、岡山あさひ病院は病室入口のネームプレートの表示をやめた。

岡山あさひ病院は軽度の老人性認知症の患者さんも多く入院しており、以前から「表示を仮名にしてほしい」などという要望もあった。名前の表示はもともと医療法上の義務はなく、入院していることを他人に知られたくないという患者さんの心情にも配慮した。患者さんやその家族には好評で、見舞いには案内態勢を充実して対応した。

通所リハビリ送迎車(2001年)

岡山あさひ病院で老人デイケア(通所リハビリテーション)を開始

1998年（平成10）５月、在宅支援部門として老人デイケアを開始した。当時の老人デイケアの単価は約１万円と高く、入院ベッドに等しいとまでいわれていた。最初は医師・看護・リハビリ職員４名、１日あたり利用者15名（1単位）の規模であった。その後老人デイケアは介護保険の通所リハビリテーションに移行することとなる。開始以降は旧病院での２度の拡張移設工事と病院新築移転を経て、現在は１単位40名（２単位）規模のリハビリに特化した短時間の通所リハビリテーションとして運営している。

職能資格人事制度の導入

1999年（平成11）４月、岡山旭東病院では、健全な病院経営の一環として、職員一人一人の能力開発および努力した職員に報いる職能資格人事制度を導入した。翌年4月には岡山あさひ病院も導入している。この制度の中では職員個々の経営理念・方針・目標、および部署計画に基づいた年間計画の設定と、目標・中間・育成面接が大きな柱となっている。岡山あさひ病院では、人事考課結果の標準化等の課題のため2014年度に一時中断したが、2022年度より再度法人内共通の制度での運用を再開した。再開後は考課者研修の実施や規程・手順・様式の見直しを繰り返し行い、考課結果の標準化を進めているところである。

磁気診察券

紙の診察券から磁気診察券に変更

1999年（平成11）７月、岡山旭東病院は紙の診察券から磁気診察券（エンボス）に切り替えた。磁気診察券には、患者さんの氏名、性別、生年月日をエンボス加工し、専用プリンター（インプリンター）で伝票の宛名書きができるようになった。

また、10月１日には、再来受付機が稼働し、診療科別の受付番号を患者さんに渡すことで待ち時間を短縮でき、サービスの向上につながった。

この磁気診察券は、磁気システムと連動させ、診療情報を検索するキーとなるなど、システム構築の第一ステップとして導入された。

NCUからICUへ

1999年（平成11）10月１日、岡山旭東病院のNCU（脳神経外科集中治療室）が24時間体制で管理されるICU（集中治療室）へと転換され、看護師１人夜勤勤務から３人での夜勤勤務へ変更した。

質の高いケアの提供を行うために、ICUの必要性はそれ以前から理解されていたが、看護部にとってはハード・ソフト面等、多くの困難があった。看護師不足の状況下にあって、看護の質を維持していきながら、全体的にやっと安定してきたという時期でもあり、かなりハードルの高いチャレンジであった。

サイバーナイフ治療を開始

2000年（平成12）１月、岡山旭東病院に放射線治療用ロボット「サイバーナイフ」が導入され、６月１日からサイバーナイフ治療が開始された。５月末までに、アメリカ本国で５施設、日本で２施設のサイバーナイフが稼働しており、岡山旭東病院は世界で８番目の施設となった。

サイバーナイフとは定位放射線治療装置の一種で、正常部分にはほとんど影響を及ぼすことなく病変部を治療することができる。あたかも手術で病変部へメス（英語でナイフ）を加えるように治療を行うという意味で、サイバーナイフと名づけられた。

しかし、2002年（平成14）12月に、納入業者が厚生労働省への届出を怠っていたことが発覚して自主回収することになり、サイバーナイフセンターは12月４日、メディテックジャパンの治療中止要望に応じて治療を一時中止した。そして、2003年（平成15）12月26日、新たに厚生労働省の認可を得てサイバーナイフIIとして治療を再開した。担当医は佐藤医師、それに続き馬場医師であった。

サイバーナイフ導入以来、毎年250～330件の放射線治療を行ってきている。

サイバーナイフ治療室(2000年)

サイバーナイフII(2003年)

サイバーナイフセンター開設記念講演会
(2000年３月20日)

脳卒中センターの開設

2000年（平成12）７月、岡山旭東病院に脳卒中センターが開設された。

備品不足やスタッフの不慣れ等、戸惑いのなかでの開設となった。運営、記録用紙等は熊本や山口の済生会病院のものを参考にした。

2002年（平成14）11月27日付「山陽新聞」には、以下のような記事が見られる。

「脳卒中は、発症からできるだけ早く治療を始めなければ障害を大きく残すこともあり、急性期の対応が重要だ。岡山旭東病院は2000年７月に脳卒中センター（36床）を開設、発症から約２週間の急性期の治療を専門に行っている。

同センターの入院患者は年間約450人。そのほぼ８割を占める脳梗塞を神経内科医（３人）、脳内出血・クモ膜下出血を脳外科医（３人）が担当する。専門の看護師を配置し、リハビリテーション科、放射線科が連携している。

まず診察とMRIやMRA、CT検査を行うが、救急の場合は30分以内の治療開始をめざす。早期の機能訓練も重視し、クリニカルパスの導入によって、スタッフ全員が治療の進行や問題点を把握、見落としを防ぎ、医療の質の確保に努めているという」。

患者様アドボカシー室入口（2001年）

アドボカシー室の開設

2001年（平成13）４月、岡山旭東病院にアドボカシー室を開設した。

米国視察で「アドボカシー室」（アドボカシー：代弁弁護、権利擁護）を見学し、患者、家族の立場を代弁して医療ソーシャルワーカーが活動している実態から学びを得て、多様化するニーズに第三者的視点を持って対応することができるよう、日本で最も早くアドボカシー室を開設した。そのため、多くのメディアや病院等から取材・見学を受けた。その後、多くの公的病院等でもアドボカシー室が設置されるようになった。

リハビリテーション週７日制の実施

2001年（平成13）５月、岡山旭東病院では「リハビリテーションに休みはない」という考えのもと、全国に先がけてリハビリ訓練の週７日実施体制を開始した。

また、早期離床を掲げ、早期車椅子離床や早期立位歩行訓練等、次々と新たな取り組みを実施したが、急性期の早期リハビリテーションの概念は当時の日本では珍しく、他施設のリハビリ部門から揶揄されることもあったものの、その後、日本においても急性期リハビリテーションのスタンダードとなっていった。

電子カルテ利用の様子

電子カルテシステムの導入

2003年（平成15）１月４日、岡山旭東病院にＰＡＣＳ（医療用画像管理システム）が導入された。病院の検査画像をすべてデジタルデータで保存し、配信から診断まで総合的に管理するシステムで、画像がデジタル化され、一元的に保管・管理されるようになった。同時に、モニター診断が開始された。

診察室呼び出し表示画面

2003年５月、電子カルテの本格導入に向けてワーキンググループを立ち上げ、10月より、病棟オーダリングシステムを稼働し、検査オーダーや食事オーダーの運用が始まり、次いで処方オーダーも開始した。2004年４月からは外来オーダーを開始し、本格的に電子カルテシステムが稼働した。健診センターでは、PACSを用いてPET画像を見ながら、がんドックの結果説明がなされ、６月には脳ドックの説明もモニター画像に変更、10月には完全画像フィルムレス化が実現した。

2005年（平成17）４月には、リハビリ、内視鏡、注射等の各オーダーが開始され、2006年（平成18）４月に電子カルテは全稼働となった。

一方、電子カルテのデータを利用して、予約あり診察待ち時間、予約なし診察待ち時間、会計待ち時間、ＭＲ検査待ち時間の集計を開始し、毎月の診療情報管理委員会で報告した。待ち時間をシステム的に自動で集計する画期的な取り組みとなった。

回復期リハビリテーション病棟の設置

2003年（平成15）５月、岡山旭東病院に回復期リハビリテーション病棟を設置した。急性期の治療期間を終えてもリハビリテーションが必要な患者さんは多く、長期的なリハビリテーション支援が必要な患者さんの在宅復帰を目指した。

病床稼働率の伸び悩みにより収益的にも厳しい状況が続いたこともあり、経営的な側面を踏まえての判断であった。

特別室

増築改修工事の起工式（2003年）

外来

岡山旭東病院増築改修工事の起工式

2003年（平成15）３月25日、岡山旭東病院増築改修工事の起工式が行われた。

ＵＲ設計が設計し、施行は大林組が受け持ち、ドックなどの検診部門の充実、機能的なアメニティの提供、診療部門（外来・入院）の充実が図られた。

増築は鉄筋コンクリート一部鉄骨造、地上４階建てで、建築面積は2,570.24㎡、延床面積6,026.37㎡。改修工事の対象床面積は3,406㎡。増築工事は本館及び西館の北側で、工事期間は2003年（平成15）２月21日から2004年（平成16）１月31日まで。改修工事は本館内部で、工事期間は2004年（平成16）２月１日から同年7月31日までと、２期に分けて行った。

本館2階健康センター

宿泊用夕食「薬膳懐石」

がんドック昼食「松花堂弁当」

健康センターの開設

1991年（平成３）8月、岡山旭東病院では脳ドック開始とともにドック業務を開始した。

2004年（平成16）４月本館2階に健康センターを開設した。PET-CT導入に伴い、がんの早期発見を目的としてPET-CTを利用した、がんドックを開始し、宿泊ドックも開始した。栄養課によるがんドック専用の食事提供も開始した。

2010年（平成22）には脳ドック学会認定施設認定取得した。

サイクロトロンの導入とPET- RIセンターの開設

2003年（平成15）12月、岡山旭東病院に岡山県で初めてPET用サイクロトロンが導入された。当時、PET核種のデリバリーがなく、PET開設施設ではサイクロトロンの導入が必要であった。翌04年３月にPET-CT装置とSPECT-CT装置が各２台導入され、PET-RIセンターが開設された。

サイクロトロンとPETの導入経緯について、土井章弘院長は、2005年（平成17）８月29日付「山陽新聞」における岡山大学・金澤右教授との対談で、次のように述べている。

「PETはもともと脳の循環機能や代謝を見るのに開発され、早い時期から注目していた。この機器にがんの早期発見もできる機能が加わったので、ぜひ岡山に入れたいと考えた。岡山は医療福祉が非常に進んでいると言われているが、ばく大な設備費が必要でPETがなかったため、患者さんは他県に受けに行っていたのが現状。岡山旭東病院ではPET-CTとともに、PET用の薬剤を製造するサイクロトロンを導入。画像診断のセンター的な役割を地域貢献の意味で果たすことができればと考える。」

また、導入の成果については以下のように述べている。

「従来の検診では調べにくかった臓器を含め、特定の部位や臓器に狙いを定めずに体の広範囲を一度に検査でき、良性、悪性の判断、転移や再発の把握もできる。アルツハイマーや心臓病の発見にもつながる。岡山旭東病院では昨年４月に導入し、今年７月までで約2,800人が検査した。このうち45％ががん検診。がんの発見率は２％と従来の検診の発見率（0.2％）の十倍に達している。検診で訪れ、何の自覚症状もないのに見つかったケースもある。」

PET-CT

サイクロトロン

岡山地域リハビリテーション広域支援センターの指定

2004年（平成16）３月、岡山あさひ病院は岡山県から岡山地域リハビリテーションセンター広域支援センターの指定を受けた。カバーする地域は、岡山市、玉野市、倉敷市児島、瀬戸内市、吉備中央町、建部（現岡山市に合併）と広域で、役場や事業所、社会福祉協議会などの協力を得ながら、健康教室や研修会の開催、現場のスタッフや介護者などへの技術指導を行った。また相談窓口を設置し、電話で62件の問い合わせと、メールで286件に対応した。勉強会は、第１回「転倒予防への評価と対策」（７月３日、118名参加）、第２回「福祉用具における自立支援、住宅改修」（100名参加）、第３回痴呆性高齢者の理解と対応」（132名参加）、第４回「失語症とそのリハビリテーション」（110名参加）、第５回「在宅での嚥下障害と嚥下食の考え方」と続き、2006年（平成18）３月末に当事業が終了するまでに計９回開催した。

広域支援センター

広域支援センター

訪問リハビリテーションの開始

2006年（平成18）４月、岡山あさひ病院は、リハビリテーション病院としてさらなる在宅支援の充実を図るため、在宅支援室を設置し、訪問リハビリテーションを開始した。

“臓器摘出”を想定
医師ら各自の役割確認

“臓器摘出”を想定の記事（1999年6月3日 山陽新聞社提供）

Ⅲ　職場環境の改善

臓器摘出シミュレーションの実施

1999年（平成11）６月２日、臓器移植法に基づく臓器提供施設である岡山旭東病院で、岡山大学医学部附属病院等の協力を得て、臓器摘出を想定したシミュレーションを行い、約20名が参加した。

シミュレーションはくも膜下出血で入院中の50代女性患者が臨床的脳死状態に陥り、患者は全臓器提供を示す臓器提供意思表示カードを持っているとの想定で、主治医から連絡を受けた県移植コーディネーターが家族２人に脳死判定の方法等を説明し、家族の臓器提供の承諾、院内の臓器移植等管理委員会（倫理委員会）の召集ののち、摘出チームが到着、といった手順で行われた。

当院は1998年（平成10）10月６日に臓器提供施設に選定され、99年５月にはマニュアルを完成させ机上シミュレーションを実施した。今後は脳外科と神経内科へ入院する患者さんにカード所持の有無を確認することとした。

（以上、「山陽新聞」1999年６月３日付記事「〝臓器摘出〟を想定　岡山旭東病院でシミュレーション」参照）

アメリカ・カナダ研修と短期留学

1999年（平成11）１月社会医療研究所の主催でアメリカ・カナダ研修が行われ、岡山旭東病院から、リハビリテーション科医師、薬剤師が参加した。「亜急性期の医療」。Health Eastという医療機関が運営するベセスダ病院と、有名なメイヨ・メディカルセンターで見学やレクチャーを受けた。

ベセスダ病院ではリハビリテーションを見学し、メイヨでは主にレクチャーを受けた。急性期医療は高額の医療費が必要で、１日３時間以上のリハビリ訓練やレクリエーションセラピー、整形外科の人工股関節置換術や膝関節置換術の入院期間が５～６日と短いこと、亜急性期（サブアキュート）の病院への転院、「チャーターハウス」と呼ばれる老人アパートでの訪問ＰＴ治療1週間で自宅退院するシステムの紹介を受けた。

また、電子カルテの最新設備が導入されたアリゾナ州の病院も見学。人工衛星を使い世界中の情報が取り込まれることや、メイヨが運営するフロリダやロチェスターの病院が共通カルテを利用でき、遠隔地のかかりつけ医と電子カルテで画面を見ながら討論できるペーパーレスの様子を見学した。

同年には、理学療法士がアメリカ・ミネソタ州のベセスダ病院にも数カ月間の研修に参加し、新たなリハビリテーションを学んで多くの知見を岡山旭東病院にもたらし、急性期リハビリテーションの取り組みへと繋げることができた。

2001年（平成13）９月、岡山旭東病院の高見事務長、岡山あさひ病院の山本事務長、臨床検査課の藤岡が、「カナダ・アメリカリハビリテーション視察研修」に参加した。オンタリオ州を中心に、カナダの医療・保険事情、リハビリテーション事情について見学をしたが、アメリカは同時多発テロが勃発のため、入国不可となった。

その後、社会医療研究所主催の北米視察ツアーは2016年までに17名が参加し、2012年には北欧・欧州高齢者医療・福祉研修には３名が参加した。また、公私病院連盟主催のハワイ、オーストラリア医療視察団には2009年から2015年までに看護師15名が参加し、ＧＥ企業研修へも医師を中心に参加するなど、海外研修へ積極的に参加して病院運営にいかしてきた。

日本医療機能評価の認定

2000年（平成12）６月に、岡山あさひ病院は、日本医療機能評価の複合種別Ａ（一般病棟と療養病棟のケア・ミックス）で、岡山県下の病院では８番目（複合種別Ａでは初めて）に認定された。その後、2005年（平成17）６月に「審査体制区分２（Ver4.0）」の更新認定、2010年（平成22）10月に「審査体制区分２（Ver6.0）」の更新認定と2011年（平成23）５月に「リハビリテーション付加機能」が認定された。しかしその後、病院新築移転や電子カルテの導入などの大きな出来事があり、いったん2014年（平成26）12月に認定更新を辞退したが、2023年（令和5）2月に再度受審を行い、6月に「３rdG：Ver.2.0審査体制区分１（リハビリテーション病院）」が認定された。また、「高度・専門機能リハビリテーション（回復期）Ver.1.0」を2023年４月に受審し10月６日に岡山県で初めて認定された。

アメリカ研修報告会（1999年３月）

アメリカ･カナダ医療視察
（2002年１月１日）

高度･専門機能リハビリテーション病院認定

「ISO自己宣言に向けて」講演会
（1999年10月）

ISO14001の取得

1999年（平成11）以来、岡山旭東病院では、環境保護の立場からISO14001の自己宣言に向けて準備を行い、病院の環境整備にも配慮した。2000年（平成12）１月からISOの自己宣言を行い、植栽と花壇づくり計画を始めた。2002年（平成14）には、癒しの環境整備の一環として、地球環境をよくするという観点から、環境ISO14001の取得に向けて準備し、2003年（平成15）10月30日に取得することとなった。

また、ISO取得事業の一環として、残食を肥料に変換するコンポスト「有機君」を導入。そこからできた肥料を患者さんや近所の住民に無料で配った。さらに、裏紙の再利用、病院周辺の清掃活動、職員研修等、様々な活動を行い、職員に周知するための活動として、新人研修やサブリーダー等の研修でも講演を行った。

医療の現場に「医師事務作業補助者」誕生

2004年（平成16）、岡山旭東病院では多忙な医師の職場環境を改善すべく、医師の事務的業務負担を軽減しようと、全国に先駆けて事務職員を４名新規採用して各病棟に配置し、各種書類の下書き業務を開始した。その４年後の2008年（平成20）に医師事務作業補助体制加算が新設され、全国の医療の現場に「医師事務作業補助者」が誕生した。

2007年（平成19）に診断書専任者を配置し、翌08年に、診断書作成支援システムMEDI-Papyrusを導入し、これまで手書きで記載していた診断書がシステムで容易に作成できるようになった。2012年（平成24）から外来診察室に代行入力者を配置し、医師が外来診療をスムーズに行えるようになり、待ち時間短縮にも繋がった。2016年（平成28）11月には岡山労働局によるベストプラクティス企業に選出された。同年、NPO法人日本医師事務作業補助者協会 岡山県支部を発足した。

「癒しの環境整備委員会」の発足

2004年（平成16）、岡山旭東病院では、癒しの環境整備を推進するために、土井章弘院長の発案で「癒しの環境整備委員会」を発足した。発足当時は事務職を中心に８名で活動していたが、実際に患者さんと接する現場スタッフの意見を取り入れることを重視し、コメディカルスタッフ（看護師、介護福祉士、リハビリスタッフ、放射線技師等）や療養環境を司る専門職（調理師、ガーデナー等）を加えて活動するようになった。

プライバシーマークの付与認定

2005年（平成17）４月、個人情報保護法が施行に伴い、岡山あさひ病院では、医療機関として厳正に対応するため、管理職８名が「JIS Q 15001 : 1999 内部監査員養成講座」を修了し、また個人情報保護のための体制やルール等を整備し、2007年（平成19）９月にプライバシーマークの認定を取得した。岡山旭東病院でも同月プライバシーマークを取得した。

Ⅳ　病院行事と地域活動

第1回旭東メディカルフォーラムの開催

1998年（平成10）10月24日、岡山旭東病院理学療法室で、地元の医師に岡山旭東病院が行っている医療についてよく知ってもらい、日頃の診療に少しでも役立つ情報を提供できればとの願いから、第１回旭東メディカルフォーラムを開催した。

フォーラムでは、特別講演として川崎医療福祉大学の柚木教授に、「最近のスポーツにおける医学的話題」と題して子どもの頃からのトレーニングの正しい方法について、また、札幌麻生脳神経外科病院の斉藤院長に「脳神経外科最前線」の講演を受けた。その後、職員による手作り懇親会・パーティーを行った。

ふれあい教室「あさひ」の開催

岡山あさひ病院では、2000年（平成12）4月から2009年（平成21）まで入院患者や近隣の町内の方々を対象に、医師をはじめとする各職種がテーマごとに講師となり健康教室を年2回開催した。2019年（平成31）4月より「あっぱれ桃太郎体操」として地域住民を対象とした健康教室の開催を開始した（2020年よりコロナ禍のため中断）。

第1回旭東メディカルフォーラム
（1998年10月24日）

第1回旭東メディカルフォーラム
（1998年10月24日）

第１回ふれあい教室「あさひ」

地域への参画

岡山あさひ病院では地域とのつながりを深めるため、2000年（平成12）より地域の三勲学区の運動会・ソフトボール大会・バレーボール大会等に御成町内会チームの一員としてスタッフが参加し親睦を深めてきた。また町内主催の健康教室にも2005年（平成17）4月よりは町内会の役員に当時の鼠尾院長と山本事務部長が選出され、役員会等に出席している。また町内主催の健康教室にも両名が講師として講義を行っている。その他、2001年（平成13）8月には岡山桃源まつり「うらじゃ」へ職員の有志が参加して踊りを披露している。

岡山あさひ病院夏祭り

夏祭りの開催

2000年（平成12）7月、岡山あさひ病院では、入院・外来患者さんとご家族、近隣住民を対象に夏祭りの開催を開始した。屋台では100円でたこ焼き・かき氷・フランクフルト・ジュースなどの飲食物等を提供し、フラダンスや盆踊り、カラオケ大会等を行った。最後に小規模ながら打上花火で終演するのが恒例となった。また、当時地域の夏祭りの子ども神輿が来院し、院内を声も高らかに練り歩いてくれた。

リハ講演会開催（近森病院石川先生）

第1回リハビリテーション講演会の開催

2000年（平成12）11月25日、岡山あさひ病院で第１回リハビリテーション講演会が開催され、石川誠医師による「高齢社会における地域リハビリテーションの展望」というテーマでの講演が行われた。約150名の参加者があった。

リハビリテーション講演会はその後毎年開催し、外部から講師を招き、その年ごとのテーマによって講演会を開催した。

創刊「あおぞら」表紙

広報誌「あおぞら」創刊

2000年（平成12）２月、岡山あさひ病院は、患者・地域の方へ向けて病院行事やニュース、健康に関する情報などを発信するため、広報紙を発行した。第１号では表題が決まらず、第２号より「あおぞら」に決定した。季刊誌として年４回の発行とした。

「高血圧　生活セミナー」出版

2001年（平成13）６月、岡山あさひ病院の鼠尾祥三院長は、循環器専門医としての30年の臨床経験を踏まえ、高血圧の治療や予防に関してまとめた小冊子を出版した。外来患者を中心に無料で配布した。

「高血圧　生活セミナー」

Dr. パッチ・アダムス岡山講演会と「おかやまあかいはな道化教室」

2002年（平成14）９月１日、NPO法人・21世紀癒しの国のアリス主催で、アメリカの医師パッチ・アダムスを招き、岡山ロイヤルホテルで講演を開催し、1,500名が参加した。

医師であるパッチ・アダムスは自らクラウン（道化師）となって人を癒し、無料医療組織であるGesundheit In Stitute（お元気で病院）を設立し、診療活動を行いながら世界各国で講演を行っている。

講演会後の11月24日から、岡山旭東病院では、パッチ・アダムスの「笑いやユーモアは人の心を癒し健康にする」というメッセージを広げていこうと、道化師の塚原成幸さんを案内人として「おかやまあかいはな道化教室」を開始した。

塚原さんは1990年（平成２）からプロの道化師として全国で公演をする一方、各地でボランティア活動として小児病棟を訪ね歩き、闘病中の子どもの笑顔を引き出すクリニクラウン（臨床道化師）の養成も行っている。

教室は、ワークショップや課外活動を通して道化的な発想を学び、それを日常に活かしていきながら、笑顔になれるからだと環境を育んでいこうという趣旨のもと、年に５、６回程度教室を開催し、毎回20名ほどが参加した。

「兵庫県加古川市から参加した薬剤師小田充恵さん（32）は「発想の転換ができて面白い。一人で調剤する仕事の緊張感のバランスが保てるようになった」と話す。」

（「山陽新聞」2009年３月30日付記事）

Dr. パッチ・アダムス岡山講演会2002ボランティア・スタッフ

Dr. パッチ・アダムス岡山講演会2002記録集

院内研究発表会の開催

2002年（平成14）2月、岡山あさひ病院では「各専門職部門のレベル

Column 「おかやまあかいはな道化教室」について　土井裕子

2002年９月１日に岡山旭東病院主催Dr.パッチ・アダムス岡山講演会が開催されました。映画でも有名になった、精神科医ハンター・アダムスさん。自らの入院体験中、“笑い”が人の心や病に大きな癒しになると気づき、世界中で講演活動している方です。来場者1500名、ボランティアスタッフ80名。医学生、看護学生、会社員、主婦など、“愛と笑いとユーモア”のテーマを分かち合った素晴らしい日となりました。

その２か月後にスタートしたのが、おかやまあかいはな道化教室です。パッチの講演会で企画から関わってくださった、道化師 塚原成幸さん（現在は清泉女子短期大学准教授）のもとで、年に４回、20名ほどの方と共に様々なワークを通じて“笑えるカラダと環境づくり”を学んできました。凝り固まっている思考をほぐし、物事の見方を広げていく、ユーモアはものすごい可能性を秘めたものだと気づかせていただきました。一瞬にして、緊迫した空気をやわらげ、人と人との距離を縮め、不完全な自分を許すゆとりが生まれ、そして他者への許しにつながっていきます。

年末の理事長先生はじめ皆様方の、院内スタッフに向けてのメッセージ映像を見せていただき、この風土だから、道化教室が実現したのだと改めて心動かされました。目の前の人を笑顔にしたい。少しの勇気がいるけれど、思いを表現したい。ユーモアは愛の表現であると思います。2021年から、自主的な活動となりましたが、ユーモアのココロを広げるささやかな活動を続けていきたいと思います。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

（おかやまあかいはな道化教室世話人）

道化教室

道化教室

第１回岡山あさひ病院院内研究発表会
（2002年２月16日）

を上げると共にお互いの連携を密にしたチーム医療の提供」と「各専門職学会の練習の場の提供」を目的として、院内研究発表会を開催した。2020年（令和２）以降はコロナ禍となり発表形式での開催から、ポスター発表形式にスタイルを変え、一度も休会することなく開催し、「岡山リハビリテーション病院研究会誌」として引き継いでいる。この研究会を通して、レベルの高い医療の提供と、各部門の連携がより高まることを期待している。

情報交換会の開催

2002年（平成14）４月より岡山あさひ病院では情報交換会を開始した。この会は全職員を対象に職員からの意見・要望を募り、それらに対して経営幹部が回答するというもので、職員と経営幹部間のコミュニケーションを円滑にし、また風通しのよい職場風土を築くことで、組織の活性化を図る目的で開始した。職員からの大小様々な意見・要望が聞かれる大変有意義な会で、現在も継続して開催している。

岡山旭東病院リニューアルオープンと財団創立50周年記念式典の開催

2003年（平成15）の春から始まった岡山旭東病院の増築工事が翌年８月に完了し、リニューアルオープンを迎えた。病院１階に新たに150名ほどが収容できる多目的ホール＝パッチ・アダムスホールが整備され、病棟にも「癒しの湯」や「憩いの間」などが設けられ、療養環境のアメニティが格段に向上した。

また、2004年（平成16）12月、創立50周年を記念して、パッチ・アダムスホールに来賓150名を迎えて記念式典を開催した。記念講演には黒住教黒住宗晴教主を迎えた。弾き語りフォーユーで有名なピアニストの小原孝さんのピアノコンサートも開催され、盛大な会となった。

パッチ・アダムスホール（2004年）

癒やしの湯（一般浴室）

パーキンソン病健康教室開催

2002年（平成14）11月30日、岡山旭東病院では、パーキンソン病患者と家族を対象とした健康教室を開始した。2004年（平成16）２月14日、岡山旭東病院は、パーキンソン病について知識を深め予防に役立ててもらおうと、岡山ふれあいセンターで「パーキンソン病健康教室」を開催し、約90名の市民が参加した。

教室では倉敷紀念病院の安田雄副院長が講演を行い、パーキンソン病について説明し、「病状に変化があれば医師にすぐ相談し、積極的に社会に出る生活を」と呼びかけた。

（「山陽新聞」2004年２月15日付記事「パーキンソン病予防を　岡山で教室」参照）

パーキンソン病健康教室（2000年）

情報コーナー健康の駅オープン

2005年（平成17）４月５日、岡山旭東病院は、健康情報や医療・福祉・介護の情報が自由に得られる地域のオープンスペースとして、まちの駅「情報コーナー健康の駅」を病院内に開設した。書籍やパンフレット、パソコンを整備するだけでなく、展示スペースを設けて地域のアーティストの作品展などもできるようにした。

ちょうど道の駅が各地にできて話題となった頃で、道の駅の発起人に直接会いアドバイスをもらった。当時、病院に健康の駅があったのは岡山旭東病院だけであった。

健康の駅

文化祭の開催

2002年（平成14）４月より岡山あさひ病院では文化祭を開始している。

健康の駅

開始当初は各部署が創意工夫して、銭太鼓・手品・二人羽織・日本舞踊等を入院患者様に披露していた。中には当時全国の老人ホームや児童福祉施設、病院等を訪問して回っていたＸ Japan の TOSHI が来院し、ミニコンサートを開いてくれた年もあった。しかし近年では外部のボランティアの方による吹奏楽等の音楽を中心とした内容で行っている。2022年度はコロナ禍ではあったものの入院患者様がリハビリで作成した作品展示という形式で開催した。

高次脳機能障害患者に対する自動車運転支援

2010年（平成22)、岡山旭東病院の作業療法士が「運転と作業療法研究会」の世話人となり、同年に岡山県作業療法士会事業部移動支援班が発足した。

2022年（令和４）８月には、岡山県指定自動車教習所協会と岡山県作業療法士会の間で、「高次脳機能障害又は身体障害を有する運転免許保持者運転再開に向けた実車評価の実施に伴う協定書」が締結された。

第56回日本病院学会（2006年）

第56回日本病院学会 市民公開講座

第56回日本病院学会（土井章弘会長）、岡山で開催

2006年（平成18）７月７日・８日、第56回日本病院学会（会長・土井章弘）を、岡山コンベンションセンターを会場に開催した。参加者は過去最高の延べ7,200名に及び、演題応募数でも575演題（口演308・ポスター267）と過去最高を記録した。

特筆すべきは、寛仁親王殿下に記念講演をいただいたことである。皇族の本学会での講演は今回が初めてであった。また、ノートルダム清心学園の渡辺和子理事長を講師に迎え、市民公開講座が開かれ、超満員の盛況となった。

Column　岡山旭東病院の看護師育成について　　川崎泰子

「現場のことは任せてください。」婦長の言葉に迎えられて私の仕事は始まった。ケアに携わる看護師の表情も明るく感じられた。しかし、内実は深刻な看護師不足で「こなす」ケアが散見されていた。当時の看護師不足は深刻で、これを解決することが喫緊の課題であり、専門病院に求められるケアへのステップアップの一つの鍵と考えた。

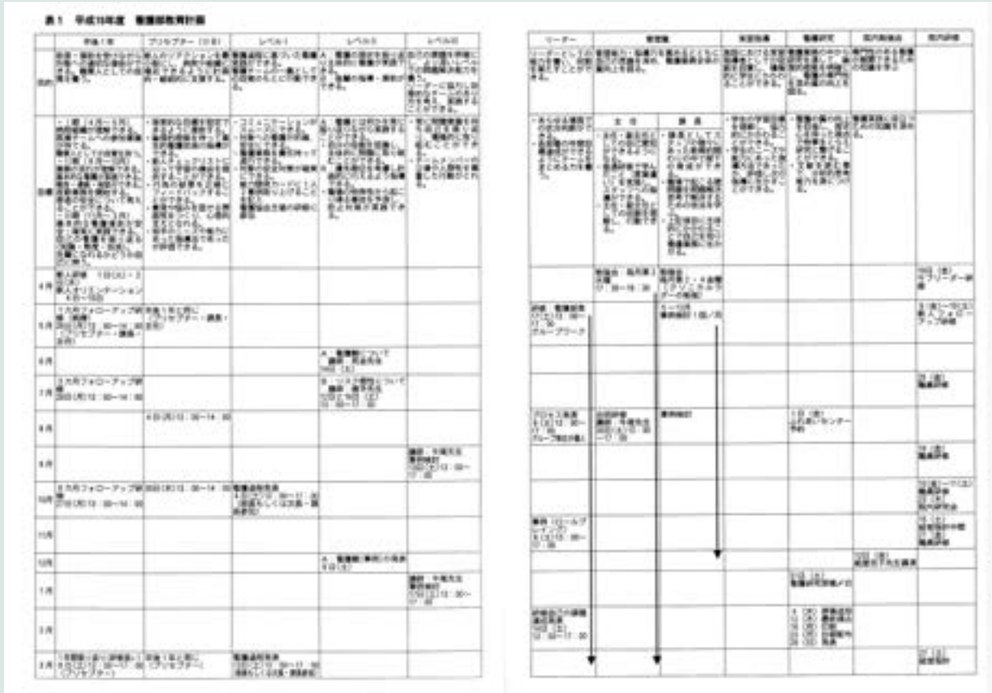
先ず、院内外の研修に並行して、ケアに支障のない人材と時間で、プリセプターシップを導入した。これにより、僅かずつ定着への兆しが見えた。そして、日本看護協会の現任教育体系を参考に、看護部教育計画を策定した（表１）。計画書作成の際、経営理念の４つの項目を縦軸として、看護部教育計画を横軸にするイメージで作成していった。育成の実際には、能力開発カードを活用した。各自でレベルを選択後、目標設定し、目標の具体策を考え、記入してゆく。年度始めと年度末に上司との面接時間を持つ。目標や具体的な行動計画が妥当か、達成度についても話し合う。この対話により、各自の目標の再確認と課題は何かなど、達成度等を考える過程で自己を見つめることができる。また、自分の行為や行動（時には思考過程も）の「見える化」する効果もあった。育成には時間がかかるが、「見つめる」「見える」化は変革をもたらせてくれた。

看護は感情労働とも、ケアは相手に吸収されて結果が見えないとも言われる。ケアの際、知識技術と同時に看護師の人間性が行為に加わる。

大袈裟な表現になるが、看護師の育成はひとりひとりの人生のかかった育成であると言える。看護職員の育成は私の目標の一つであった。関われた全員に感謝です。

参考文献：「岡山旭東病院実践事例集」土井章弘監修　経営書院　p.216~217　2005年

（岡山旭東病院元看護部長）



看護部教育計画

第４章

改革と連携強化

（2007～2010）

岡山リハビリテーション病院外観

Ⅰ　組織の変遷

岡山あさひ病院を
岡山リハビリテーション病院へ名称変更

2007年（平成19）４月、前期・後期高齢者医療制度が創設された月に、リハビリテーション病院として体制整備と機能強化に努めてきた岡山あさひ病院は岡山リハビリテーション病院に名称を変更した。

同時に、岡山市中区倉田地区への新岡山リハビリテーション病院新築移転建設計画がスタートした。

本院は主に発症２ヵ月以内の脳卒中患者や大腿骨骨折等の患者を急性期病院から受け入れ、集中的かつ効率的なリハビリを行うことによって生活機能の改善をめざし、できるだけ早期に自宅退院・社会復帰することを目的とする。

岡山リハビリテーション病院移転後、中区奥市２番８号の跡地はサービス付き高齢者向け住宅の建設計画が着手されるとともに、岡山旭東病院では第６次増改築計画がスタートした。

岡山西病院開院（2009年）

岡山西病院の誕生

2009年（平成21）、岡山旭東病院は、岡山市南区妹尾（岡山県南東部医療圏）で地域医療を担ってきた平松病院（40床）より事業譲渡を受け、4月1日より「岡山西病院」と名称変更し、浦上征男医師が院長に就任して運営を開始した。

Ⅱ　人とモノの変遷

岡山旭東病院各診療科の変遷

2007年（平成19）には、整形外科に1名常勤医が赴任し、常勤5人体制が整った。さらに非常勤医師も加わり、外来が“ほぼ３診制”になるほど充実した。手術件数は、関節鏡患者が増加したため、整形外科単独の平均在院日数は2006年（平成18）が24.1日、2007年（平成19）の平均在院日数は16.0日となった。全体の手術件数は2007年（平成19）当時479

Column　東山病院から岡山リハビリテーション病院までの転換　　十河みどり

昭和56年９月に199床を備える高齢者中心の長期入院病院に転換した東山病院であったが、その後の高齢者医療のあり方の大きな変化に伴い、高齢者の長期入院が社会的に問題視され、診療報酬の引き下げにより徐々に病院運営は厳しさを増していった。

その中で新たな療養病床群入院医療管理料という施設基準が創設されたことを機に、その転換のための国の療養型病床群整備事業による助成を受け、病院改修工事による療養病床への転換を図ることとし、平成９年の工事着工を経て、平成10年に竣工した。この整備事業の要件である10％（10床）の病床削減、及び岡山旭東病院への60床の移転により、東山病院は療養病床90床・一般病床39床のケア・ミックス病院となった。

また、当時の病院長は土井健男であったが、当時は川崎大学附属病院に勤務していた土井健男の義息であった鼠尾祥三を平成10年４月に病院長として迎え入れ、土井健男は名誉院長に就任した。入院患者様が逝去されるまでお世話をする長期老人病院であった当時の「東山病院」は、職員本位の組織風土が根付いており、鼠尾祥三病院長がまず取り組んだのは”接遇”の向上であった。これには当時の職員も高い問題意識を感じていた様子で、皆で一丸となり”変わらなきゃ”の精神で取り組んだ。

そして時を同じくして病院名を「東山病院」から「岡山あさひ病院」へ改称した。この病院名の改称にあたっては、操風会の全職員に病院名を公募し行ったが、岡山旭東病院 土井章弘院長よりの岡山県内全域を見据えた「岡山」から始まる病院名の助言、岡山旭東病院と姉妹病院である意識よりの「旭」の活字の採用（「旭」については温かいイメージ作りのため、平仮名の「あさひ」とした。）等を鑑み候補の中より決定した。

療養病床群入院医療管理料の施設基準の取得により病院財政は好転の方向に向かうことができたが、果たしてこれからも長期老人病院として運用するべきかどうかの疑問は残ったままであった。ちょうど時を同じくして、当時重要視されつつあったリハビリテーション医療の先駆けであるリハビリテーション病院として名高い高知県の「近森病院」に訪問する機会を得た。そこで目にしたものは正に眼から鱗の言葉通りで、長期老人病院からの脱却のためにはリハビリテーション医療を担う病院への機能転換しかないという思いであった。平成10年の改修工事によりリハビリ訓練室を拡張し、理学・作業療法（Ⅱ）の施設基準を取得していたが、さらなるリハビリテーションへの機能特化を図るため、再度病院の改修工事を行い、平成12年に当時最上位の総合リハビリテーション施設の施設基準を取得した。そして平成13年には１病棟38床を回復期リハビリテーション病棟とし、ここから本格的なリハビリテーション専門病院を目指すこととなった。その後も回復期リハビリテーション病棟を平成14年に１病棟52床へ、平成18年に２病棟91床へと増床を繰り返した。

また、その間にも平成16年に岡山県より「岡山地域リハビリテーション広域支援センター」の指定を受け、当事業の終了する３年間にわたり担当する県南東部地区の地域リハビリテーションの普及・啓蒙のため、講演会・勉強会の開催、講師派遣、リーフレットの作成等、職員皆で力を合わせて取り組んだ。

「東山病院」から「岡山あさひ病院」に改称した当時は、地域に「東山病院」のイメージが強く根付いており、リハビリテーション病院としての「岡山あさひ病院」と認知していただくまでには長い年月を要することとなった。その後、リハビリテーションの最上位の施設基準や回復期リハビリテーション病棟の施設基準の取得に加え、岡山あさひ病院への転換時には４名であったリハビリ職員も40名となり、既にリハビリテーション専門病院としての機能の充足、地域の知名度は高まったと判断し、平成19年に「岡山あさひ病院」から「岡山リハビリテーション病院」へ改称した。

しかし、築50年を迎えた病院施設は老朽化が進み、耐震基準も満たしておらず、またリハビリテーション病院としては手狭であることから、新たな病院の建築することの模索を始めた。移転の候補地はいくつか浮上したが、最終的には岡山旭東病院と隣接する倉田の地に取り決めた。その際、市街化調整区域（改正都市計画法）や指定保険医療機関（健康保険法）としての大きな問題が浮上したが、何とかクリアすることができ、平成23年に新築移転した。

（岡山リハビリテーション病院院長）

倉田に移った病院外観

件であったが、2011年（平成23）では、975件へと増多した。新しく人工単顎膝関節置換術の手技も行うようになり、人工関節手術、人工骨頭置換術には常時術中ヘルメットを装着、さらに術後成績を上げていった。新しい麻薬のレミフェンタニルを導入し、全身麻酔の質も変化した。安全で質の高い呼吸療法を提供する目的とした呼吸サポートチーム（RST）が麻酔科医主導で立ち上がった。

長年非常勤医師だけであった循環器科には2007年（平成19）に常勤医が１名、翌年にも１名加わり、主に心エコーや冠動脈CTが行われた。内科は、経鼻内視鏡を開始し、患者さんの苦痛が軽減され、2008年（平成20）９月には、胃がん、大腸がんの消化管精密健診施設、肺がんの精密健診機関に指定されて、内視鏡検査は1000件を超えるようになった。

脳神経外科では、脳動脈瘤に対するクリッピング術が2004年から2007年にかけて75〜97件／年と当時中四国トップクラスで、多くはMRAで見つかった未破裂動脈瘤に対するものであった。2008年（平成20）には常勤医１名が加わり、2010年（平成22）からは臨床検査技師が脳神経外科の手術を対象に術中モニタリング業務を開始した。

脳卒中センターでは、2007年（平成19）に頸動脈ステント留置術を導入した。2011年（平成23）には神経内科が常勤医５名体制となり、年間退院数1333名で特に脳卒中患者は2006年（平成18）から600名以上が続き、脳神経外科の症例も含め、県南東部医療圏で脳卒中患者は最多の状態が続いた。

また、この頃へき地医療補助金制度の援助を受け、遠隔病理診断装置が整備された。岡山済生会総合病院と専用回線で繋ぎ術中迅速病理診断が可能となったため、診断までの時間が30分以上短縮された。

健診部門では、2009年（平成21）から生活習慣病予防検診を実施するようになった。

認定看護師の誕生

認定看護師とは、日本看護協会が主催している資格認定制度の１つで、ある特定の看護分野において、熟練した看護技術と知識を有する者として、日本看護協会の認定看護師認定審査に合格した看護師のことをいう。

岡山旭東病院では、2007年（平成19）に感染管理認定看護師１名が誕生して以降、2011年（平成23）脳卒中リハビリテーション看護認定看護師１名、2012年（平成24）糖尿病認定看護１名、2019年（令和元）脳卒中リハビリテーション看護認定看護師１名、2022年（令和４）感染管理認定看護師１名が認定審査に合格している。

資格認定後は、高度な知識と技術で患者への質の高い看護の提供や、現場看護師からのコンサルテーションに答えながら看護実践を通して後輩指導などを行っている。また、５年ごとに日本看護協会が行う更新審査を受け認定看護師のレベル保持に努めている。

認定看護管理者制度も認定看護師同様、日本看護協会が主催としている資格認定制度の一つであり、当院では2017年（平成29）認定看護管理者１名が認定審査に合格、以後５年毎の更新審査を受け看護管理者としての資質維持に努めている。認定看護師の役割は、多様なヘルスケアニーズを持つ個人、家族及び地域住民に対して、質の高い組織的看護サービスを提供することを目指し、看護管理者の資質と看護の水準の維持及び向上に寄与することにより、保健医療福祉に貢献することである。

地域連携パスの先駆的取り組み（もも脳ネット開始）

2007年（平成19）の第５次医療法改正によって、脳卒中の地域医療連携体制の構築が求められた。

同年春から脳卒中地域連携パス導入に向けて、準備を開始。11月には、香川式脳卒中地域連携パス（以下香川式連携パス）について公開講座を開催し、その後、香川労災病院や地域連携パス運用会議である香川シームレス会議への見学を経て、岡山旭東病院と岡山リハビリテーション病院との間で香川式連携パスの試行を開始した。

さらに法人内の動きと並行して、岡山県の医療適正化計画のなかでも地域連携パスの推進が図られ、2007年（平成19）12月に岡山県保健所主催の会議で岡山県南東部において香川式連携パスの導入が決定された。

岡山旭東病院主導の脳卒中地域連携パスと岡山赤十字病院が先行していた大腿骨頚部骨折地域連携パスのネットワークを合流させ、2008年（平成20）４月１日から岡山県南東部において香川式地域連携パスの本格運用が開始された。岡山県南東部のこの地域連携ネットワークは「もも脳ネット」と名づけられた。

その後、いく度かの運用会議が行われるなかで、香川式ではなく岡山県南東部独自の地域連携パスの作成を望む声が多くあがり、12月に岡山県南東部版地域連携パス作成の方針が決定された。

情報の職種間振り分けや各部門の擦り合わせ、システムエンジニアの

3.0T－MRI導入

画像診断棟

協力や県南西部とのオーバービューパスの統一を経て、2009年（平成21）２月、岡山版の脳卒中地域連携パスが完成し、同年４月から岡山県南東部地域連携パスの本格運用が開始された。

3.0T－MRIの導入と画像診断棟の完成

従来のMRIより格段に性能が向上した3.0T－MRI（Signa EXCITE HDx3.0T（GE））が2007年（平成19）４月に県下で初めて岡山旭東病院に導入され、3.0T １台、1.5T ２台の３台体制となった。

脳血管画像で高精細3D画像の描出が可能となり、Volume Diffusion Weighted Imageにより微細な梗塞巣を描出することができるようになり、脳梗塞治療における幅が拡大した。

同月に画像診断棟が完成し、画像診断機器が集約化された。同時にCT装置も64列MDCTに更新され、全身CTを１回の息止めで撮影可能となった。また造影CTAが可能となり、脳血管、心臓血管、その他全身の血管CTAが可能となった。

カフェ赤い鼻

癒しの環境マップ

カフェ赤い鼻オープンと癒しの環境マップ

2007年（平成19）７月５日、岡山旭東病院では、中庭部分を改築し、カフェレストラン「赤い鼻」をオープンした（名称は、職員による公募）。

2008年（平成20）８月にコンサートや健康教室、園芸教室等のイベントを開催するパッチ・アダムスホール、熱帯魚が泳ぐアクアリウム、院内の癒しの環境を患者さんに紹介するために、「癒しの環境マップ」を制作した。

グループウェアの導入

岡山旭東病院は、電子カルテの導入により診療業務が効率化された一方で、職員間コミュニケーションの希薄化が課題となっていた。さらに診療業務以外は紙ベースの運用で、情報伝達に時間がかかる等の課題があった。

これらの課題を解決するために、2008年（平成20）10月、コミュニケーションツールであるグループウェア（Desknet's）を導入した。すぐに大半の職員が利用するようになり、コミュニケーションの活性化、効率化につなげることができた。岡山リハビリテーション病院でも2012年（平成24）にグループウェア（Docuworks）を導入した。

臨床検査課、ISO15189認定取得

2009年（平成21）３月23日、岡山旭東病院は、日本国内で47番目、中四国地方で４番目、岡山県内では２番目に、ISO15189（臨床検査室－品質と能力に関する特定要求事項）を取得した。これは臨床検査（一般検査、血液学的検査、生化学的検査、免疫学的検査、微生物学的検査、病理学的検査等）の国際認定で、臨床検査室の役割とその信頼性の向上を目的としている。また、検査室の臨床データは国際的に認証されたものとなり、治験事業においても有利になる。

認定当初は保険制度上で差はなかったが、厚労省の2016年度診療報酬改定において国際標準検査管理加算が認められるようになった。

家族会の立ち上げ

岡山リハビリテーション病院作業療法室では、2009年（平成21）に患者家族の不安軽減や心理的サポートを目的とした「家族会」を立ち上げ、2014年（平成26）までの約６年間にわたり、月1回の頻度で企画・開催した。

当初、病気や怪我後の流れ、疾患（認知症や脳卒中）、リハビリテーションについて等の内容で講習会を中心に行っていたが、2012年（平成24）から、より本来の目的を達成できるよう、退院患者や家族に体験談を語っていただくなど参加者を交えた座談会を中心に開催した。

家族会

自動車運転支援

岡山リハビリテーション病院では、2010年（平成22）より脳卒中患者の自動車運転に関して医療機関が担える役割を模索することから始まり、運転免許センターとの情報交換や、自動車教習所との連携を重ね、自動車運転支援の流れをマニュアル化した。岡山旭東病院、玉野自動車教習所、岡山自動車教習所と共同で製作した「連携シート」は、他施設でも、情報収集・伝達ツールとして活用されている。

2020年（令和２）には、運転評価ツールとしてドライビングシミュレーターを導入し、机上検査だけでなく、模擬的な道路環境で患者の運転能力を評

ドライブシミュレーター

価することが可能になった。2022年（令和4）からは、他施設から脳卒中患者の運転評価の相談があった場合に、当院で検査、シミュレーター、教習所への紹介・同行などを実施しており、周辺施設との連携を拡げている。

Ⅲ　職場環境の改善

見学ツアーで病院への理解深める

病院見学ツアー

岡山旭東病院は、2007年（平成19）９月から毎月第４金曜日に病院見学ツアーを開始した。一般の方を対象に、病院への理解を深めてもらうとともに、見学者の意見を運営に生かしていこうという試みで、ツアーは午後１時半から約２時間実施、参加無料で、１回の定員は10名とし、2007年（平成19）９月から2017年（平成29）３月までの期間に、延べ370名の方が参加した。内容は、病院紹介動画上映、各施設見学を行ない、がんの治療、検査機器等の医療機器の説明や癒しの環境整備の一環である生け花、絵画展示などを紹介した。見学後は質疑応答とアンケートを実施し、「ツアー終了後、病院のことがよく分かった」との声が多く聞かれた。

（「週刊Vision岡山」No.1591 2008.7.21より）

サンクスカードの開始

サンクスカード（2007年）

2007年（平成19）６月、岡山旭東病院は、日頃の業務、日常生活で、言葉では伝えきれない「感謝の気持ち」を伝えるため、サンクスカード委員が相手に届けるサンクスカードを開始した。

職員食堂の「職員の声」ボックスに設置してあるサンクスカードに記入・投函すると、委員が相手に届けて、その内容は職員食堂のサンクスボードに掲示して、感謝の気持ちを共有した。2009年（平成21）の大忘年会では、サンクスカード表彰も行った。その後、グループウェアの導入などで、直接会わなくても情報交流ができるようになり、カード利用者が減少していったが、2022年（令和４）５月から、より気軽なコミュニケーションツールとなるよう、サンクスカードの電子版であるグループウェア機能を使った「サンクスメッセージ」に移行した。

岡山リハビテーション病院で感謝の夕べを開催

職員誕生日会

2008年（平成20）1月19日岡山リハビリテーション病院への改名の節目として、ホテルグランヴィア岡山にて「感謝の夕べ」を開催した。連携医療・介護機関の医師、看護師、セラピスト等の来賓を招き、109名（院内スタッフ20名含む）の参加となり、盛大に行われた。

職員誕生日会の開催

職員誕生日会

2008年（平成20）２月、岡山旭東病院では職員の福利厚生とコミュニケーションの活性化を目的に、誕生月の職員を招待して「誕生日会」を開始した。「誕生日会運営委員会」を発足させ、運営を行った。栄養課の豪華な食事とアルコールなども提供され、参加職員の満足度の高い会となった。

第1回RST研修

2008年（平成20）10月４日から５日にかけて、岡山旭東病院はRST（呼吸ケアサポートチーム）宿泊研修会を実施した。

RSTは、安全で質の高い呼吸療法を提供し、環境整備、情報の共有化、職員教育等により、医療事故を防ぐための対策を講じることを目的に活動し、質の高い呼吸療法の提供、呼吸療法に関する医療事故防止と安全対策、各職種の専門的視点を活用したチーム医療の実践、呼吸療法に関する職員全体の能力の向上を図っている。

次世代育成支援認定くるみんマークの取得

2010年（平成22）10月１日、操風会は、ワークライフバランス（仕事と家庭の両立）に積極的に取り組んでいる企業として、認定マーク（愛称「くるみん」）を取得した。

これは2005年（平成17）４月施行の「次世代育成支援対策推進法」に基づいて、企業が子育て支援のための行動計画を策定・実施し、その実績が認められた場合に取得できるもので、厚生労働省により認定される。

認定には、男性の育児休業等取得者が過去３年間で１人以上、女性の育児休業等取得率が70％以上等、厚労省令で定める基準に適合しなければならない。

こそ丸

こそ丸(処方箋)

Ⅳ　病院行事と地域活動

こそ丸商品化

1988年（昭和63）に岡山旭東病院土井章弘院長が広島県府中市でMGユースホステルを経営していた森岡まさ子さん（1910～2008）の講演に感銘を受けて、製品化したこそ丸は、土井院長の講演会等や職員の結婚披露宴などで紹介し、認知度が上がっていた。2007年（平成19）にインパムシールの社長がラベルシールを作ってプレゼントしてくれたことをきっかけに、M&Lと相談して岡山旭東病院の売店で販売する商品となった。以降、当院を訪問された方への手土産や講演を聞きつけてきた方からの大量発注等もあり、全国展開され、英語、中国語版でも商品化されて世界へ発信している。2011年12月12日のNHK放送『あさイチ』で紹介され、生産がおいつかない程全国から注文が殺到し、職員総出でラベル貼りを行なった。

「山陽新聞」2018年６月４日付記事には、「土井院長によると、診察のたびに亡くなった夫の悪口を言っていた女性患者は、薬を手にしてから夫への愛情がよみがえり、『夫婦で薬を飲みたかった』と話すようになったという。『夫婦円満な日々が戻った』といった礼状が何通も寄せられ、結婚式の引き出物や新婚夫婦へのプレゼントとしても購入されている。土井院長は『効くか効かないかは心掛け次第。お金や名誉よりも大切なものを思い出すきっかけにしてほしい』と話す」とある。

サイバーナイフ2000例記念講演会

2008年（平成20）５月、岡山旭東病院では旧タイプのサイバーナイフと新しいサイバーナイフⅡの通算治療件数が2000件を超え、それを記念して11月15日、サイバーナイフ2000例記念講演会（岡山旭東病院内）を開いた。

尚、サイバーナイフの治療数は2015年（平成27）年には4000例を突破した。

サイバーナイフ2000例記念講演会

生命のきずなフォーラム2008

2008年（平成20）９月27日、岡山旭東病院で開催しているおかやまあかいはな道化教室の６周年を記念して、同教室主催により、「教師×道化師×医師＝豊かな人生の実践」と題し、「生命のきずなフォーラム2008」をパッチ・アダムスホールで開催した。

第１部は東京大学名誉教授大田堯先生による「生命のきずな」の講演、第２部は教育者の大田堯先生、道化師の塚原成幸さん、医師の土井章弘院長がパネルディスカッションを行い、「いのち」の大切さを深く考える会となった。

中国・洛陽・岡山友好病院の称号

2010年（平成22）５月、岡山市の友好交流都市・洛陽市（中国）の医療関係者らの訪日団が来岡し、26日に岡山旭東病院へも視察に訪れた。見学後の意見交換では、経営手法や経済的な運用等、様々な質問を受けた。

岡山旭東病院では、岡山県の医療ツーリズムに参加するなど、中国や海外からの受け入れを旅行会社と共同で企画した。また、中国メディア記者の見学を受け入れ、岡山県が推進する医療観光に貢献した。

12月２日には洛陽市で中国・洛陽・岡山友好病院の称号が授与された。

洛陽市医療視察訪日団(2010年)

洛陽・岡山友好病院の称号式(2010年)

COML病院探検隊の来院

患者・医療者双方のコミュニケーション能力を高めるために電話相談等の活動を行っている認定NPO法人・ささえあい医療人権センター（COML）が、2006年（平成18）11月、2010年（平成22）５月に岡山旭東病院病院探検隊として来院した。

「病院の質の向上のためには、第三者の目で見てもらうのが最も効果的であるため、ぜひ再度来院していただきたい」と懇願し、全31回の来院が実現した。案内見学、自由見学、覆面の模擬患者に来院してもらい、その結果をもとに、患者さん視点で厳しい意見・提言をしてもらった。

パッチ・アダムスホールでのコンサートが150回

2004年（平成16）８月に本館に整備された岡山旭東病院のパッチ・ア

パッチコンサート第150回（2011年）

ダムスホールでは、同年末より県内外で活躍するプロ・アマチュア演奏家によるクラシックを中心にした院内コンサートを続けてきた。

趣旨に賛同してのボランティアでの出演がほとんどだ。患者さんの体調を考慮して、時間はおおむね30分。「医療とアートを融合させ、治療だけでなく心を癒やす場をつくりたい」と土井章弘院長。

当院が地元町内会に配布する広報誌や院内掲示で周知し、入院患者だけでなく地域住民も毎回来場した。

2009年（平成21）から、自移動の困難な入院患者さんへのスタッフ配備を強化したフルケアコンサートと、地域の方や外来患者さんを対象にした一般コンサートを月各１回開催。

2011年（平成23）７月には、パッチ・アダムスホールでのコンサート第150回を記念して、三船文彰氏によるチェロコンサートを開催した。

2017年（平成29）7月に、第300回を迎えた。

（一部「山陽新聞」2011年３月24日付記事「地域へ定着 今夏150回　岡山旭東病院院内コンサート」参照）

転倒予防健康教室

転倒予防健康教室の開催

2010年（平成22）６月22日に岡山旭東病院で第1回目の転倒予防健康教室を開催した。整形外科医師土井基之副院長をはじめ、リハビリテーション課が中心となり、患者さんや地域住民など多くの方が参加する会となった。

動物ボランティア（CAPP）開始

岡山リハビリテーション病院では、日本動物病院協会と2009年（平成21）に覚書を締結し、10月から年４回の頻度で動物ボランティア（CAPP）の開催を開始した。毎回20～30匹の犬や猫が飼い主とともに病院を訪れ、入院患者様に癒しを提供している。自宅で帰りを待つ犬や猫のペットを回想し、自宅退院の励みにして欲しいとの思いから継続している。

動物ボランティア

Column　岡山リハビリテーションのあゆみ　　光藤美樹

私が岡山旭東病院に入職したのは1990年（平成２）４月でした。その頃の東山病院には在籍しているリハビリスタッフが不在のため、岡山旭東病院のリハビリスタッフが東山病院に３カ月間、岡山旭東病院に６カ月間勤務するというローテーションを行っていました。そのおかげで、東山病院・岡山旭東病院のどちらの職員ともつながることができました。東山病院はその頃は、いわゆる老人病院（199床）で、いろいろな事情で自宅に退院できないご高齢の方が入院されており、土井美紀子医師が中心となりリハビリテーションを実施していました。院内の生活がなんとか自立できている入院患者さまも数名おられましたが、ほとんどの方が寝たきりでした。しかも入院患者様が車椅子に乗るのは、週に３～４回程度のリハビリの時のみであり、それ以外はベッド上で過ごされていました。離床を促し、活動時間を増やす目的でのリハビリテーションの介入は効果があり、活動性も上がり、できることも増えていきましたが、退院される方はほとんどおられませんでした。週に２回レクリエーションを行い、身体活動に合わせて知的活動も行いました。平成７年の４月頃より東山病院でも理学療法士と作業療法士を常時配属し、医師１名、理学療法士１名、作業療法士１名、看護師１名、リハ助手１名で行っていました。そして、その頃に東山病院でもリハビリスタッフの採用を行いました。

1998年（平成10）４月には鼠尾祥三先生が病院長として就任され病院名も〔岡山あさひ病院〕となり、リハビリテーション病院としての機能転換と地域に根ざしたリハビリテーション病院としての知名度の向上を目標に掲げました。鼠尾祥三病院長が「岡山でリハビリテーションを積極的に行っている病院といえば、当院の名前が挙がるように頑張っていきましょう。」と言われたことはとても印象的で私自身その言葉でとても元気になったことを覚えています。院内は数回の増改築工事を行いながら、ハード面のグレードアップを行い、入院患者さまがご自宅への退院を目指すということの少なかった環境の中で、今では当たり前に行われているADLの向上と退院へ向けての支援を行い、退院後はデイケア（今の通所リハビリテーション）へ移行できるように、設備も人員も充足していきました。岡山あさひ病院時代の９年間は振り返ってみると、とても変化の大きかった時期と思われます。周辺の町内会の地域住民の方々の密接な協力を得ながら、入院患者さまに院内外での季節感を味わってもらえるように、餅つき大会・お花見会・夏祭り・文化祭などを開催しました。当院への入院患者さまも岡山旭東病院だけでなく、岡山市内の急性期病院全般から入院の受け入れ依頼が来るようになり、リハビリテーション病院としての認知度も上がり、リハビリテーション専門医の森田能子医師を迎えたこともあり、2007年（平成19）11月に病院名を今の〔岡山リハビリテーション病院〕に変更しました。

2011年（平成23）には日本医療機能評価「リハビリテーション付加機能」を受審し認定されています。鼠尾祥三病院長は以前から、岡山駅からタクシーに乗るときに病院名を言っても運転手さんがわからず、「前の東山病院のところね。」と言われていたのが、言われなくなったと話されていたことも印象的で、自分たちが頑張っているだけではなく、そのことを市内の急性期病院や地域社会から認められることが重要と言うことを鼠尾先生は、教えてくださいました。実はその当時より、当院の長期目標は中四国で名実ともにNo. 1のリハビリテーション病院を目指しており、その後に目標としての言葉は若干変化しましたが、患者さまや急性期病院から選ばれるリハビリテーション病院として努力を続けています。今後も中四国を代表するリハビリテーション専門病院を目指し精進していきたいです。

（岡山リハビリテーション病院リハビリテーション部長）

スタッフ集合写真

リハビリテーション室

第５章

移転と地域包括

（2011～2018）

Ⅰ　組織の変遷

地域医療支援病院承認と202床へ

1997 年の医療法一部改正を経て、1998 年に地域医療支援病院が制度化された。

岡山旭東病院では2006年（平成18）に「地域医療支援病院取得プロジェクトチーム」を立ち上げ承認要件のクリアに向け準備を進めてきた。2010年度に紹介率50％以上・逆紹介率70％以上の要件（2010年要件）を満たし、2011年（平成23）8月に念願の地域医療支援病院として承認された。原則として200床以上の病床が承認要件であったが、地域医療支援病院としてふさわしい施設を有する病院として例外的に承認された。

2014年（平成26）2月に竣工した岡山旭東病院第6次増改築工事により、本館北棟２階病棟を開設した。同年３月、岡山西病院の40床を岡山旭東病院に移床し、202床の医療機関となった。

2014年の増床と人員増に伴い、病床稼働率の低下と人件費が上昇し経常利益が大幅に減少することとなった。その状況を打破するため、2015年（平成27）10月、職員有志による「経営活性化検討会」が発足した。経理の公開をおこない、経営状況を共有しながら経営改善案を検討・提案・実行を行った。同年12月には一般病床30床を地域包括ケア病床に転換し、本館２階を地域包括ケア病棟とした。

岡山リハビリテーション病院外観

屋外スペース

岡山リハビリテーション病院が新築移転

岡山リハビリテーション病院は築50年以上が経過し、耐震基準も満たしておらず、またリハビリテーション病院としてはあまりにも手狭であったため、2007年（平成19）より岡山市中区倉田に新病院の建築を計画した。

新病院への移転に際しては２つの大きな課題が浮上した。ひとつは2007年11月30日に施行された改正都市計画法により、市街化調整区域である移転予定地に病院建築が不可となったこと、もうひとつは既存の病院と新病院が４km以上離れており、新たに保険医療機関の指定を受ける必要があり、その場合は既存の入院料を引き継ぐことができず数億円の減収を余技なくされることであった。しかしながら、この２つの課題は岡山市と厚生局に相談・折衝を重ねた結果、回避することができ、無事病院建築に取りかかることができた。

新病院は旧病院と比較して倍近くの延べ床面積を有しており、リハビリテーション目的で入院する患者さんには最適な入院療養環境となっている。また、岡山旭東病院とも300ｍほどの距離で、両院の連携がますます強化されるものと考えられた。

そして、基本設計から建築工事竣工まで約３年６カ月を要して新病院は完成し、2011年（平成23）11月１日に開院した。３病棟・129床はすべて回復期リハビリ病棟として運用し、入院患者の70％は脳卒中患者だった。

移転と同時に２階フロアに言語聴覚室６室と、約500㎡のリハビリテ

岡山リハビリテーション病院竣工時
リハビリテーション室

Column　地域医療支援病院の取得に向けて　　細谷佐也加

1990年当時の人口ピラミッドは、年少人口の割合や人口変動が少なく安定していたため、社会復帰を前提とした医療が求められ、いわゆる「自己完結型医療」が可能な状況でした。その後、急速な高齢化による疾病構造の変化と「地域完結型医療」への抜本的な改革が提唱され、患者を中心に病院・福祉機関の連携した地域医療が求められるようになり、1997年の医療法改正により、地域で必要な医療を確保し医療機関の連携等を図る為、「かかりつけ医等を支援する能力を備えた病院」として、地域医療支援病院制度が創設されました。

当院（一般病床124床）では、1994年に病診連携室（専任１名）を開設して、院内・院外連携強化に重点を置き、紹介患者のデータ管理、地域連携カンファレンスの開催、情報提供などの取組を開始しました。1999年に病診連携委員会を発足させ、連携病医院への訪問活動や入退院カンファレンスを開始して連携医療機関・福祉施設等と顔の見える関係づくりを心がけていきました。2002年には紹介患者加算Ⅳ急性期入院加算を取得し、2006年に「地域医療支援病院取得プロジェクトチーム」を発足させ、取得に向けた勉強会やワークアウトを開催し課題解決に取り組みました。当時は紹介率が基準に達していなかったため、紹介元獲得に向けた訪問活動と、逆紹介の積極的な推進を実行していきました。同時期、2006年４月の診療報酬改定や６月に国策である第五次医療法改正の地域医療計画の見直しの中で、５疾病５事業（脳卒中・がん・心疾患・糖尿病・小児救急など）の分野での医療連携を構築する診療ネットワーク構想が打ち出され、2008年に大腿骨頚部骨折・脳卒中の地域連携パス運用組織である「岡山もも脳ネット」が発足し事務局的役割なども担ってきました。

2010年度に紹介率・逆紹介率の基準をクリアでき、2011年８月、原則200床以上の医療機関が承認要件となっていたところ、当時162床だったにも関わらず念願の地域医療支援病院の承認を得ることができました。

地域連携カンファレンス

それ以降、地域医療支援病院として、①紹介患者に対する医療の提供、②医療機器の共同利用の実施、③救急医療の提供、④地域の医療従事者に対する研修の実施等、地域における中核的拠点病院として地域に貢献する使命を果たしてきました。

2014年に地域医療支援病院の承認要件の見直しなどもありましたが、多職種協働のワークアウトを実施するなど、地域医療支援病院継続に努めてきました。救急応需件数の向上や、患者の受入（ハブ機能も含め）促進、効率化係数などの向上の為には、病診連携以上に「病病連携」も重要となります。お互いの病院にとって効果の高い病病連携は課題ですが、今後も多職種で協議しながら継続させていきます。

（岡山旭東病院地域連携室主任）

もも脳ネット会議

地域連携懇親会

Column　岡山ハッピィライフ操風開設の思い　　安吉一郎

私は、平成22年４月、当時の土井章弘院長先生の計らいで、財団企画室長として当院に入職させたいただき、岡山リハビリテーション病院が移転する前の旧岡山あさひ病院跡地開発を担当致しました。

当時の財団法人操風会（以下、操風会）には、急性期病院、回復期リハ病院、眼科クリニックの医療施設が揃っていましたが、退院後の連携先としての高齢者介護施設がなかったので、跡地開発には高齢者介護施設を整備することになりました。介護施設の新設は、都道府県の介護保険事業計画の整備枠の制約があり、その当時、操風会が介護施設として自由に開設できたのは、厚労省の「住宅型有料老人ホーム」および国交省の「高齢者専用住宅（以下、高専賃）」で、両者とも施設外部から訪問、通所の介護サービスを利用する施設でした。超高齢化社会に対応するために、国交省は高専賃の後継施設類型として新たに「サービス付き高齢者向け住宅（以下、サ高住）」を創設し、今後10年間補助金を付けて60万戸整備する政策を打ち出しました。「サ高住」は、有料老人ホームの高額な一時金方式ではなく月次の賃貸住宅方式を採用しており、補助金のインセンティブが付いたことから、施設類型として「サ高住」を選択することになりました。岡山ハッピィライフ操風はおそらく岡山市で最初の「サ高住」の認可施設だと思います。当時、岡山市内では医療必要度の高い要介護者を受け入れる介護施設は殆ど見当たらない状況でした。

このような現状を踏まえ、岡山ハッピィライフ操風は、超高齢化社会の到来で増加が見込まれる介護と医療の必要度の高い高齢者を受け入れ、質の高い居住環境を提供することをコンセプトに致しました。前述のコンセプトに基づき、1階に入居者をサポートするクリニック、デイサービス、訪問介護ステーション、居宅介護支援事業所、厨房等を配置し、居住部門は2階～4階に各階24室の72室を配置しました。居室の面積は18㎡以上を確保し、各居室には介助を考慮した大きめのトイレや共用エリアにオストメイト対応トイレを配置しました。また、操風会が力を入れている「癒やしの環境」や職員研修の充実にも配慮した施設を計画しました。ハッピィライフ操風の敷地配置計画は、敷地を有効に活用するため東側の旧病棟を解体撤去後に新設し、将来のグループホーム等の増設に対応できるように配置し、旧本館・外来棟は保管倉庫として有効活用するために残すことにしました。約２年半の基本計画、建築設計、岡山リハビリテーション病院の移転と旧建物の解体撤去、新築工事を経て、ハッピィライフ操風は平成25年４月に開設致しました。新築工事は、平成23年３月の東日本大震災の影響で建築単価が高騰し、また旧病棟跡地に予期せぬ地下埋設物が出現するなど、建築費用は想定の予算を超過してしまいました。私は、体調不良で平成24年３月末に法人を離れましたが、開設後、稼働率が上がらず経営的に苦しい期間が続いたと伺い、心配しておりました。

岡山ハッピィライフ操風の居住部分

その後、職員の皆様の不断の努力や土井章弘院長先生、土井基之副院長先生をはじめとする操風会のバックアップにより、次第に地域に認知され稼働率も上昇してきたとお聞きし、関係各位に心から感謝申し上げる次第です。

（医療コンサルタント）

デイサービスセンター

ロビー

住宅シミュレーション室

ーション室を作りリハビリテーション機器を新しく更新した。自宅へ退院する準備として、調理・洗濯・掃除などの家事動作練習などができる住宅シミュレーション室や、屋外には、砂利道、飛び石、芝生の山、階段などを作り不整地の歩行の練習ができるスペースも準備した。

病棟フロアは、間接照明や木目調の床や建具を使用し、少しでもゆったりと過ごせるように工夫した。

岡山ハッピィライフ操風地鎮祭

岡山ハッピィライフ操風が開所

岡山リハビリテーション病院の倉田への移転に伴い、一般財団法人操風会として、地域医療並びに介護の充実のために、岡山市中区奥市の跡地有効利用を検討した結果、サービス付き高齢者向け住宅の建設が計画された。

急性期病院で急性期の医療を受けた後、療養型病院や回復期リハビリテーション病院で治療やリハビリを行い、在宅復帰してそれぞれかかりつけ医院などで最適な医療を受けることになる。しかし、自立の難しい高齢者にとって在宅復帰は困難であり、医療・治療もできる施設が必要となる。そのような医療と介護に重点をおいた住居が必要と考え、サービス付き高齢者向け住宅を建設することを決定した。

具体的計画は岡山旭東病院・安吉一郎（医療コンサルタント）により、設計は宮崎設計、建築は大林組に依頼し建設した。「岡山ハッピィライフ操風」の命名は岡山旭東病院の従業員公募により決定した。

岡山リハビリテーション病院跡地の敷地面積は3,260㎡であったが、今までの建物は耐震構造でなく再利用することができなかったため、鉄筋５階建て延床面積4,000㎡の建物を建設することになった。2012年（平成24）２月に着工し、翌年４月に開所した。

各階や屋上には庭園があり、カラオケ室や理容室なども設置し、生活空間に配慮した。また、施設周辺は操山の緑に囲まれており、閑静な住宅にふさわしい環境にある。入居者は介護保険や医療保険も利用し、施設からの送迎を利用して通院医療、訪問医療、訪問看護、デイケアも受けることができる。

2013年（平成25）３月16日、岡山市医師会・是澤俊輔会長、岡山大学疫学・衛生分野の土居弘幸教授、佐藤医院の佐藤涼介理事長が臨席し、その他多くの人々の参加のもと、開所式典が行われた。

事業内容は、サービス付き高齢者向け住宅（72戸）のほか、通所介護事業、訪問介護事業、居宅介護支援事業からなり、経営理念は、⑴安心して生命をゆだねられる住まい、⑵快適な人間味のある温かいもてなしのある住まい、⑶他の医療機関・福祉施設とともによい医療・介護を支える住まい、⑷職員ひとりひとりが幸せでやりがいのある職場、である。

心身の健康を保つうえで重要なことは、おいしく食べやすい、バランスのとれた食事である。当施設でも、食事には特に気を配っており、治療食や食べやすい工夫がされた食事を提供している。経験豊かな料理長が彩り豊かなおいしい食事を提供し、利用者アンケートでも好評を博している。

岡山ハッピィライフ操風（完成）外観

岡山ハッピィライフ操風開院式

岡山ハッピィライフ屋上庭園

彩り豊かなおいしい食事

Ⅱ　人とモノの変遷

岡山旭東病院各診療科の変遷

2012年（平成24）には、救急科に常勤医が入り、救急の受入態勢を整備することができた。同年10月より整形外科医師１名が着任し、スポーツ外来を開始した。また新見市の渡辺病院が地域医療支援病院の対象病院として医師派遣先の病院に加わったことで、多くの症例がくるようになり、整形外科の手術件数が増加した。2014（平成26）には本館３階が整形外科病棟としてオープンし、手術室のある３階と同じ階に病棟ができたことで入室が非常にスムーズで、利便性が増した。外来にも小手術室ができ、手の手術件数が増加した。

一方、脳神経外科では、2013年（平成25）頃から未破裂脳動脈瘤の予後が明らかになり、血管内外科の発達により手術適応が狭められたことなどもあり、手術件数は次第に減少した。しかし、2007年（平成19）339件であった手術件数は、2011年（平成23）も349件であり、手術適応が移り変わる中で適応症例に対応し、件数は維持された。

2015年（平成27）12月１日、本館２階に地域包括ケア病棟を開設し、整形外科など急性期治療が完了した患者の受け入れ、在宅への紹介、前方・後方連携もきめ細やかにできる体制となった。2018年（平成30）４月より骨粗鬆症外来が始まった。

循環器科では、2013年（平成25）から心臓カテーテルが始まったが、2018年（平成30）に常勤医師が退職され、その後は非常勤医師の外来がメインとなった。

ボツリヌス療法外来を開始

岡山リハビリテーション病院では、2011年（平成23）1月より痙性麻痺に対するボツリヌス療法を開始した。ボツリヌス注射を行うことにより、日常生活動作の改善、介護負担の軽減、疼痛の緩和などの効果を認めている。ボツリヌス注射のみでは効果が不十分であり、当院では開始当初から施注後にリハビリを行い、治療効果を高めるようなプログラムを構築しており、2022年度で53件実施した。

ナースコール呼出表示システムの導入

ナースコール呼出表示

岡山リハビリテーション病院では2011年（平成23）11月の病院新築移転の際にナースコールシステムと連動したナースコール呼出表示システム「コールディスプレイ」を導入した。このシステムは患者情報管理機能を備えた通信システムで、岡山リハビリテーション病院が全国で最初に導入した。

岡山失語症友の会「コスモス」事務局設置

コスモス事務局

2012年（平成24）秋に、岡山失語症友の会「コスモス」が、日本失語症協議会へ正式に申請登録された。第一回の総会を翌年の2013年（平成25）１月に行った。当会は定例会の開催・企画運営や会員への情報発信等、安定的な活動を行う上で事務局の設置を必要としており、岡山リハビリテーション病院が相談を受け、病院１階の一室に事務局を設置した。

岡山旭東病院食堂・調理室を改修

2014年（平成26）２月～８月の約７カ月間、岡山旭東病院では、食堂・調理室の増改築工事に伴い、調理室・事務室をカフェ赤い鼻へ移動した。その間、調理態勢等の運用を円滑に行うと同時に、改修工事中の職員食の提供休止により食数減少期間を有効活用するために、他施設との見学交流に力を入れた。嚥下障害の患者への安全対策に配慮した食事内容と、当院の特徴を考慮した栄養管理、在宅支援等のヒントを得ることができ、食事・栄養管理の見直しと充実に努めることができた。元々提供していた人間ドック・人間ドック（一部健診）受診者への食事サービスについては、工事期間中は健康センター内の食堂で軽食を提供し、同年８月19日、カフェ赤い鼻での提供に移した。

岡山旭東病院新病棟の開設

温室２階フロア

2014年（平成26）３月、岡山旭東病院新病棟（本館北棟）を開設した。病床数は202床となり、手術室は4室増室、ICUは12床へ増床した。本館北棟１階に外来や救急部門、画像診断部門が集約し、診察から検査への流れが簡略化された。また、温室「めだかの学校」を設置した。

同時に４月には亜急性期病床を廃止し、画像診断センターの完成により画

本館北棟４階健康センターからの景色

本館北棟４階健康センター

像診断機器を集約化した。

また、全自動生化学分析装置をベックマンコールター社製LX-20から日立社製Lobospect 006へ更新。免疫分析装置もベックマンコールター社製アクセスから富士レビオ社製ルミパルスとロッシュ社製e411へ更新した。

一方、人の変遷としては、同年４月に臨床工学技士の手術室への参画と、救急救命士を導入し、臨床工学技士の参画は関節鏡手術の直接介助から始めた。職種間の業務範囲、考え方、教育（共育）等、「共に学ぶ喜び」と「相手に伝える難しさ」「他者理解」など、難しさと喜びの分かち合いを繰り返しながら、互いを理解するよう努力した。また、救急救命士は救急外来での受け入れ業務、バイタル測定、移送や救急搬送等の業務を担当した。

健康センター移設

2014年（平成26）４月本館北棟が完成し、４階に健康センターを専用フロアとして移設した。同時に乳房撮影装置を導入し、マンモグラフィ検診も開始した。

健康センターは2017年（平成29）11月人間ドック学会施設認定を取得し、2022年（令和４）９月岡山県健康づくりアワードを受賞した。また、11月にはがん対策推進企業アクション推進パートナー企業に登録し、地域社会の健康への取り組みを推進している。

2023年（令和５）４月念願の内視鏡検査室が完成し、胃カメラも同一フロアにて実施できるようになった。

リハビリテーション課スタッフの病棟配置体制

2014年（平成26）４月１日、岡山旭東病院では、理想的なチーム医療実践のために、リハビリテーション課スタッフの病棟配置を開始した。

2011年、リハビリ職種内での連携を深めるべく、PT、OT、STという職種ごとの分業ではなく、職種の集合体を1つのチームとしてA、Bチームに分けて普段の業務を展開した。2013年（平成25）には「急性期リハを考える会」を実施し、理想的なチーム医療実践について議論を繰り返し、リハビリ職種と関連性が高い看護師との相互理解を深めるべく、リハビリスタッフの看護業務体験や病棟看護師へのアンケートなどを実施した。

当初の構想から約３年かけて、リハビリスタッフの病棟配置を開始し、理想的なチーム医療実践を理由にリハビリスタッフの病棟配置を行った病院は、全国でも珍しい事例となった。

特定行為看護師

特定行為研修修了看護師の誕生

2014年（平成26）６月に成立した医療介護総合確保推進法により、保健師助産師看護師法の一部が改正され、2015年（平成27）10月１日より診療の補助として看護師が手順書にもとづき21区分38行為の特定行為を行うことが可能となった。

特定行為とは、診療の補助であって、看護師が手順書により行う場合には、実践的な理解力、思考力、判断力並びに高度かつ専門的な知識、技能が特に必要とされ、特定行為を行う看護師には指定された教育機関での特定行為研修受講が義務付けられた。日本看護協会がチーム医療を推進し、看護師がその役割をさらに発揮するため特定行為研修を創設し、岡山旭東病院から、感染症管理モデル特定コース（特定行為４区分５行為）を看護師１名が受講し、2016年（平成28）３月、当院初の特定行為研修修了看護師が１名誕生した。

さらに2021年（令和３）に看護師２名が特定行為５区分８行為、2022年（令和４）に看護師１名が特定行為２区分３行為の特定行為研修を修了した。

患者相談支援センターの開設

2014年（平成26）７月、岡山旭東病院では、入院前から退院後までの総合相談窓口・地域連携窓口として患者相談支援センターが開設され、多職種・多機能の相談窓口のセンター化が図られた。センターは、主に地域連携室、医療福祉相談室、アドボカシー室、患者相談窓口の機能を担うかたちになった。後に入院前支援機能も加わった。

患者相談支援センターアドボカシー室

電子カルテシステム（MBテック）の導入

岡山リハビリテーション病院は、「情報の共有と活用」のレベルをより進化させるためのツールとして、2012年（平成24）頃より電子カルテの導入の検討を開始した。検討を開始していく中で、リハビリテーション専門病院で多くの導入実績を持つ、回復期リハビリテーション病院に特化した電子カルテを開発・展開しているＭＢテック社の「チームアプロ

ーチ対応型電子カルテ シナプス」の導入を決定し、それから約１年をかけて準備・構築を行ない、2014年（平成26）９月に運用を開始した。

岡山リハビリテーション病院長の交代

1998年に岡山あさひ病院に就任した鼠尾祥三病院長が、体調を崩していたこともあり、名誉院長となり、2015年（平成27）5月に十河みどり副院長が病院長に就任した。2019年（平成31）４月には鼠尾晋太郎が副院長に就任し新体制となった。

岡山リハビリテーション病院のリハビリ機器導入進む

岡山リハビリテーション病院は、病院経営目標のなかでリハビリテーション機器の導入を掲げ、積極的にデモンストレーションを実施している。2015年（平成27）にはGEARを導入（トヨタ歩行練習アシストロボット）し、2016年（平成28）にはDRIVE（電気刺激機器）を導入した。

2017年（平成29）は、嚥下機能改善のためのジェントルスティム（電気刺激機器）、2018年（平成30）はWW-1000（トヨタ歩行練習ロボット）、2019年（令和元）は、天井走行リフト、ドライブシミュレーター、Reogo-J上肢訓練ロボット、IVIS（電気刺激機器）の導入した。

2020年（令和2）はWW-2000（トヨタ歩行練習ロボット）の更新とパワープレートPro7（振動刺激）、パワープレートPluse（振動刺激）、バイタルスティム（電気刺激機器）を導入、2022年は、コグニバイク（認知課題と有酸素運動）、タッチプレイディスプレイなどを導入し、リハビリテーション支援の幅の拡大を図っている。

歩行ロボット Welwark

歩行ロボット脚本体

トヨタ歩行練習アシストロボットによる臨床研究への参加

岡山リハビリテーション病院では、2015年８月～2018年２月の期間、藤田医科大学主導の臨床研究に参加し、藤田医科大学とトヨタ自動車が共同開発したトヨタ歩行練習アシストロボットの試作機によるリハビリを54症例実施した。2018年２月には、Welwalk（WW-1000）を導入し、2018年５月～2020年３月に藤田医科大学主導の多施設共同研究に参加して18例を実施した。2021年２月からは、現在のWW-2000を導入した。

2023年８月現在までの実績として、学会発表44演題、シンポジウム・講演など11演題、論文３本を投稿するなど、学術研究に活かされている。

Medical Excellence JAPAN

Medical Excellence JAPAN（以下MEJ）は、日本、及び各国の政府、医療界、産業界と相互協力のもと、医療サービス、医療技術を通して、世界の人々の健康、福祉及び経済の発展に貢献することを目指している組織で、日本の医療機関に海外からの渡航受診者の受け入れを促進するため、渡航受診者の受け入れに意欲と取組みのある病院をJapan International Hospitals（以下JIH）として推奨している。

岡山旭東病院は2017年（平成29）12月、MEJからJIHの推奨病院に認定され、国籍・人種に区別なく、健康・福祉の発展に貢献できるよう外国人患者の視点に立ち、通訳者の活用、及び、院内環境を整備した。

2019年（令和元）には、中国、ベトナム、フィリピン等の諸外国からドック・外来受診で来院された。11月に中国で開催された経済産業省2019年度国際ヘルスケア拠点構築促進事業中国国際医療渡航（北京）展示会にMEJの11医療機関・渡航支援企業とともに参加、当院のPR等を実施した。

サイバーナイフを新機種「M6」に更新

2018年（平成30）３月、岡山旭東病院では、サイバーナイフを最新機種の「M6」に更新した。これにより、頭蓋内の腫瘍や血管奇形、頭頸部がん以外にも、肺がん、肝臓がん等、体幹部のがん治療が可能になった。

従来、患者は仰向けで治療を受けていたが、新機種ではうつ伏せでの治療も可能になったため、消化管等、臓器への放射線照射を避け、より安全に肝臓、腎臓、椎体等の体幹部の病変が治療できるようになった。

（「山陽新聞」2018年６月４日付「岡山医療健康ガイドＭＥＤＩＣＡ」参照）

サイバーナイフ

Ⅲ　職場環境の改善

経産省の「おもてなし経営企業」に選定

2014（平成26）年３月27日、経済産業省が顧客のニーズに合わせて地

おもてなし経営企業に選定

おもてなし経営企業感謝状授与

おもてなし経営企業感謝状

域社会に密着した経営を実現している事業者として「平成25年度おもてなし経営企業」に、岡山旭東病院が選出された。

当院は開設当初より４つの経営理念を掲げ、先端診断機器を導入するとともに、医師や看護師をはじめとする人材の確保と育成にも注力し、「共育」をめざして教育費に総収入の１％を投入するなど、人間尊重による人を活かす経営を心がけてきた。

また、「快適な、人間味のある温かい医療と療養環境を備えた病院」を経営理念に掲げ、アートに配慮した建築や庭園、絵画、音楽、生け花、彫刻、料理などの環境整備を実施してきた。

こうした当院の経営姿勢が評価され、「おもてなし企業」として選出された。

プラチナくるみんマーク

プラチナくるみんマークの取得

2016年（平成28）６月29日、操風会は全国で61番目にプラチナくるみんの認定を受け、「プラチナくるみんマーク」を取得した。

職員が仕事と子育てを両立することができるよう、また、職員全員が働きやすい環境をつくることによって、すべての職員がその能力を十分に発揮できるよう、育児休職制度や育児時短、子どもの看護休暇等の制度を積極的に導入し、制度を取得しやすい環境整備に努めてきた結果である。

e-Learning大賞

第13回日本e-Learning大賞（厚生労働大臣賞）を受賞

2016年（平成28）、岡山旭東病院は、「医療現場に特化したeラーニングシステム～シミュレートによる緊急時・急変時の対応精度の向上～」で、約100点に及ぶ応募作品のなかから厚生労働大臣賞を受賞した。

「日本e-Learning大賞」とは、企業・学校・自治体などにおけるeラーニングを活用した優れたコンテンツやサービス、ソリューションを表彰する賞で、毎年eラーニングアワードフォーラムと併催されている。経産省・文科省・総務省・厚労省の４つの大臣賞が付与される、教育をテーマにした賞としては他に例のない、大変希少なアワードとなっている。

Ⅳ　病院行事と地域活動

子ども向け病院見学ツアーキッズデイの開始

キッズデイの風景

岡山旭東病院では、毎月第４金曜日に病院見学ツアーを開催してきたが、夏休み中の小学生を対象に病院や医療について楽しく学んでもらう新企画「キッズデイ」を2011年（平成23）８月から始めた。以降、毎年１回夏休みに開催し、医師や看護師による講義や救急車に乗るなどの体験型の内容は、夏休みの自由研究や、子どもたちに病院という職場を知ってもらうよい機会として人気を得た。

特別消防訓練の実施

消防ヘリコプター

2012年（平成24）11月、岡山リハビリテーション病院では岡山市消防局の要請により、特別消防訓練を実施した。訓練には職員（含入院患者想定職員）約50名、消防士等約70名が参加した。またポンプ車・はしご車等の消防車10台、救急車１台、消防ヘリコプター１台を配備した大規模訓練であった。訓練ではポンプ車は病院外壁に放水し、はしご車も３階ベランダより入院患者の救助を実施した。また、院内では職員とともに入院患者の避難誘導、救命処置を実施、屋上では消防ヘリによるつり上げ救助訓練を実施した。

土井章弘院長がエッセー集を出版

岡山旭東病院の土井章弘院長が、2007年（平成19）２月から病院のホームページで毎週発表してきた文章をすべて収録したエッセー集を、2014年（平成26）に２巻出版した。

エッセーでは、脳神経の病気、地域医療、医療制度、病院経営といった専門の話はもちろん、文化・芸術、平和、国際交流など、多彩なテーマを取りあげた。患者さんからは、「文章が簡潔で読みやすい」「感性に共感した」等の感想が寄せられた。

（「山陽新聞」2014年11月17日付記事参照）

院長のひとりごと

シンボルアート

ライアン･ガンダーのトークを開催

ライアン･ガンダーのシンボルアートを設置

2014年（平成26）２月、岡山旭東病院の第６次増改築建設の一環で、北棟屋外に病院のシンボルアートを設置した。コンセプチュアルアートの新たな地平を開く作家として世界から注目を集めているイギリス人アーティストであるライアン・ガンダー「Incredibly shiny stuff that doesn't mean anything(信じられないくらいキラキラするけれど何の意味もないもの)」という作品。アートコンサルタントから提案された草間彌生作品を含む４作品のなかから、職員投票によって本作品が選出された。「磁力のように目に見えないエネルギーを感じさせる」などが選定理由で、患者・職員を磁石のように引きつけて放さない「マグネットホスピタル」の象徴となっている。

建設の大林組、建築のUR設計、照明のYAMAGIWAとアート制作会社が協力して設置された。

また翌３月には、イギリスからライアン・ガンダーを招き、当院でアーティストトークを開催した。土井総院長との対談もあり、ライアン・ガンダーはこのシンボルアートの着想について、「宇宙のゴミがエネルギーになって、重力が加わったまま落下したイメージで、「未知のもの」、「身近にはないもの」」と説明した。

彼の作品に魅了されていた大林組会長や太宰府天満宮神主、岡山を代表する実業家石川康晴氏なども参加し、盛会となった。

第13回癒しの環境研究会全国大会

第13回癒しの環境研究会全国大会懇親会

連携介護予防教室を開催

2014年（平成26）岡山ハッピィライフ操風では、地域包括支援センターと操山地区のサービス付き高齢者向け住宅（3カ所）とが連携して、介護予防教室を開催した。講師は、岡山旭東病院脳神経内科医師と脳卒中リハビリテーション専門看護師に依頼し、参加者は多数となり、地域住民に好評となった。

第13回癒しの環境研究会全国大会を開催

2014年（平成26）11月22日から23日にかけて、岡山旭東病院が運営事務局となり、第13回癒しの環境研究会全国大会を開催した（学会長は土井章弘)。テーマは「医療と福祉とアートの融合」で、癒しの環境に興味のある医療関係者が全国から150名集まり、当院のスタッフと合わせて約220名の参加となった。

また、この際に笠岡市出身のフラワーデザイナー萬木（まんき）善之さんにより、約1万輪の生花を精密に再現した造花「アートフラワー」によって、院内エレベーター内が装飾された。萬木さんは、国内で開かれるフィギュアスケートの国際大会などの表彰式で、メダリストに贈るブーケのデザインを担当している。

Column　岡山リハビリテーション病院の看護師育成について　植田明美

私は急性期病院に長く勤務し、2018年4月に岡山リハビリテーション病院へ着任しました。清掃が行き届き、多くの絵画が飾られ、どのスタッフからも「こんにちは」「お疲れ様です」と声をかけられるあたたかい病院に迎えられたのをありがたく思いました。

着任してすぐ管理者9名に十字チャート分析を行い、良いところや改善したいところの情報を共有しました。その中で教育の充実を希望する意見が多かったため検討することにしました。当院は看護師の94.4%が既卒採用者で、様々な病院の様々な教育を受けた看護師が入職しています。新卒・既卒採用者にはマニュアルにより各病棟で教育を行っていましたが、「回復期リハチームの中でどういう看護師になりたいか」というわかりやすい基準がありませんでした。そこで、JNAのクリニカルラダー岡リハ版を師長主任会で約1年かけて作成し、病棟会などで全員に説明し、2021年から運用を開始しています。

看護部研修

看護研修BLS

院外の研修参加についてははっきりとした方針がなかったため、年度初めに看護部として必要な研修を一覧表にし計画的な育成を行っています。研修に参加したスタッフは、看護部の院内研修会で講師を行っています。また、子育てなどで参加しにくいスタッフのために、オンデマンド研修（Web研修）を導入しました。オンデマンド研修は30分の研修に編集し、ランチョン研修や、就業後研修として開催しています。

自己の成長を目で見える個人目標管理ファイルを作成し全員に配布しました。看護部の院内ラダー別研修やその他院内外の研修参加が記録できるようにし、個人面接時に活用しています。

今年は、地域の研究会のシンポジストや公民館の講師などで依頼があり活動する予定です。

「患者様のためにこういう看護がしたい」という一人ひとりの声を聞き、できることをみんなで話し合い、お互いを高め合いキャリアアップしながら、一人ひとりが生き生きと働ける職場づくりに努力していきたいと思います。

（岡山リハビリテーション病院看護部長）

第41回日本診療情報管理学会学術大会を主幹

2015年（平成27）９月17日から18日にかけて岡山コンベンションセンターで第41回日本診療情報管理学会学術大会が開かれ、岡山旭東病院の主幹のもと土井章弘が学術大会長を務めた。全国から約2,100名が参加し、演題数は342題と過去最大規模の大会となった。

ノートルダム清心学園・渡辺和子理事長の市民公開講座、ソプラノ歌手・

第41回日本診療情報管理学会学術大会

村上彩子さんの特別企画等も盛り込まれ、「診療情報は、いのちの記録」をテーマに、これからの診療情報管理へ向けたメッセージを発信した。

当院からも６演題の発表を行い、有意義な大会となった。

なかまちーずフェスティバル開催

「なかまちーずプロジェクト」の発足と参加

2006年から、医療機関の地域連携担当の顔の見える関係づくりとして「旭東地区ネットワーク」が発足し、病院の連携担当者間のネットワーク連携に加え数年前より行政も加わり連携活動を発展させて協議を行なってきた。2012年には行政主導で、中区地域ネットワークアクションプラン策定会議（コア会議）が発足した。その後、「顔の見えるネットワーク構築会議」、「住民と専門職の意見交換」などに発展し、医療・福祉・介護関係者が集まり情報共有すること、地域住民への普及啓発、地域の繋がりづくりを行なうことを目的としたイベントを開催することが決定し、2016年11月６日に第１回なかまちーずフェスティバルを開催した。

「なかまちーず」という名には、「なかく」の「なかま」と「なかく」の「まちづくり」を、「チーズ」のようにとけこみ、まきこみながら行っていきたいという思いが込められている。

2018年（平成30）４月に行政主導から自主的活動へと転換し、「なかまちーず」をフェスティバルだけでなく、活動名「なかまちーずプロジェクト」として引き継いだ。それに伴い、新たな組織体制が構築され、岡山旭東病院の地域医療サポート室になかまちーず事務局を設置した。

サイバーナイフセンターがリニューアル記念式典

2018年（平成30）５月12日、岡山旭東病院サイバーナイフの更新に伴う内覧会・記念講演会・祝賀会を三木記念ホールで開催した。

記念講演会では、岡山大学病院の金澤右病院長と脳神経外科の伊達勲教授に座長をお願いし、神戸低侵襲がん医療センターの西村英輝医師、新百合ヶ丘総合病院の宮﨑紳一郎医師が講演され、最後は、日本赤十字社医療センターの佐藤健吾医師が総評を行った。

岡山県内外から100名が参加し、多くの医療機関の方々と交流することができた。

サイバーナイフ記念式典

西日本豪雨災害でJMAT、JRATの派遣

岡山リハビリテーション病院は、2018年（平成30）７月６日から７日にかけて発生した倉敷市真備町の豪雨災害に対し、15日に岡山県医師会の要請を受け、JMATおかやま（岡山災害派遣医療チーム）の一員として派遣、医師、看護師、薬剤師、歯科衛生士等で支援にあたった。

また、JRAT（日本災害リハビリテーション支援協会）としても、リハビリスタッフが中心となり同町へ支援派遣した。

真備町災害救援（2018年７月）

転倒予防健康教室100回記念、健康フェスティバル開催

2010年（平成22）から岡山旭東病院で始まった転倒予防健康教室は100回を数え、2018年（平成30）11月20日、「転倒予防フェスティバル」を開催し、67名が参加した。

参加者の健康維持増進への意識を高められるよう、運動と脳の身体機能チェックやこれまでの総復習クイズなどを行い、健康状態を確認した。

また、それまでに健康教室に50回以上参加した方（最多参加者は７名）へ、感謝の気持ちを込めて表彰を行った。

第100回転倒予防健康教室
（2018年11月20日）

第６章

公益化と進展

（2019～）

Ⅰ　組織の変遷

操風会の公益財団法人化

2008年（平成20）、公益法人制度改革によって、財団法人が一般財団法人と公益財団法人に改組された。操風会のように民法の規定に基づいて設立された公益目的の財団法人は「特例財団法人」とされ、2013年11月30日までに、一般財団法人、公益財団法人、解散のいずれかを選ばなければならなくなった。事業目的に公益性が認定される必要のある公益財団法人は当時敷居が高く、2013年（平成25）４月、操風会はすべての事業が課税対象となる一般財団法人に移行せざるをえなかった。

2017年（平成29）10月、約65年間ともに歩んできた高畠眼科・高畠西眼科とは別の道を歩むことになった。高畠眼科・高畠西眼科は新たに「一般財団法人操志会」を設立し、岡山旭東病院・岡山リハビリテーション病院・岡山ハッピィライフ操風等は一般財団法人操風会を継承することになった。

翌2018年（平成30）４月、かねてより公益財団法人を模索していた当財団は、１年後の公益財団法人への転換をめざし、事務部内にプロジェクトチームを発足させた。そして、コンサルタントに協力を依頼し、岡山県保健福祉部医療推進課の指導のもと作業に取りかかり、事業の概要・構成等を決め、当財団が行っているすべての事業が公益性の高い公益目的事業であることを訴えた。

その結果、2019年（平成31）４月１日、念願であった「公益財団法人操風会」が承認される運びとなった。

財団本部には、医療現場の業務効率化、負担軽減、情報共有などを促進するために、IT戦略室が立ち上げられ、医療DXの推進に着手した。また、感染管理部門もでき、新型コロナ感染症流行の対応にあたった。

定期巡回・随時対応型訪問介護看護事業所への変換

2017年（平成29）7月、ケアステーション操風は、訪問介護事業所から、より地域密着型サービスである定期巡回・随時対応型訪問介護看護事業所に体制変更を行なった。これにより、訪問看護ステーションたんぽぽとの連携強化と看護・介護の充実化を図った。岡山ハッピィライフ操風でも生活支援サービスを見直した。

「訪問看護リハビリステーションたんぽぽ」への名称変更

2019年（平成31）４月、訪問看護ステーションたんぽぽは、訪問看護リハビリテーションの利用ニーズの増加と定期巡回、随時対応型訪問介護看護の利用数の増加に伴い、作業療法士１名・訪問看護師１名を採用し、サービス態勢を整え「訪問看護リハビリステーションたんぽぽ」へ名称を変更した。

Ⅱ　人とモノの変遷

岡山旭東病院各診療科の変遷

2019年（平成31）４月から、岡山旭東病院では全国的な流れもあり「神経内科」から「脳神経内科」に名称が変更された。また、「泌尿器科」を新たに追加し、11診療科となった。

2019年（平成31）の整形外科総手術件数は1,924件で前年比11.4％増となり、一般外傷に加え鏡視下肩関節手術治療が本格的に始動した。PED（経皮的内視鏡下腰椎椎間板摘出術）、BKP（経皮的椎体形成術）に加え、腰椎椎間板ヘルニアに対するコンドリアーゼ椎間板注入法（ヘルニコア）なども始まり、脊椎関係手術が大幅に増加した。

2020年（令和２）１月から皮膚科、救急科を新たに追加し、13診療科となり、専門分野に他科のコンサルが入ることで、充実した診療を行える態勢となった。４月には、スポーツ関節外科センターを開設した。

2021年（令和３）４月には、整形外科医が２名加わり、手術件数は年間2,000件を超すようになり、岡山大学関連病院の中でもトップクラスの件数となった。4月から、本態性振戦などの「ふるえ」に対するMRガイド下集束超音波療法「FUS」を中国地方で初めて開始し、岡山大学病院、倉敷平成病院と連携して治療を実施、9月には、循環器内科に常勤医師１名が赴任し、心臓カテーテル治療、血管内治療、ペースメーカーの留置に対応できるようになった。

2022年（令和４）１月、血管内治療経験の豊富な脳神経外科医の赴任により、低侵襲の脳動脈瘤コイリング術の件数は前年対比で大幅に増加した。9月には、整形外科医と循環器内科医とが協力し、肩の痛みに対する運動器カテーテル治療を中四国で最初に開始した。12月には、サイバーナイフによる前立腺がんの治療を開始した。

Column　公益財団法人への転換　　高見英敏

財団法人操風会は、国民病ともいうべき肺結核の患者の増加、生活条件の低下による眼疾患トラホームの蔓延等を背景に、高畠正夫（高畠眼科医院）、土井健男（東山病院）が協力して、私財を投じて昭和28年（1953年）6月に設立された。その後の当財団は、先人たちの英知と努力の結果、大いに発展したことは周知の通りである。その概要を簡単に振り返ってみたい。

昭和28年６月　　高畠眼科、東山病院が連合体の法人として財団法人操風会設立
昭和54年11月　　高畠眼科医院を新築（鉄筋コンクリート５階建19床）
昭和56年９月　　東山病院　老人長期入院病院に機能転換（199床）
昭和58年10月　　旭東整形外科医院開院（19床）
昭和59年12月　　旭東整形外科病院開院（40床）
昭和63年１月　　上記　岡山旭東病院に名称変更及び増床（102床）
平成10年４月　　東山病院の名称を岡山あさひ病院に変更（129床）
平成10年５月　　岡山旭東病院（162床）　東山病院より60床移設完了
平成19年４月　　岡山あさひ病院から岡山リハビリテーション病院に名称変更
平成21年４月　　岡山西病院開院（旧　平松病院）40床
平成23年11月　　岡山リハビリテーション病院新築移転（岡山市中区倉田）
平成24年11月　　高畠西眼科医院開院
平成25年４月　　岡山ハッピィライフ操風　開所
平成26年３月　　岡山西病院閉院40床移設　　岡山旭東病院（202床）
令和元年12月　　岡山旭東病院（202床　→　214床）

以上名称及び病床の変遷である。詳細はこの記念誌の至る所に出てくるので割愛する。

平成25年4月、公益法人制度改革に伴い、事業目的に公益性が認定される必要がある公益財団法人は当時敷居が高く、株式会社と同様に、すべての事業が課税対象となる一般財団法人に移行した。

平成29年10月、約65年間共に歩んできた高畠眼科・高畠西眼科との間でクリニックと病院経営に対する考え方の違いがあり、発展的に法人を分割することとなった。高畠眼科・高畠西眼科は新たに一般財団法人操志会を設立させ、残った岡山旭東病院・岡山リハビリテーション病院・岡山ハッピィライフ操風等は一般財団法人操風会を継承することになった。

平成30年４月、かねてより公益財団法人を模索していた当財団は、1年後の公益財団法人への転換を目指し、事務部内にプロジェクトチームを発足させ、コンサルタントの協力を得て、岡山県保健福祉部医療推進課の指導の下、作業に取り掛かった。事業の概要、事業の構成等を決め、当財団の行うすべての事業が高い公益目的事業であることを訴えた。足繁く県庁に通い、申請文書を作成し、平成31年4月1日、永年の念願であった公益財団法人操風会に承認された。以下は承認された申請文書の一部である。

【事業の概要】

主に脳・神経・運動器の疾患について、医療・介護・福祉・予防事業、医学の研究及び育英事業、地域社会への貢献及び文化事業を通じて切れ目のない全人的医療・介護を提供するとともに、在宅医療及び在宅介護活動を展開し、併せて関連専門職の研究・研修を支援する等の事業を、地域の各機関と連携し総合的に実施することによる公衆衛生の向上を目的としている。また、県南東部の医療を守るために救急医療を積極的に受け入れ、地域医療体制の向上を図る。

【事業の構成】

【事業をひとつにまとめる理由】

当事業において、病院の運営及びそれに付随する事業を展開することで、脳・神経・運動器分野における一連の社会貢献を行うことから、関連する１つの事業としてまとめている。これは即ち、日常生活圏域内において予防、医療、介護、住まいが切れ目無く一体的に提供される「地域包括ケアシステム」の実現に寄与するものと考える。

岡山県の地域医療計画によると、県南東部医療圏において、高齢化による脳卒中及び大腿骨骨折の医療需要は2030年をピークに増加する見込みである。増加の懸念される脳卒中・大腿骨骨折はともに当財団での医療・介護事業の中心であり、この地域における脳・神経・運動器疾患に対応する当財団の役割は重要である。

平成28年度国民生活基礎調査によると、65歳以上の要介護となる直接原因は、脳血管疾患（脳卒中）16.6%、骨折・転倒12.1%、関節疾患10.2%、認知症18.0%となっており、脳・神経・運動器領域で57%を占める。そのため、地域住民の安心と健康を維持するには、救急・急性期医療、回復期リハビリテーション、介護・在宅ケアに至るまで切れ目のない一貫したケアが重要と言える。

当財団は、急性期には「岡山旭東病院」が手術・治療と早期から急性期リハビリテーションを365日体制で実施しており、地域医療機関からは年間約10,000件の紹介を受けている。回復期には「岡山リハビリテーション病院」が、在宅復帰に向けた身体機能回復訓練を行い、脳・神経・運動器疾患の地域の回復期リハビリテーションの一翼を担っている。回復期以降には、「居宅介護支援事業所ケアプラン操風」、「訪問看護リハビリステーションたんぽぽ」、「訪問リハビリテーション」、「通所リハビリテーション」、「通所介護事業所デイサービスセンター操風」等により在宅復帰を支援している。在宅生活が不安な方には、「サービス付き高齢者向け住宅　岡山ハッピィライフ操風」で24時間の生活管理を行い、「定期巡回・随時対応型訪問介護看護事業所ケアステーション操風」による身体介護・生活援助を行うなど、地域の在宅医療・介護機関との相互連携により包括的なケアを提供している。

岡山旭東病院では、健康センターを備えており、1991年より岡山県下初の脳ドックを開始、2004年には中四国で2番目にPET-CTを導入し、がんドックを開始するなど、先進的な予防医学の普及に努め、地域住民の健康維持・発展に寄与している。また、講師派遣・実習施設事業等により、多くの学生を受け入れや地域医療従事者への教育の実施と大学への助成金交付等通じて地域の医療発展・育英事業にも貢献している。

これらのことから、当事業における予防・医療・リハビリ・介護・在宅ケアに至るまでの相互連携なくして、地域の脳・神経・運動器疾患のニーズに対応することができないため、これを一体的事業としてまとめることで、地域住民の安心と健康を守ることに寄与していると考える。

（財団事務局長）

財団本部

MRI(3.0T)更新

MRI装置更新・移動型デジタル式汎用一体型透視診断装置導入

2019年（平成31）２月、岡山旭東病院ではMRI装置２台（3.0T １台、1.5T １台）を更新し、検査室内、待合の改修を行なった。４台稼働しているMRI装置のうち、３台が鮮明な画像検査が可能な3.0TMRIとなった。短い時間で高画質の撮影が可能となり、MRI装置の音も小さくなり患者の心身的負担が低減された。

９月には、手術室に移動型デジタル式汎用一体型透視診断装置が導入された。

全自動輸血検査装置の導入

2019年（平成31年）2月、岡山旭東病院臨床検査室には、安全な輸血検査の実施と人員不足を補うため全自動輸血検査装置（IH-500）が導入された。夜間、休日などでも安全に血液型検査、輸血検査が実施できるようになった。

導入されたインターカム

インターカムの導入

2019年（平成31）３月、岡山旭東病院では職員間情報共有の効率化を目的に、インカム75台を導入した。そして、外来、病棟、健診等、８チャンネルに分けて運用を開始した。

従来は看護師を捜すのに、大声で呼んだり、廊下を走って捜し回ったりするなど時間と労力が必要だったが、インカム導入により短時間で簡単にコミュニケーションをとることが可能になった。

土井英之医師の提案で導入され、使用していくうちに、教育的視点、情報の共有、医療安全の視点等から、なくてはならないツールとなった。

翌年３月には手術室とICUに合計10台のインカムを追加導入し、手術室内とICU間のスムーズなコミュニケーションを実現した。

Coroban

AI転倒転落予測Corobanの協力開発

エーザイがFRONTEOとともに開発したAI転倒転落予測システムCorobanの開発に、2019年（令和元）５月に岡山旭東病院も協力した。

Corobanは抽出した看護記録データからAIが解析して転倒する可能性をスコア化するシステムで、均一かつ客観的な判断を行うことができるだけでなく、従来のリスク評価と同等の精度で転倒予測が可能となり、看護師の業務負担の軽減につながる。Corobanは同年９月に医療機関への販売が開始され、2020年には特許権を取得している。

PHR（Personal Health Record）の導入

2019年（令和元）９月に岡山旭東病院は、㈱NOBORI（2022年にPSP㈱と合併しPSP㈱に）のPHRを導入した。

「医療情報は患者さんのもの」というのがPHRの基本コンセプトで、予約、薬、検査結果、画像等の情報を患者さんのスマートフォンでいつでも閲覧可能になる。

県内初のPHR導入ということで、NHK、RNC西日本放送、KSB瀬戸内海放送の３テレビ局と山陽新聞から取材を受けるなど、マスコミからも注目された。

NOBORI

NOBORI（取材対応）

電子カルテ等の病院情報システムを更新

2019年（令和元）11月、岡山旭東病院を中心とするすべての病院情報システムを更新し、岡山リハビリテーション病院との統合を想定したサーバー構成とした。

初めてのサーバー仮想化に取り組み、サーバー室内を大幅に省スペース化することができた。従来、医事会計システムで行っていた受付業務を電子カルテに移行したのも、大きな変更点である。

なお、１年後の2020年（令和２）11月には岡山旭東病院と岡山リハビリテーション病院とのシステムが統合されたことにより、両院の患者番号も統合され、さらに診察券も両院で使える共通診察券に変更、同じ患者番号でカルテを開き、両院の診療記録を閲覧することが可能になった。

また、岡山リハビリテーション病院との統合のタイミングで、岡山旭東病院でタック社のリハビリシステムを導入した。岡山旭東病院では初めてであり、リハビリ部門としては念願のリハビリシステムの導入となった。

同時期に岡山旭東病院で使用していたグループウェアに岡山リハビリテーション病院の職員を登録して共同利用が可能になり、両病院間で回覧等の情報のやりとりが可能になった。

診察券

タック社リハシステム

AIが問診 外来効率化の記事(2020年2月17日 山陽新聞社提供)

Ubie

Ubie(WEB問診)

コロナ用テント

AI問診(Ubie)の導入

2020年（令和２）１月17日、岡山旭東病院では、医師の働き方改革、タスクシフティングを目的に、紙の問診票を廃止し、Ubie社のAI問診を全診療科で導入した。

ユビーAI問診とは、患者さんの主訴等をもとにAIが最適化された質問を自動生成・聴取し、回答は医師の言葉へ即時翻訳されて医療者向けに出力される。医療者のカルテ記載業務の大幅な効率化はもちろん、患者さんの伝え漏れ防止・医療者の聴取漏れ防止の両面で医療の充実化もサポートしてくれる（「ユビーメディカル」HP参照)。

中四国初のAI問診導入ということで、テレビ４局と新聞３社から取材を受け、全国的にも注目される取り組みとなった。

なお、新型コロナウイルス感染症が広がった同年６月には、ユビースマートフォン問診が導入され、自宅などで来院前に問診を済ませることが可能になり、院内での問診が不要になった。AIがコロナ感染を疑えば、医師の端末に警告が送られ、他の患者と動線を分けて案内し、防護服を着用するなどの措置がとられる。

新型コロナ感染症の拡大とコロナ病床の設置

2020年（令和２）は年初から新型コロナウイルス感染症が広まり、３月には緊急事態宣言が発令され不要不急の外出が禁止された。社会的に混乱する中、感染者の受入要請などもあったが、当初、岡山旭東病院は脳・神経・運動器疾患の専門病院であるため、感染者治療対応は困難と判断し、総合病院が感染者治療のために受け入れが困難になった救急患者の受け入れに専念する方針とした。

しかし、パンデミックの勢いは弱まらず、８月に感染管理システムを導入し、新型コロナウイルスの流行拡大によって増え続ける感染管理部門の負荷軽減を図った。

岡山旭東病院も治療方針を変更し、2021年（令和３）５月14日からコロナ病床（西館２階病棟に８床）における入院治療を開始した。

内科医師、感染管理部長、西館２階病棟看護師らが尽力した。その結果、年末までに発熱外来に725名が訪れ、33名が入院した。

コロナ禍の中、市内各病院とも患者受け入れが困難なこともあり、当院への救急搬送依頼が増加し、2021年の救急車受入件数は2127台と、年間2000台以上の救急搬送受け入れという病院全体の目標も達成することができた。

岡山旭東病院院長、副院長の交代

2020年（令和２）４月、岡山旭東病院では吉岡純二院長、土井英之副院長が就任し、事務長、看護部長、診療技術部長なども交代して新体制となった。1988年（昭和63）１月から約30年岡山旭東病院を牽引してきた土井章弘院長は総院長に改め、土井基之副院長は理事長に就任し、財団全体を統括していくこととなった。

Wi-Fi導入

2020年（令和２年）12月、岡山リハビリテーション病院では入院患者の要望をきっかけにWi-Fiの導入を行った。これにより、入院患者・家族等や病院職員においても利用が可能となり、療養環境・職場環境の改善につながった。

MRガイド下集束超音波治療の導入

2021年（令和３）３月、岡山旭東病院はMRガイド下集束超音波治療器（MRgFUS）を導入した。

FUSは2016年（平成28）12月15日に本態性振戦の薬事承認を受け、2019年（令和元）６月１日に保険適用、2020年（令和２）１月15日にはパーキンソン病が薬事承認され、同年９月１日に保険適用された。

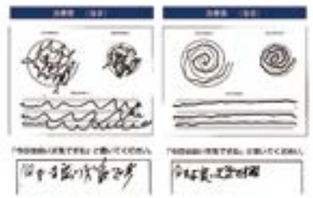
2021年３月20日にFUS導入記念講演会・内覧会を開催し、こうした経緯を経て、岡山大学脳神経外科、倉敷平成病院の協力のもと、FUS治療体制を整え、2021年５月29日、第１例目のFUS治療を実施した。

財団の介護システムを統合

2021年（令和３）４月、岡山ハッピィライフ操風に設置していた介護システム「ほのぼの」のサーバーを岡山旭東病院のサーバー室に移設し、岡山リハビリテーション病院でも、利用していた同システムのデータを岡山旭東病院のサーバー室へ移行した。さらに、訪問看護リハビリステ

新体制（幹部集合写真）

FUS治療機器


FUSの問診票

FUS導入記念講演会

Column　医療と薬から見た岡山旭東病院の歩みと薬剤部の足跡　　三澤　純

旭東整形外科医院より整形外科病院に移行し、初代薬局長として薬局の礎を築かれたのは、故小坂　勤先生。小坂先生は、国立岡山病院の元薬剤部長の経験を基に、各部署の薬剤を定数化と処方で徹底管理し、当時からシステム的な管理方法を導入していた。102床の病院となった第2代薬局長は、現在、岡山市内を中心に展開するこやま薬局の創業者となった小山　敏章先生。小山先生は、川崎病院での勤務経験から、1994年に新設された薬剤管理指導料の算定開始（入院服薬指導）を、1995年1月より薬剤師3名で開始するなど、行動力と実行力を備えていた。当時、岡山県下でも薬剤管理指導の算定施設は、数病院しかない時代だった。その翌年、薬剤師による定期注射の混合調製も開始した。現在では、注射薬の調製は、抗がん剤や高カロリー輸液などを中心に薬剤師業務として確立しているが、当時は実施施設がほとんどない中、末梢輸液の調製まで薬剤師が携わることの意義は、処方や調製後の鑑査のみならず、配合やルート確認など、様々な視点から安全管理に貢献できたと考える。その後、私　三澤　純がバトンを引き継いだ。入院では配薬カートによる管理を導入するなど、より管理面を高めたが、既に業務展開・改善を行う基盤と指針が確立していたことは、その後、事故報告では薬剤関連の比率の低さとなって表現され、薬剤業務での大きな財産になった。

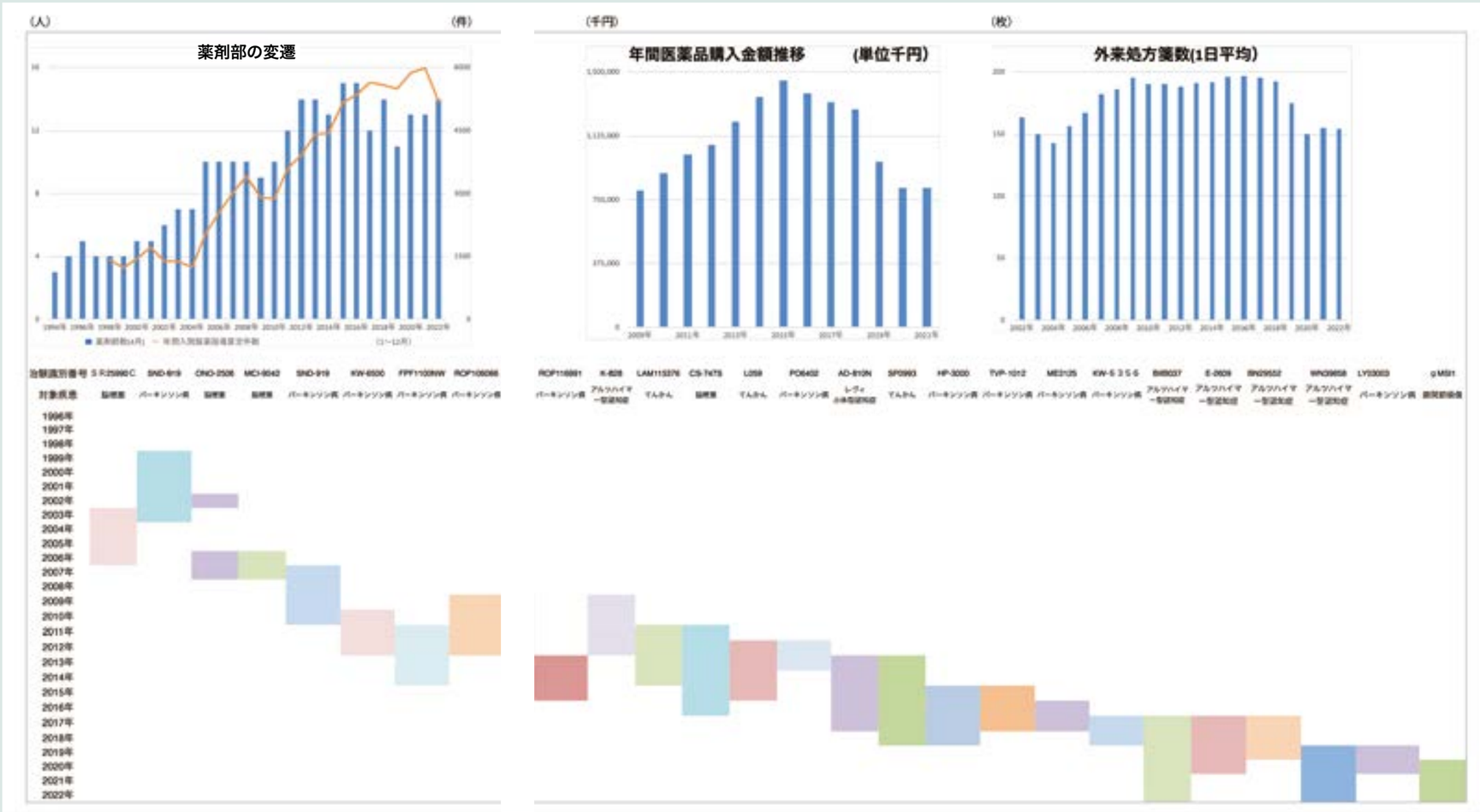
病院の発展とともに、年々薬剤業務も拡充した。オーダーリングの開始、電子カルテの導入とともに、錠剤自動分包機も導入した。薬剤管理指導の算定は、週1回算定に移行。薬局の移転に伴い、無菌調剤処理加算も算定を開始した。また、日祝日のオンコールを日直体制に移行、薬剤師数10名となった2005年からは、365日で当直体制に移行することができた。脳梗塞急性期治療で、t-PA製剤による血栓溶解療法が認可されると、積極的に臨床へ関わり、全例で薬剤師が立ち合い、適応確認と投与量の指示と薬剤調製を担った。PET検査の薬剤合成・検定にも携わった。同時期では、診療部の充実期でもあり、新薬創薬つまり治験依頼が増え、事務局だけでなく、薬剤師2名がCRC治験コーディネーターとして貢献した。その後も治験は、神経変性疾患を中心に毎年のように新たな研究に携わるだけでなく、様々な多施設共同研究も実施された。外来診療では、患者数の増加が続き、外来処方箋数も毎年のように平均8%ずつ増加し、多い日には1日400枚超え、1日平均でも200枚を超えた。様々な新薬の開発・市販も重なり、購入金額は8年で倍増、ピーク時の2015年には医薬品の年間購入が15億円にも迫った。特にパーキンソン病を代表とする神経変性疾患の治療薬では、全国でも屈指の消費量となり、病院収支の薬剤比率が22%を超えるなど、診療内容が激変した時期でもあった。そのため、外来診療では待ち時間が2~3時間を超え、14名体制となった薬剤師でも、外来調剤に6~7名を必要とした。一包化して提供する患者が増え、２台ある錠剤分包機は常に待ち状態、機械も人もフル稼働状態だが、それでも薬の待ち時間も平均1時間近く、最大では2時間となるなど外来患者の対応に追われた。このような状況から院外処方箋へ移行も、ブレインストーミングで議論・検討されたが、当院の専門性の高さから、処方医師との連携や意図・情報の共有や患者個々への対応などを重視し、病院主導による院外処方箋の発行は見送られた。

2012年には病棟業務で、患者への服薬指導だけでなく、薬剤管理での薬剤師の貢献度が評価され、病棟薬剤実施加算が新設された。薬剤師の病棟専従制で、施行とともに算定を開始した施設は、岡山県下でも当院を含め５病院しかなく、それまでの業務展開が実る形となった。

それまでも脳梗塞治療においては長年、県南東部で常にトップであったが、2020年が近くなり、214床となった当院は、紹介率や救急の搬送台数、整形外科の手術件数などが飛躍的に伸びた。薬剤業務では、ジェネリック医薬品への採用移行や外来患者数も落ち着きを見せ、薬剤比率も低下したが、術前薬剤管理や退院後の自己管理の指導や環境調整など、入院前から退院までの患者情報と管理・指導が、より深く緻密となった。周術期管理加算や術後疼痛管理加算も取得し、質的には飛躍的に充実した。コロナ禍においても、治療と予防に積極的に関わり、新たな治療薬の登録・臨床上の適合チェック、準備・調製だけでなく、コロナワクチンの円滑な実施運営に貢献した。このように、臨床業務への時間を必要とする中、2016年以降は継続的なマンパワー不足との戦いも強いられていた。厚労省でも検討会で議論されている薬剤師の地域偏在と病院離れが顕著となり、当院でも薬剤師確保、維持にも苦労する状態が続いた。そのため、一人一人の役割と負担がより大きくなったが、明るい将来を希望に目指したスタッフのおかげで、病棟専従業務や日当直体制などの継続を維持・継続することができている。

2019年薬剤部となり、これまでは薬という対物業務が中心であった薬剤師の業務は、対人業務へのシフトが盛んに呼びかけられている。当院では、随分前から対人業務と対物業務を両立させてきたが、これからは、対物業務の機械導入や助手へのシフト、更にはIT、DX、AIも駆使した業務展開が進むと予想される。元々、物の管理には長けた薬剤師の役割は、今後、如何に臨床での薬物治療に貢献できるか、如何に医師と共に薬物治療の計画から結果までを追求できるかを目標に、更に存在感のある薬剤師集団となるよう、切に願っている。

（岡山旭東病院薬剤部長）



薬剤部変遷・治験

ーションたんぽぽのシステムも「ほのぼの」に変更することにより、財団の介護システム統合が完成した。

これにより、従来施設間でやりとりされていた大量のFAXが不要になり、スムーズな情報共有を実現した。

また、訪問看護ではiPad10台を導入し、訪問先でも情報参照、情報入力が可能となった。

旭東sanアプリ

病院公式アプリ「旭東San」のリリース

2021年（令和３）５月、岡山旭東病院は、病院公式アプリ「旭東San」を地元の企業と共同開発してリリースした。

これにより、外来待ち状況がアプリ内で閲覧可能になり、混雑する待合で長時間待つ必要がなくなり、待合の混雑緩和は感染対策としても役立った。

PHRやAI問診等の既存のサービスもアプリ内に集約し、そのほかにも、アート案内と院内マップを連動させた仕組み等、患者サービス向上のためのツールとして活用した。年末までに475名が登録、またアプリ導入後、PHR登録者数が２～３倍に増加した。

岡山リハビリテーション病院HPリニューアル（トップ画面）

ホームページリニューアルとSNSの開始

岡山リハビリテーション病院では、2021年7月より、ホームページのリニューアルと、SNS（フェイスブック、インスタグラム）を新規開設した。インスタグラムでは病院行事やニュースの発信の他、病院の雰囲気が伝わるような内容を中心に更新を行っている。

第5手術室

第5手術室の増設

2022年（令和４）４月、岡山旭東病院では、年々増加する手術の必要な症例に対応するため、第５手術室を増設した。

肩の痛みに対する「運動器カテーテル治療」の導入

TAME治療

2022年（令和４）９月、岡山旭東病院では、肩の痛みを緩和させる運動器カテーテル治療（TAME治療）を導入した。

痛みの部位で過剰に増えてしまう毛細血管が原因で、カテーテルで抗生物質を注入して毛細血管を消滅させる治療で、中国地方では初の試みとなった。

この治療では、手首の動脈から直径0.6ミリのカテーテルを挿入し、患部に抗生物質を投与して不要な毛細血管を詰まらせ、血流を止めることで付近の増殖した神経とともに消滅させる。

サイバーナイフ　前立腺がん治療開始

2022年（令和４）12月から、岡山旭東病院はサイバーナイフによる前立腺がんの放射線治療を開始した。手術や薬物療法などの場合は２カ月かかるところ、１泊２日の入院と通院５日間で治療を終えることができ、通院中の治療時間は約30分と治療日数が少ないことが特徴となっている。

Ⅲ　職場環境の改善

「将来世代応援企業」で表彰状伝達

将来世代応援企業賞

伊原木隆太岡山県知事ら17県知事でつくる「日本創世のための将来世代応援知事同盟」が2015年度から毎年各県１団体ずつ表彰している「将来世代応援企業表彰」に岡山旭東病院が選ばれ、2020年（令和２）８月６日、院内で表彰状の伝達が行われた。

経営指針の作成に医師、看護師ら全職員が関わり、長時間労働を減らすためにAI問診を導入したり、医師をサポートする医療事務を採用、また、時短勤務や育休制度の充実等が評価されたもの。

（「山陽新聞」2020年８月７日付記事参照）

将来世代応援企業賞

働き方改革へ向けた就業時間の変更

2020年（令和２）４月、岡山旭東病院では、9:00～18:00としていた就

業時間を8:30〜17:30に変更した。これにより、朝礼や朝のカンファレンスを診療開始前の就業時間に含めることができた。また、職員研修の時間短縮や就業時間内参加なども実行し、働き方改革へ向けての体制整備を行なった。

インターネット環境の高速化とセキュリティソフトの導入

2022年（令和４）３月、岡山旭東病院では管内の無線LANをWi-Fi2（電子カルテ）／Wi-Fi3（インターネット）から、すべてWi-Fi6の最新規格に更新した。

同時に、インターネットの接続方式を従来のPPPoE方式からIPoE方式に変更。回線速度が10倍程度高速化し、ウェビナー配信など安定したインターネット利用が可能になった。

さらに５月には、医療機関でも被害が急増しているランサムウェア対策の一環として、外部接続端末にセキュリティソフト（Lanscopeクラウド、Deep Instinct）を導入した。これにより、端末の利用状況監視とAIを活用したふるまい検知でセキュリティ対策が強化された。

内部の環境は従来型のアンチウイルスソフトの最新化のみであり、あくまで最低限の対策であった。

癒やしの医療環境ニュージーランド研修・フランス研修

岡山リハビリテーション病院では、癒やしの医療環境の視察を目的とした海外研修に十河医師が参加。

2022年（令和４）４月ニュージーランド研修では、癒やしの環境研究会の高柳和江先生引率のもと、老人病院、レストホーム、リタイアメントヴィレッジ、ホスピスなどを視察した。また、2023年（令和５）７月フランス研修では、パリ市内及び近郊にある８病院（施設）の視察と、フランス保健省のレクチャーを受ける研修に参加した。

JOIN

Joinの導入

2022年（令和４）６月、岡山旭東病院では、医師が院外でMRなどの画像を中心とした情報共有をする目的で、汎用画像診断装置用プログラムJoinを導入した。ガイドラインを遵守するかたちで、管理アプリを入れることを条件にBYODを初めて容認することになった。

また同月、NOBORIのPHRと国のマイナポータルが連携、他の医療機関で支払った医療費や処方された薬の情報などがNOBORI上で閲覧可能になった。

Ⅳ　病院行事と地域活動

おかやま協働まちづくり賞で大賞を受賞

第3回なかまちーずフェスティバル

2019年（平成31）１月、操風会職員が関わり、竜操・高島学区、操山・東山学区、操南・富山学区の３地域で、「なかまちーず地域住民と専門職の意見交換会」を開催し、同年３月、「第３回なかまちーずフェスティバル」を岡山ふれあいセンターで開催した。

同年12月、「岡山市協働のまちづくり条例」に基づく「おかやま協働のまちづくり賞」で、「なかまちーず」は大賞を受賞した。

翌2020年（令和２）に予定していた「第４回なかまちーずフェスティバル」は、直前まで準備を進めたが、コロナ禍によりやむなく中止した。なかまちーず活動はオンライン化し、コロナ禍でも専門職での情報共有は継続させた。

あっぱれ桃太郎体操活動

あっぱれ桃太郎体操

2019（平成31）２月、岡山リハビリテーション病院と地域の民生委員と医療・福祉機関との連携会議をきっかけにあっぱれ桃太郎体操の活動を発足した。第１回（４月３日）は中区地域包括支援センター職員より指導を受け、その後は週１回水曜日に開催となった。体操後は当院職員が健康教室を開催し、病気、栄養、運動についての講義を行うなど活動は約１年継続し、毎回20名前後の参加があった。しかし、2020年（令和２）３月からは新型コロナウイルス感染防止対策のため活動は休止となった。

岡山市デイサービスインセンティブ事業表彰

インセンティブ事業授賞式

2019年（平成31）３月、デイサービスセンター操風は、岡山市デイサ

ービスインセンティブ事業において、デイサービス事業における利用者の身体精神状況の変化および研修参加が評価され、表彰された。

第22回日本臨床脳神経外科学会開催

連携カンファレンス

第22回日本臨床脳神経外科学会を岡山で開催

2019年（令和元）7月20日～21日、第22回日本臨床脳神経外科学会（土井章弘会長）を、岡山コンベンションセンターで開催した。参加者は延べ1,200名に及び脳神経外科領域の最新の治療方法、病院経営やAIの導入など幅広い内容が報告された。

また、ANAクラウンプラザホテル岡山にて、学会前日の19日には会長招宴、20日には学会懇親会を開催した。

コロナ禍の取り組み

2020年（令和２）以降、コロナ禍の影響でイベントの中止を余儀なくされたが、岡山旭東病院では、入院患者向けのイベントとして行っていたアフタヌーンティーサービスやワゴンサービスは実施することができなかったが、調理師が中心となって、季節や行事に合わせた手作りお菓子に、よりいっそう力を入れて提供した。患者さんと直接コミュニケーションをとることが難しい環境のなかで、少しでも癒しのサービスとなるよう努めた。その他にも、地域連携カンファレンスのオンライン配信の開始や、職員向け行事として少人数での交流会開催、全職員対象のギフト配布などを実施した。

また、カフェ赤い鼻の新規事業として、テイクアウトのお弁当を企画し、カフェ利用者および病院職員への提供・販売を開始した。

YouTube（トップ画面）

YouTubeを活用した一般向け行事の開催

2020年（令和２）、新型コロナウイルス感染症の流行により病院行事が相次いで中止になったことを受け、岡山旭東病院は、2020年10月からYouTubeによる健康情報の発信を開始した。

転倒予防健康教室として、健康情報や運動動画を毎月定期配信し、パーキンソン病健康教室として、講師による講演内容を収録して２回にわたり配信し、これをきっかけに動画視聴数、チャンネル登録者数が大幅に増加した。

2021年（令和３）８月にはキッズデイ企画として、川崎医療福祉大学医療福祉デザイン学科の学生とコラボして、小学生を対象とした医療と健康に関連する動画を配信した。同年11月には地域ふれあいフェスティバル企画として、園芸教室の動画配信をおこなった。

下校時の見守り

高齢者活躍事業「ハタラク事業」開始

2021年（令和３）６月、デイサービスセンター操風では、岡山市と協業し、高齢者活躍推進事業（以下「ハタラク事業」）を開始した。デイサービス利用者の生き甲斐・やり甲斐を目的に地域公園清掃活動や下校時の見守り、小物を作成し地域のお祭りや岡山旭東病院、岡山リハビリテーション病院の売店での販売を開始し、売り上げはすべて作成した利用者へ還元した。

ハタラク企業で制作した商品

操風会年報1号発行

2022年（令和４）３月、操風会年報として、岡山リハビリテーション病院としては第１号となる年報が発行された。仕様としては、岡山旭東病院・岡山ハッピィライフ操風を含む操風会全体の年報となり、公益財団法人としての年報第１号ともなった。

操風会年報

Column　診療実績と医師の変遷　　吉岡純二

1983年　旭東整形外科（整外）医院は院長土井基之（現理事長）が一人で診療を開始し、その年は19件の手術を施行、以後、1987年まで手術件数は年間約100件余りで推移した。

1988年　脳神経外科（脳外）が加わり、脳・神経・運動器疾患の総合的専門病院として岡山旭東病院（院長：土井章弘）と名称変更を行った。常勤医師は5名（整外：土井基、鷹取，脳外：土井章、吉岡、リハビリテーション（リハ）：長谷川寿）でスタートし、その後、整外は７月に香川医大から脳外は岡山大学（岡大）放射線科より研修医が加わった。脳外の手術第１例目は２月に施行された慢性硬膜下血腫でその年の脳外の手術件数は65件、うち開頭術26件（動脈瘤：７，腫瘍：２）spine: ７）と頭部の手術はまだ少なかった。そのため手根管症候群や胸郭出口症候群など末梢神経手術や眼科の研究会にて吹き抜け骨折や顔面痙攣の講演を行い、症例を集めた。整外は165件と増え、岡大麻酔科　森本（非常勤）に緊急手術をカバーして頂いた（手術数の変遷はグラフを参照）。また神経内科（神内）に風早が常勤で加わり専門病院の形ができてきた。当院のMRIは高性能で検査や研究使用を多く依頼された。

1989年　脳外に岡大より研修医２名が加わり、1990年の手術件数は100件を超し、脳神経外科専門医訓練施設（C項）に、翌年（1991年）には151件で大学病院と同格のA項となった。MRIでの脳動脈瘤の描出可能となったことで、この年に脳ドックを中四国地方で初めて開始し、その後の未破裂脳動脈瘤の描出の増加などにより頭部手術が増え、次第に神経、脊椎手術の割合が減っていった。整外は200～300件／年で推移し、岡大からの非常勤医の助けもあり、脊椎外科が増えた。

1990年　リハ科ではリハ専門医教育施設となり川崎医科大より研修医が派遣され、1992年入院治療が開始されるようになった（以降はリハビリテーション科の変遷を参照）。

放射線科には入沢が常勤で入職し、神経放射線診断学に大きな手助けとなった。

1993年　脳外に佐藤が入職し、1994年に手術件数が初めて202件と200件を超えた。1994年から1999年まで佐賀医大から入れ替わり3名の研修医が加わり、1995年開頭術は100件を超え、若い医師による活気がみなぎっていた。1996年常勤で麻酔医　辻が赴任し、整外の手術も300件を超えた。2000年整外に平野が加わった。

1997年　健康センターに大森、内科に黒住が加わり内科系診療が充実した。この頃、神内は入院120例ほどを常勤医　辻一人で受け持ち、治験数では全国４位（1999年）であった。

2000年　CyberKnifeが日本で４番目に入り、脳外・佐藤が専任に、さらに馬場が加わった。岡大脳外同門だけでなく、中四国からの紹介も多く、頭頚部の定位放射線治療に貢献し、さらに発展に期待がかけられたが、業者の申請手続きミスにより2002年12月から治療が中止となった。2004年７月の再開後は約250件／年を治療し、2018年に新機種Ｍ６の導入により、肺癌、肝癌をはじめ体幹部腫瘍に対する治療数が増え、2022年からは前立腺癌の治療を開始し、紹介患者が多く、治療件数が増加した。

脳卒中センターは2000年に開設し、神内に柏原と他１名の常勤医が加わり脳梗塞、頭痛、めまいを一手に引き受けることとなり、それまでの脳外の負担は軽減し、手術に専念できるようになった。2004年県下で初めてのPET/RIセンターで奥村が一般臨床を開始し、４～12月で保険／自由診療で717／710件の検査を行った。しかし翌年には他施設でPET/CTが始まり、競合が始まった。2004年脳ドックに専任医師が着任し、2007年には循環器科の常勤医が入職した。内科・黒住は内視鏡検査を500件／年こなし、2008年には1000件／年を超えた。脳外では手術成績をホームページに公表し、当時としては珍しく反響を呼んだ。MRAで簡単に未破裂脳動脈瘤が見つけられ、その予後がまだ明らかではなく、血管内外科が一般的でなかったため、当院でのネッククリッピング術は2003～07年で72～97件／年と多く、施設あたりの件数では中四国でトップとなった。より安全に手術を行うためナビゲーションシステムやモニタリングも積極的に使用するようになり2006年には脳外総手術件数は382件に達した。2008年中嶋が加わった後も手術数は多く、2004～16年では脳外の手術件数は300件／年を上回った。

しかし、未破裂脳動脈瘤の予後が明らかになり、血管内外科の発達により手術適応が狭められたことなどもあり、手術件数は次第に減少したが、脳腫瘍などに対する件数はあまり変化なく、2017年以降は年間230件ほどで推移した。一方、整外では手術件数は右肩上がりで、病院全体では手術数増加が続き、麻酔科の麻酔管理料を算定する症例は2000年389件だったものが、その後10年で1000件以上となり常勤医３名（辻、安川、河原）で対応に追われた。

2007年　循内に常勤医が入職し、翌年１名加わり、主に心エコーや冠動脈CTが行われさらに2010年に岩崎が入職し、2013年から心臓カテーテルが始まった。

2011年　神内は常勤医５名体制となり、年間退院数1333名で特に脳卒中患者は2006年から600名以上が続いた。脳外の症例も含め、県南東部医療圏で脳卒中患者は最多の状態が続いた。2013年に北山が加わり６名となった。

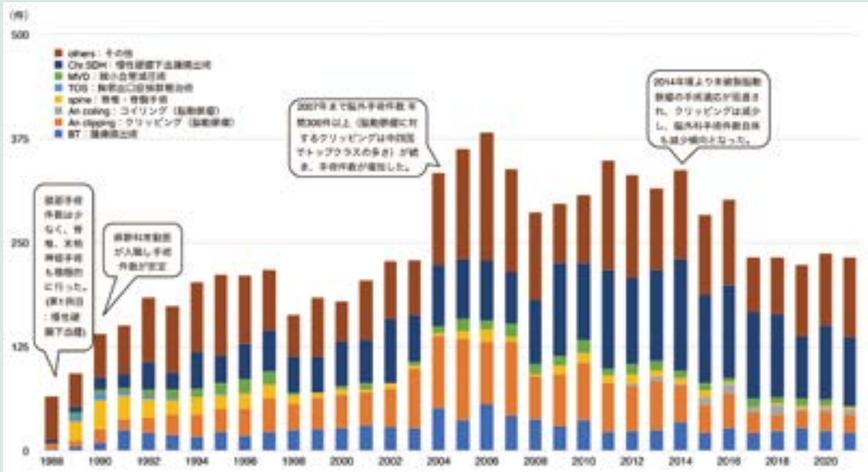
2012年　救急科に常勤医が入り、14年には救急救命士が加わったが残念なことに救急救命士は定着しなかった。

2016～17年にかけて脳外、内科、循内の医師８名の退職があり、特に2019年の受け持ち患者数の多かった神内医師の退職は一時的に外来患者数の激減を招いた。このような中でも2012年から土井英を含め３名の入職のあった整外は総勢６名となり、横山の膝関節手術など各医師の得意分野が異なっており、その後の手術件数は非常な勢いで増加し、2020年には2000件に達し、2021年には骨折治療の実績調査で主な手術数は県下でトップとなった（読売新聞　調査）。

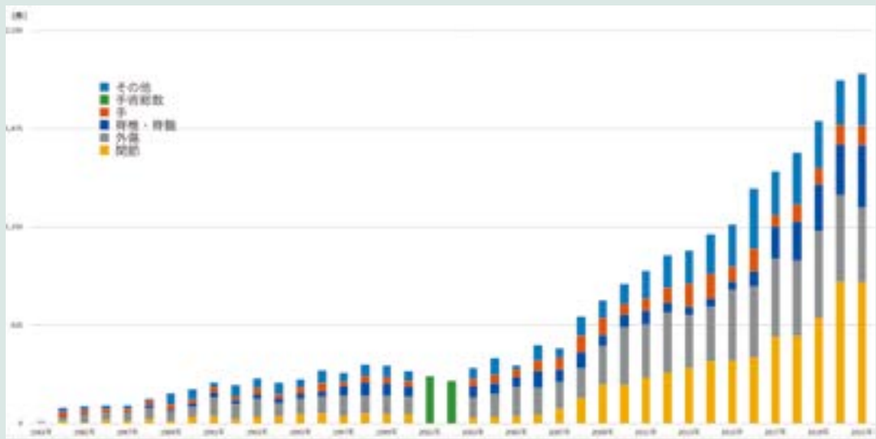
2020年　コロナ感染症が拡大する中、吉岡院長、土井英副院長新体制が始まった。当初、当院は脳・神経・運動器疾患の総合的専門病院に特化する方針で、コロナ治療のため総合病院で受け入れが困難になった救急患者の治療に専念したが、感染拡大が激しくなった2021年５月にはコロナ病床８床をもうけ、宇賀を中心に中等症までの治療を開始した。

2021年　整形外科では時岡が加わり、脊椎外科がさらに充実し救急車の受け入れが初めて2000台／年を超えた。また、特発性振戦に対するMRIガイド下集束超音波治療（FUS）が岡山大学、倉敷平成病院の協力により、中四国で初めて開始され、良好な手術成績を得られている。2018年から不在だった循環器内科の常勤医として吉岡亮が入職し、心カテ、血管内治療、ペースメーカーの留置や、2022年には運動器カテーテルの新たな治療がはじめられた。

（岡山旭東病院院長）



手術件数・脳神経外科



手術件数・整形外科

※2001年・2002年のデータは、電子保存に移行期間だった為、詳細な分類データなし。総数のみ記載。
※出典：年報

医療機関向けパンフレット

医療機関向けパンフレット表紙

医療機関向けパンフレット作成

2023年（令和５）１月に、岡山リハビリテーション病院のリハビリ医療に特化したパンフレットを作成し、連携医療機関に向けて約340部発送した。一般向けではなく、医療機関に向けた内容とすることで、岡山リハビリテーション病院のリハビリ医療について一層の理解を図った。

操風会創立70周年記念式典の開催

2023年（令和５）９月30日、操風会創立70周年記念式典・祝賀会を開催した。

来賓122名、財団職員80名の総勢202名が参加した。

式典は、操風会理事長である土井基之の開式の辞から始まり、岡山大学・那須保友学長、岡山県病院協会・難波義夫会長、黒住教・黒住宗道教主から、心温まる祝辞をいただいた。その後、「操風会のあゆみ」の動画の上映で、操風会の歴史と成就について紹介し、チェロ奏者の三船文彰氏とピアノ奏者の荒木渉氏によるチェロ・ピアノ演奏が、会場に感動を呼び起こしてくれた。式典は土井章弘常務理事による閉式の辞で締めくくった。

祝賀会は、岡山旭東病院吉岡純二院長の開宴の挨拶にはじまり、岡山市医師会平田洋会長（あけぼのクリニック院長）から祝福の言葉と乾杯のご発声をいただいた。祝賀会では、多くの方々が席を立ち、懇親を深めることができた。会の終盤には、岡山東旭病院土井英之副院長、岡山リハビリテーション病院鼠尾晋太郎副院長がそれぞれ施設について紹介し、岡山リハビリテーション病院十河みどり院長の閉宴の挨拶で締めくくった。操風会創立70周年を祝福するにふさわしい、心温まる瞬間を共有することができた。

これから操風会は設立100周年へ向け、更なる発展を目指していきたい。

創立70周年記念式典

創立70周年記念式典

創立70周年記念式典

操風会70周年記念誌
発刊に寄せて

岡山旭東病院 院長
吉岡 純二

今年（2023年）は操風会が創立されて70年、旭東整形外科の創立から40年、岡山旭東病院になり35年が経った記念すべき年に当たります。ここまで来られたのも周辺の病院、医院や診療所の医療関係の皆様や、地域の人々の支えによるものと、深く感謝しております。私自身、この記念すべき年を操風会の一員として迎えられたことを大変嬉しく思います。

私は1988年に岡山旭東病院になってからの参加ですので、操風会全体からすると、その半分の期間を働かせていただいたにすぎません。102床で始まった岡山旭東病院では当初、常勤医は５人で整形外科に加わった脳神経外科の知名度は低く、周辺の病院、医院を院長（現総院長）と挨拶に回り、また眼科や耳鼻科などの研修会でその科と関連のある疾患につき講演させていただき、症例を集めなければなりませんでした。当時、当院のMRIは超伝導型であり、岡山大学病院の伝導型MRIに比べ、性能が優れていたため大学病院をはじめ周りの病院や診療所などから沢山の症例を紹介して頂きました。当院に救急車で搬入された最初のくも膜下出血の症例は、ご家族に手術の話をした途端に他の総合病院への紹介を希望され、転院となり悔しい思いをしたことが思い出されます。しかし、頭部だけでなく脊椎・脊髄手術や末梢神経障害に対する手術を積極的にしていると次第に症例は増え、脳・神経・運動器疾患の総合的専門病院としての知名度が上がってきたように思えます。まさにこの頃が黎明期だったと思います。整形外科の手術件数も急速に増加し、改めてそのグラフを見ると今更ながら驚き、地域にとって必要とされる病院になってきたと思います。私にとって35年はあっという間でした。今の若い職員の方々も30年後のことは想像もできないでしょうが、昔はこんなだったなどと今の職場のことを懐かしく思い出す日がきっと来ると思います。

この70周年記念誌にはほんの一部の人々や出来事しか書かれておりません。しかし、70年間に職員だった多くの人々により支えられて今の操風会があると思います。これらの人々のことを決して忘れず、操風会の仲間と共にお互いが尊重と感謝を持って進んでいって欲しいと思います。

操風会70周年記念に寄せて

岡山リハビリテーション病院 院長
十河 みどり

この度、当財団の設立70周年の記念誌発行の準備に参加させていただいている中で、1953年の財団設立に至る様々なご苦労や熱意を知ることができ、「操風」の由来も知ることができました。その後の様々な制度の変革や疾病状況の変化などを踏まえ、当財団の目指す使命「世のため人のためになることをする財団である」を果たすべく進んできた歴史を知ることができたことで、当財団の役割を引き継いでいく立場に参加させていただいていることに身が引き締まる思いです。老人病院であった東山病院から岡山あさひ病院に改名するとともに鼠尾祥三院長先生の方針でリハビリテーションに力を入れるためにリハビリ部門を強化し、回復期リハビリ病棟も徐々に増床し2006年には91床になりました。そしてリハビリテーション専門病院に特化する決意を示すために2007年「岡山リハビリテーション病院」に病院名を変更し、2011年には129床のすべてが回復期リハビリ病棟の新病院を中区倉田の岡山旭東病院のすぐ近くに開設することができました。病棟はもちろん敷地全体でリハビリを有効に行えるような環境を作り、また１階には通所リハビリと訪問リハビリを担う在宅支援室を設置しました。2019年には公益財団法人操風会となり今まで以上に法人内での連携をより緊密にとるために、電子カルテの統合を行いました。それにより患者情報はもちろんですが、コンサルテーション、院内外の情報共有、勉強会、研修会などのｅラーニングも可能となりました。また2020年から始まったコロナとの攻防の３年間をなんとかわれわれは乗り越えてきましたが、大きな経済的損失を生じました。しかし職員の工夫と献身的努力により患者様の安全安心とリハビリ提供が継続できたことは我々の自信につながり、強い結束力も生まれたように思います。長年の目標であった2015年から途切れていた病院機能評価３rdGの受審を2023年２月に、４月には高度専門機能（回復期リハビリ）を受審しました。今後も我々岡山リハビリテーション病院は質の高いリハビリテーション専門病院を目指して地域と連携をとっていきたいと思います。

第Ⅱ部

未来へのメッセージ

過去・現在・未来をつなげる企画

操風会の未来を語る座談会

全職員の経営戦略シートで「15年後と30年後の財団の姿」について意見をいただいたものをもとに、各施設から15年後、30年後に引き継いでいく方々を選出いただいて、未来の操風会の姿に向けて語り合っていただきました。

【メンバー】
チーム操風　ベストイレブン

岡山旭東病院
土井英之（副院長・整形外科医）
河野冴耶（看護師）
渡邊駿（理学療法士）
田中伶奈（薬剤師）
岡部早紀（企画課）

岡山リハビリテーション病院
鼠尾晋太郎（副院長・循環器内科医）
大島埴生（理学療法士）
林彩香（看護師）
林拓樹（医療ソーシャルワーカー）

岡山ハッピィライフ操風
秋山雄祐（介護福祉士）
荒木一行（介護福祉士）

林拓樹

荒木一行

――職員からの「15年後、30年後の姿」の意見を見て、どう感じましたか。

林（拓）：15年30年後は遠い先ではあるが、長期的な高い志をもつことが大切だと感じた。今後、世の中がどう変わっていくかは読めないが、**トップを目指す財団**として、今の常識に囚われずに他施設と差をつけることで財団をアピールしていくことができるのではと思う。ＩＴなど様々な進化に適応して、視野を広げながら、組織を発展させていく必要があると感じた。

荒木：どの施設からも、「今よりも良くしていきたい、良くなっている」という、前向きな未来志向型意見をもつスタッフが多く、素直に素敵な組織だなと感じた。過去を振り返ることも大切だが、**未来をどうしていきたいかを１人1人が考えることで、組織として発展していけると感じる**し、自分自身も成長していきたいと思った。

岡部：私も15年後、30年後、今より発展させたいという意欲のある意見が多いと感じた。ＩＴの発展やロボットの登場などの意見がある一方で、癒しの環境や温かみのある医療を提供したいとの意見も多く、土井章弘先生からの**理念がスタッフに浸透している**のを感じた。「地域から慕われる病院でいたい」「自分が何かあればお世話になりたい」「今のメンバーで15年後を迎えたい」などの意見も多く、とても温かい組織だという印象を持った。

田中：私自身は、**今を生きている**（目の前のことで精一杯な）ので、将来の姿は想像もできなかったが、各々の職種の人が各々の立場で病院の発展を願っていると感じた。

土井：「今を生きている」という言葉にはドキッとさせられたね。皆の意見からは、「日本一やトップを目指す、地域のNo.1、オンリーワン」などが目を引いたが、確かに癒しの環境や地域に愛されるという意見も多いと感じた。「今を生きる」じゃないけど、30年前の岡山旭東病院は、まだ創業5年目で30年後の現在の姿など想像もできなかっただろうし、おそらく、目の前の患者さんを診ることやその日の病院運営を考えることに精一杯だったのではないだろうか。未来のことを考えるという今回のような企画はとても面白く、皆の意見はとても刺激になった。

鼠尾：30年前は、こんなに世の中が発展しているなんて想像できなかったと思うし、30年後も想像できないが、これから映画の世界のように発展していくであろう世の中に携わっていける子供たちを羨ましくも思う。岡山旭東病院は、先進的に新しいことを取り入れて発展してきたので、岡山リハビリテーション病院も新しいことを柔軟に取り入れていきたいと思っている。

土井：岡リハも先進的にロボットを導入しているし、今後も共に発展させていきたいね。

渡邊：僕がいちばん感じたことは、どの職種の人も「1番になりたい」「No.1を目指している」という意見が多かったこと。**キーワードは「ナンバーワン」**だと思った。

土井：No.1と言えば、MRIの導入や脳ドックの開始など、地域で１番に導入するという気質が当院にはあると思う。最近では、整形外科の手術件数（大腿骨近位部骨折）が県下No.1になっていたし、脳卒中治療も県南東部ではNo.1、ヘルニコアの施術数は西日本No.1、圧迫骨折治療でも全国No.1の治療があるなど、様々な分野で注目される医療機関になって

岡部早紀

田中伶奈

きている。

――あなたにとって、将来の理想的な病院・財団の姿はどんなものですか。

大島：ロボットやＩＴ機器の発展等で、業務量自体は増えていくだろうが、できるだけコンパクトにして皆が幸せに働けるようにしたい。狭い医療だけに囚われず、癒しの環境などを大切にすることも大切だと思っている。岡山ハッピィライフ操風、デイサービスセンター操風の「ハタラク事業」のように、財団として就労支援や雇用の創出などにもつなげていけることが理想だと思う。

秋山：ハタラク事業なども継続させ、発展させていきたいと思っている。将来的には、地域に根づき、地域交流が盛んで、地域に必要とされる施設であり、利用者が安心して生活でき、幸せでいられる最先端の施設であることが理想だと思っている。

渡邊：僕自身は、病院は病気をするなど体が悪くなってから行くところであり、暗く怖いイメージを持っていたが、当院へ就職して温かく和やかな雰囲気を感じている。最終的な理想の病院像は、病気を治すために行く場所という概念がなくなり、地域の人たちが予防や健康を目的として、誰でも気軽に集えるスポットになれば良いと思っている。地域の人たちと日常的に信頼関係を築いていくことで、困った時に頼ってもらえる病院になると思うし、**操風会が地域のシンボル**になっていけば良いなと思う。

河野：実際に患者さんが退院される際に「また当院にお世話になりたい」とよく言っていただいているが、脳卒中患者の再発率は高く、外来などで再発予防のフォローをしていけたらと思っている。地域の人たちが少しでも健康に暮らせるよう、脳卒中や整形疾患など何かあれば頼れる病院として地域を支えていくことが理想だと思う。

――病気を診るのではなく、病気にならないように支えることを理想としている方が多い印象ですね。

土井：整形疾患でも、入院や骨折を繰りかえす人が多くなっており、再発防止の取り組みが今後は大切になるだろうね。

林（彩）：質の高い看護やリハを提供していくことで、患者・家族から**信頼される病院になることが一番**だと思っている。職員にとっても働きやすい環境で、仲良く活気があり、離職率などが低い、働くのが苦にならない職場が理想。

鼠尾：今もそのような職場になっていると信じている。**理想の姿は、フラットな関係性で働くこと**だと思う。医師と看護師など立場によって聞き難い、言い難いことのないフラットな職場にしていきたい。

林（拓）：横の連携を強化する上でも、フラットにしてコミュニケーションを円滑にすることは大切だと思う。

土井：昔は医師が指示するという感じだったが、今は医師も患者を取り巻く環境の一員という認識になってきた。当院は昔から職種のセクショナリズムの低い組織だとは思っている。実際、見学に来た医師から「みんな友達のような関係性ですね」と言われたし、僕自身も当院に赴任した時に他職種との垣根が低いと感じた。

――将来の病院・財団の姿に向けて、どんな課題があると思いますか。

土井英之

鼠尾晋太郎

田中：ＩＴの発展や最先端を目指すなどの話があったが、経済的な問題が課題だと思う。コロナ禍で経営が厳しくなっている。

土井：若手職員が経営のことを心配してくれるのはありがたいね。経理の公開など経営状況を共有し、全員参画の経営を進めてきた章弘先生の方針が根付いていることを感じる。

林（彩）：コロナ禍ではクラスター発生などの対応に追われたため、今後新たなウイルスにも対応できるよう、感染対策や発生時の対応方法などの課題を克服したい。また、新人教育プログラムを充実させ、看護師確保につなげていきたい。

荒木：まずは、コロナ禍の経営難からの脱却が必要だと思う。もうひとつは、新人が入っても続かない現状があるため、離職しない職場づくりが必要だと思う。個々の人間力を高める教育と優秀な人材が離職しない関係作りを行っていきたい。岡山ハッピィライフ操風としては、継続的に満床にする経営基盤の安定が喫緊の課題だと思っている。

渡邊：15年後、30年後、どんなにＩＴやロボットが進化しても、財団の理念でもある「人間味」や「温かみ」がなくならない組織にしていく必要があると思っている。AI診療などが導入されても人と人との関わりが疎遠にならない仕組みにしていきたい。将来的には予防への取り組みも大切になっていくと思っているが、転倒予防の啓蒙だけでなく、脳卒中や糖尿病など多疾患への予防を行っていくことで地域と近い病院になっていくのではないかと思う。

――理想的な病院・財団の姿にするために、どのようにしていけば良いと思いますか。

林（拓）：個々の専門職のスキルや専門性を向上させ、各部門で互いに競争心を持つことで全体が活性化して良い流れになっていくと思う。もちろん競争だけでなく、協同していく風土も大切だと思う。病院としては、他施設と差別化できる特色・強みを持ち、それをしっかり広報していくことが必要だと思っている。

大島：短期的には飲み会の再開を望むが、コミュニケーションを取っていくことは大切だと思う。他施設等と比較するとコミュニケーションの取りやすい組織ではあるが、部署間で連携して課題解決していくことが必要になってきている。部署を横断し、チームとして病院の問題解決をしていくことが求められていくと思う。地域の拠点になりたいとの意見もあったが、回復期リハ病院では、広範囲から患者が集まっており、「地域」の範囲の捉え方などに難しさを感じた。

鼠尾：有り難いことに岡山リハビリテーション病院には県外からも患者さんが来てくれている。だた、この先ずっと回復期リハビリだけで生き残っていくのは困難になり、在宅へのシフトが求められていくと思う。在宅診療や早期の在宅復帰などに対応していかなくてはいけないのではないだろうか。予防も大切で、岡山旭東病院は早期から健診にも力を入れており、先進的だと思っている。

――15年後、30年後、自分自身はどのようになっていたいと思いますか。

土井：病院にいたいな。どのような働き方になっているか想像はつかないが、**ずっと財団には関わって**

渡邊駿

大島埴生

いたい。自分自身の30年後となると想像つきにくいな。

荒木：定年が70歳になっていないと退職しているだろうが、医療や介護の知識を深め、人間力や人としての温かさを備えて、後身の育成に精一杯努めたいと思う。個人的には、自分の子供に「**素敵な組織で働けて幸せだった**」と誇れるようになっていたい。ハッピィライフ操風でも笑顔を忘れず、施設の発展に貢献していきたい。

秋山：医療・介護の分野で働き続けていたい。後輩たちの相談にのってあげられて、財団を引っ張っていける存在になっていたいと思う。

大島：30年後まで理学療法士は継続できないだろうから、違う役割を担いながら、老害にならない存在でいたい。

林（拓）：社会福祉士はAIやロボットには代われない職種だと認識されているので、経験を積み様々な相談に対応できる懐の深さを備えていきたい。変化の激しい社会課題に順応していきながら、後世の育成ができる存在でいたい。

林（彩）：定年近い年になっているだろうが、新システムの導入など新しいことを取り入れる際でも抵抗感なく柔軟に受け入れられる存在になっていたい。また、後輩たちから頼られる存在になっていたいと思う。

岡部：事務職員として、業務の効率化や研修企画などで専門職を支えられる存在になっていたい。また、操風会が大切にしてきた風土や現理事長・総院長の思いなどを継承していける職員でいたい。

渡邊：僕は30年後もバリバリ臨床をしているつもりでいるが、若い人たちの教育にも携わりながら、リハビリテーション課や診療技術部全体のこと、病院経営のことなども考えられる人材になっていたい。また、院外でも養成校の講師など育成に関わる存在にもなっていたい。

田中：薬の知識や管理だけでなく、しっかりと患者と関わり、病体把握をして薬剤選択の助けになれるような薬剤師になっていたい。世間が持っている薬剤師のイメージも変えていきたい。年を重ねていっても、**学びを止めない**でいたい。

河野：15年後の目標として、脳卒中だけでなく、整形や循環器など当院に関連するすべての領域に対応できる看護師になれるよう勉強していきたい。また、リーダー看護師として、後輩指導や後輩のお手本になるような存在になっていきたい。

鼠尾：まずは、30年後も生きていたい。そして、新しいことに対して拒否することなく、若い人たちと同じ土俵に立ってチャレンジしていける存在でいたい。30年後の理想としては、岡山リハビリテーション病院と岡山旭東病院、岡山ハッピィライフ操風が同じ敷地に併設されて、**『操風会ビレッジ』になっていたらいいな**と思う。15年後の夢としては、リハビリをパッケージとして、東南アジアなどリハビリがまだ浸透していない国に提供していきたいし、できるポテンシャルはあると思っている。

――操風会ビレッジなど夢の広がる意見もあり、「今を生きる」「ナンバーワン」「学びを止めない」などのキーワードも沢山でてきて充実した座談会になったと思います。今日の座談会に参加した感想は？

河野：メンバーに選出された時は恐縮していたが、操風会のことを考えて書かれた皆の意見を読み、今日の会に参加して、皆さんと意見を交わしていく中で、今後もより頑張っていこうという思いにつなげられた。

秋山雄祐

河野冴耶

田中：いろんな職種や他の施設の方から自分では考えつかないような意見が聞けて、とても良い刺激になった。

渡邊：15年後、30年後のことを考えるということは、このような機会がないとできないことなので、今回声をかけていただき、参加ができたことがとても良い経験となった。この機会を活かして30年後も岡山旭東病院で頑張っていたいと思った。

岡部：今回の参加はとても良い経験になった。30年も先の未来のことを考え、話し合うということは今回のような機会でないと経験のできなかったことだと思う。私も30年後まで岡山旭東病院で頑張ろうと思う。

林（彩）：15年後、30年後は想像もできない世界だが、これまでの30年は一瞬だったので、15年後、30年後も一瞬で来るのかもしれない。今日の話が実現しているのか、これから30年後に期待していきたい。

林（拓）：今回のような機会がないと、考えることもなかったようなことを考える良い機会になった。先のことを考える中で、一職員としての意見をしっかり持つことの大切さを感じ、他職種や経営者の方の意見を聞けたことがとても参考になった。

大島：最初は15年後、30年後のことなど何も思い浮かばなかったが、皆の意見を見る中でいろいろと考えさせられた。今回、土井英之先生から岡山旭東病院が１番になったことなど教えてもらい、まだ互いに知らないことも多いのではないかと思った。未来のことを共に考えることも大切だが、各施設の特色などをもっと互いに知って交流していけたらよいと思った。

秋山：いろいろな方の多様な視点からの意見が聞けてよかった。自分自身のモチベーションアップになった。

荒木：はじめはなぜ自分が選出されたのかと思っていたが、皆の意見を見たり、話を聞いたりする中で自分自身が主体的になる必要があると気づかされ、皆を引っ張っていける存在になっていきたいと思った。岡山ハッピィライフ操風は距離的にも倉田から離れており、情報共有やコミュニケーションの難しさを感じることもあるが、「操風会ビレッジ」の実現は、高いモチベーションにつながると思うので、その夢に向けて、岡山ハッピィライフ操風を盛り上げていきたい。

鼠尾：先々代の土井健男先生の時代、幼少期の自分は東山病院に預けられて過ごしていたが、当時は事務職員も5人程の老人病院だった。今こんなに発展し、財団で800人以上の職員が働き、30年後のことを語り合うスタッフがいるなんて夢にも思わなかった。理事長・総院長が築き上げてきたことの大きさを実感し、今後の30年を同じように発展させる自信はないが、少しでも近づけられるよう努めたいと思った。

土井：40年前の自分の子供時代と比較するとすごい発展を遂げたと実感するが、それでも70年からすると半数程であり、時の流れを感じる。今日、若い世代の人が集まり、30年後の病院の姿だけでなく、地域・社会のことにも目を向けて語り合っており、とても素晴らしいことだと思った。

結核病院だった東山病院は結核患者の減少を受け、

林彩香

考え抜いた末に老人病院の道を選び、生き延びてきた。その後、社会的入院への規制が強まっていく中で岡山旭東病院が誕生し、理事長・総院長が専門病院を特化させる道を切り開き発展させてきた。これから30年後まで、脳・神経・運動器の専門病院を継続させることはできないかもしれないが、時代の流れや社会のニーズに合わせて変化させながら、財団が存続していく道を選択できる組織にしなくてはいけないと思っている。

日本が将来も平和であるという大前提のために、社会の一員としてどのような世の中を目指すのかも考える必要がある。高齢化、独居、老老介護など社会的問題が増加していく中で、病院は医療の提供だけでは成り立たない時代になっていく。「操風会ビレッジ」で表現されたように、地域の一部として財団が存在し、食事や介護など生活のハブの役割を担い、地域を包括的に支え、自然と皆が集まってくる「マグネットホスピタル」のような存在を目指していきたいと思った。

今回の企画を通して、職員みんなから病院や操風会への愛を感じることができた。これまで受け継いできた『操風会らしさ』を大切に受け継ぎながら、みんなが幸せでいられる組織を目指していきたい。

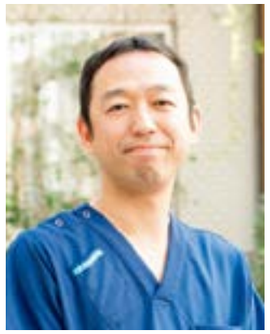
夢の操風会ビレッジ

「30年後の理想として、岡山リハビリテーション病院と岡山旭東病院、岡山ハッピィライフ操風が同じ敷地に併設されて、『操風会ビレッジ』になっていたらいいなと思う」という表現をもとに作成されたイラスト。

岡山旭東病院地域連携室の小野実鈴さんと生成AI「Adobe Firefly」コラボレーション作品。

操風会　未来へ

岡山旭東病院 副院長
土井 英之



操風会。70周年記念の重みを感じる。

終戦間も無く、荒野となった岡山市で新たに財団法人操風会を設立した祖父、土井健男。

祖父は、日本の勝利を信じ多くの若者が亡くなった太平洋戦争を平壌で生き延び、妻子と生き別れ、シベリアへ２年抑留されていた。今の岡山ハッピィライフ操風がある場所に祖父の住宅があり、私が医学生であった頃よく泊まりに行ってはその時代の話を聞かされたものだ。「ロシア人は結構人が良くてね。酒を振る舞ってもらったりしたこともあったな。」苦しかったことも多かったであろうシベリア抑留。それでも前を向いて日本に帰ることを考えていたようだった。ようやく日本に帰り家族と再会し、先行きが本当に不透明な敗戦国家日本で新しく病院を立ち上げた時の気概はいかほどのものであっただろう。なんとか自分たち家族のために、子孫のために、あるいは日本のために必死で生活していたことだろう。東山病院として結核病院を立ち上げ、その後老人病院を経て、そして今の岡山旭東病院・岡山リハビリテーション病院がある。祖父に引き続き、土井章弘総院長・土井基之理事長・鼠尾祥三氏が病院経営に当たった時代を含め、記念誌を見返すと色んな困難が降り注ぎ、それでも前を向いて病院を経営してきた姿が見えてくる。

時代は昭和から平成を通り過ぎ、今は令和の時代となっている。財団法人操風会は、時代を経るにつれ、多くの魅力を備える存在となった。先端設備を備えた岡山旭東病院、新規リハビリ事業に取り組む岡山リハビリテーション病院、創業の地に立つサ高住・岡山ハッピィライフ操風といったハード面。理念経営・全員参画の経営・共育の精神などの経営的な側面。そして操風会を形成してくれている多くの人財。

今現在、私は岡山旭東病院の副院長としての職務を行っているが、これからも時代の先端の医療を届けたいという思いは変わらず持ち続けていきたい。それが地域の人たちの幸せにつながると信じているからだ。さらに超高齢化を迎える日本の、もっと言うと岡山市の中区の地域から新しい幸せに生きる形を模索してきたい。私が幸せだと今感じることができるのは、それを実現していくために一緒に将来、未来を見据えてくれるスタッフたちに恵まれているからだと思う。それこそ人財であり祖父の時代から総院長・理事長にかけて綿々と受け継がれている魂だと感じる。

私たち世代はこれからの日本を見据えて、新しい社会に適応しつつそれでも先代たちが残してくれている足跡や気概を忘れずに、しっかりとバトンを受け継いでいく必要があるとひしひしと感じている。未来の操風会、きっと未来が広がっていると確信できる。

みんなで力を合わせ、頑張っていこう。

操風会の未来へ向けて

岡山リハビリテーション病院 副院長
鼠尾 晋太郎

40年ほど前、幼少期の頃、私は毎日のように東山病院の事務やナースステーションで走り回って遊び、看護師さんによく怒られていました。その頃の病院が、現在の立派な病院に成長し、自分がそこで働いているという事実に感慨深さを覚えます。

昨今、病院とは独立した存在ではなく、地域と密接に関わり合っていく必要があると謳われています。急性期病院、回復期病院、介護施設などを持ち合わせている財団であるからこそ、地域の中核的存在となって、地域の健康づくりや福祉サービスの提供、災害時の対応など、幅広い役割を果たしていく必要があります。今後も、様々なイベントやサービスなどで、地域住民との連携を強化し、包括的に医療を提供していきたいと思っています。

医療において、医師ではなく患者を中心としたアプローチは、今後もより重要になっていきます。患者のニーズを尊重し、患者の生活における役割や生きがいなどを考慮し、患者や家族を中心としたコミュニケーションを重視していく事で、治療効果の向上も期待できると考えています。

また、リハビリテーション病院としては、患者の状態やニーズに基づいた個別の治療プランを提供することが一層重要になってきます。そのためには、専門的なチームアプローチや最新の技術・設備の導入が必要です。チームアプローチでは、医師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、看護師・介護士、社会福祉士、薬剤師など、複数の専門職が協力して治療に取り組むマルチプロフェッショナルなチーム作りを進める必要があります。リハビリテーションの分野では、バーチャルリアリティやロボットリハビリが急速に進歩しており、訓練士はそれらの技術を使いこなすスキルや、革新的なアプローチを積極的に取り入れることも求められます。

病院のチームスタッフの最大限スキルを活かすには、職員を取り巻く環境づくりも大切です。時代が変わり、長時間勤務で仕事に打ち込む事が良いとされるのではなく、ワークバランスを取り、家族や友人との時間を大切にし、心身ともに健康であることは、良いパフォーマンスが発揮される上でとても大切になります。何か一つでも本気で打ち込める趣味を持ち、ストレス発散やプライベートの充実を図れたら良いと思います。

最後に、変化と挑戦を恐れずに常に前進し、成長し続けることを目指し、財団の未来に向けて共に歩んでいきましょう。

アンケート 職員の心の声　～未来への架け橋～

財団法人操風会70年の歴史に感謝の意を込め、職場環境や未来への期待など、
組織を支え続けてくれた大切な存在である財団職員にアンケートを実施しました。

岡山旭東病院

1. あなたの職場で自慢できることはなんですか？

人間関係良好・団結力	44
働きやすさ・助け合う風土	30
設備・癒しの環境	22
専門性の高い医療を提供している	19

2. あなたの職場で好きな場所はどこですか？

カフェ赤い鼻	22
めだかの学校	22
しだれ桜が見える中庭	14
屋上	10

3. あなたが職員給食でいちばん好きなメニューはなんですか？

カレー	68
チャーハン	9
ハヤシライス	6
うどん	5

カレー

カフェ赤い鼻

岡山リハビリテーション病院

1. あなたの職場で自慢できることはなんですか？

人間関係の良さ（多職種連携、助け合う風土）	13
働きやすい職場環境（休暇の取りやすさ、育休、短時間勤務への配慮）	8
リハビリ機器等の充実	7
患者対応の良さ	7

2. あなたの職場で好きな場所はどこですか？

屋上	23
食堂（窓がたくさんあり広い）	6
中庭・庭	5

3. あなたが職員給食でいちばん好きなメニューはなんですか？

カレーライス（キーマ、夏野菜、カツ）	29
うどん	5
寿司（ちらし寿司、バラ寿司）	4
麺類	4

カレー

屋上

岡山ハッピィライフ操風

1. あなたの職場で自慢できることはなんですか？

施設内の環境が良い（庭園、食事、水槽）	4
専門性が高い（医療対応、介護専門職）	3
職員が協力的・協力し合える風土がある	3
利用者に寄り添ったケアをしている	2
他の施設に比べて、利用者様が優しい方が多い	1
1日過ごしやすい	1

2. あなたの職場で好きな場所はどこですか？

屋上・屋上からの景色	4
玄関前の庭・ベンチ	2
フロア（広く明るい）	2
２階のテラス/4階の食堂から見える景色/デイサービスセンター操風/紅葉の木の下/職員食堂	1

3. あなたが職員給食でいちばん好きなメニューはなんですか？

カレーライス	4
オムライス	1
鶏唐揚げ	1
朝のパン	1
麺類	1

カレー

屋上からの景色

岡山旭東病院

4.職場の周辺でおすすめのスポット（景色やお店など）はどこですか？

スターバックスコーヒー	15
旭川と旭川近辺の景色	15
カフェ赤い鼻	8
洋食喫茶アドロック	5

5.あなたが、未来（30年後）の操風会に残したいものはなんですか？

働きやすい職場環境・風土	35
医療の提供	25
患者さんへの思いやり、対応	17

6.将来、自分の子供や親戚が操風会で働いてる、関わっていると思いますか

思う	30
思わない	124

7.もし、生まれ変わっても操風会で働いていたいと思いますか？

思う	69
思わない	84

岡山リハビリテーション病院

4.職場の周辺でおすすめのスポット（景色やお店など）はどこですか？

アースブレッド（パン屋）	12
病院の窓や屋上見える景色	11
カレー屋（マター）	11

5.あなたが、未来（30年後）の操風会に残したいものはなんですか？

働きやすい職場環境（職員の関係性）	9
患者さんへの思いやり、寄り添う気持ち	6
スタッフの温かさ、優しさ、人情	6
経営理念	4

6.将来、自分の子供や親戚が操風会で働いてる、関わっていると思いますか

思う	6
思わない	71

7.もし、生まれ変わっても操風会で働いていたいと思いますか？

思う	17
思わない	60

岡山ハッピィライフ操風

4.職場の周辺でおすすめのスポット（景色やお店など）はどこですか？

護国神社	3
奥市公園のさくら	2
操山	2
岡山城・後楽園／豊かな自然／東山の「ichi-caf」／電鉄／敷地内の紅葉の木／桜の木／円山に新しく出来ると噂のエブリイ／路面電車／2階	1

5.あなたが、未来（30年後）の操風会に残したいものはなんですか？

充実し、信頼される医療・介護の提供	5
信頼できるスタッフ・情熱	4
働きやすい職場（職員を大切にする風土）	3
利用者様の笑顔	1

6.将来、自分の子供や親戚が操風会で働いてる、関わっていると思いますか

思う	7
思わない	10

7.もし、生まれ変わっても操風会で働いていたいと思いますか？

思う	10
思わない	7

第Ⅲ部

資料編

経営理念

公益財団法人について

この法人は、主に脳・神経・運動器の疾患について、予防、急性期、回復期、在宅復帰するまで全人的医療・介護を提供する活動等を通じて、地域医療体制の向上を図ることを目的とする。

（2019/04/01 岡山県）

＊法人の目標（年次・中長期）を策定し、経営指針書に明示し、目標に向かって実践する。
＊経営理念を共有して本部にて財務・人事・就業規則（労務）・営業広報・経営指針書の作成など、財団としての基本的な活動を統括し推進する。
＊資金運用方針を確立し、設備投資を計画的に実施する。（新病院などの建築計画・高額医療機器の購入等）

院　是

しんせつな態度
ていねいな言葉

亡き土井建男名誉院長（先代院長）より継承されている
東山病院時代の経営理念です。

経営理念

岡山旭東病院・岡山リハビリテーション病院

一、安心して、生命をゆだねられる病院
一、快適な、人間味のある温かい医療と療養環境を備えた病院
一、他の医療機関・福祉施設と共に良い医療を支える病院
一、職員ひとりひとりが幸せで、やりがいのある病院

岡山ハッピィライフ操風

一、安心して、生命をゆだねられる住まい
一、快適な、人間味のある温かい、もてなしのある住まい
一、他の医療機関・福祉施設と共に良い医療・介護を支える住まい
一、職員ひとりひとりが幸せで、やりがいのある職場

理事会

1983.05.26　理事会

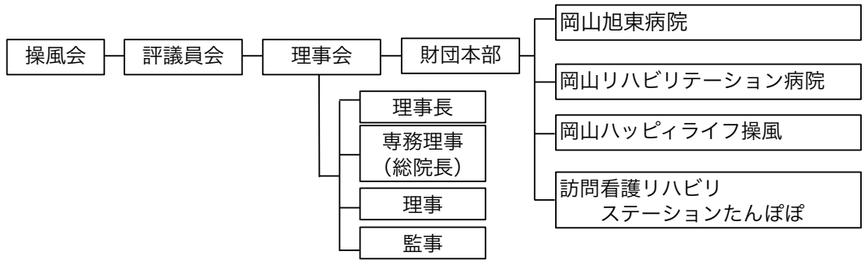
田中早苗理事
土井基之
旭東整形外科院長
村上栄理事
船橋達天監事
高畠正夫名誉理事長
糸島達也理事
土井健男理事長
高畠稔常務理事
小林鋭二理事
土居和夫事務長
川崎祐宣理事
松岡一章監事
奥村修三理事

2023.06.21　理事会

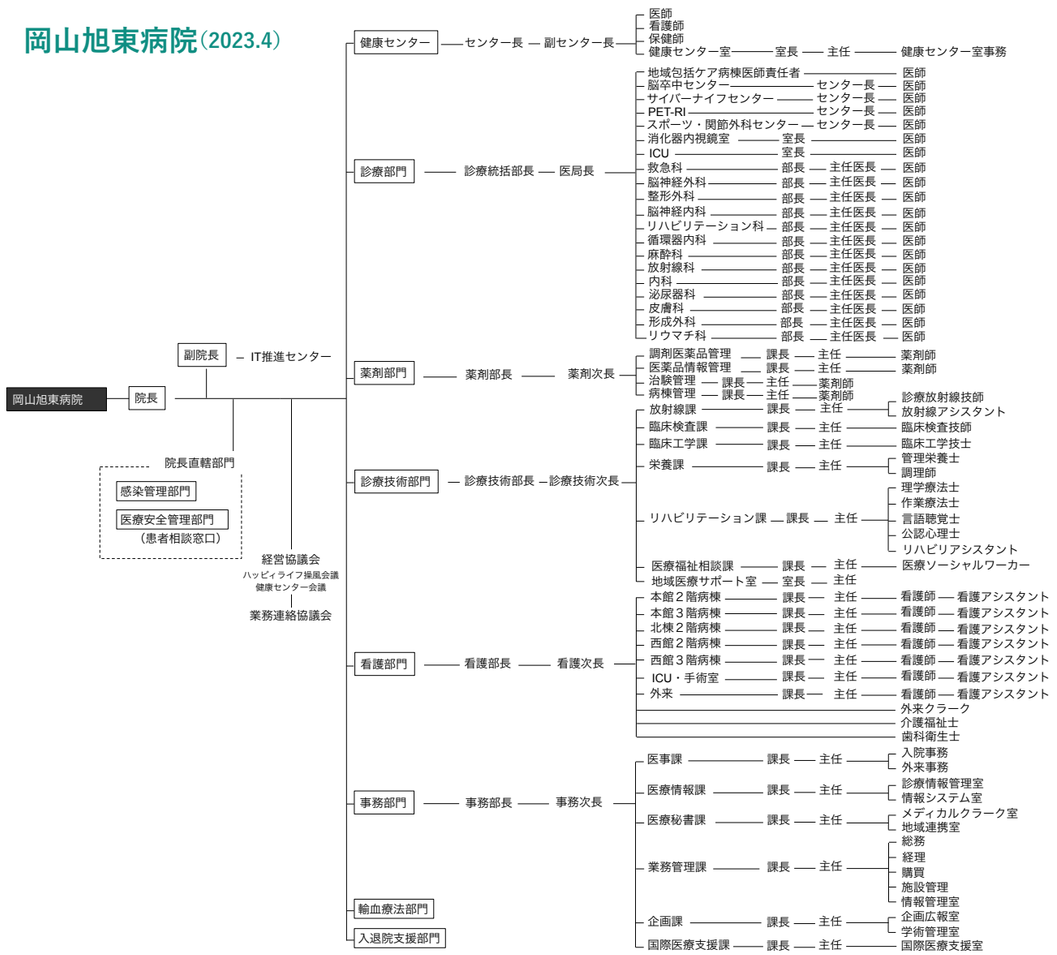
植田明美理事
糸島達也理事
十河みどり理事
岡田茂評議員
菅田照也理事
川本平山評議員
髙見英敏理事
森田潔評議員
吉岡純二理事
土井章弘専務理事
大森文太郎理事
土井基之理事長
秋山進彦評議員
伊達勲評議員
秋山義信監事
末光茂評議員
松尾正男監事
梶谷俊介評議員
松田久評議員

組織図

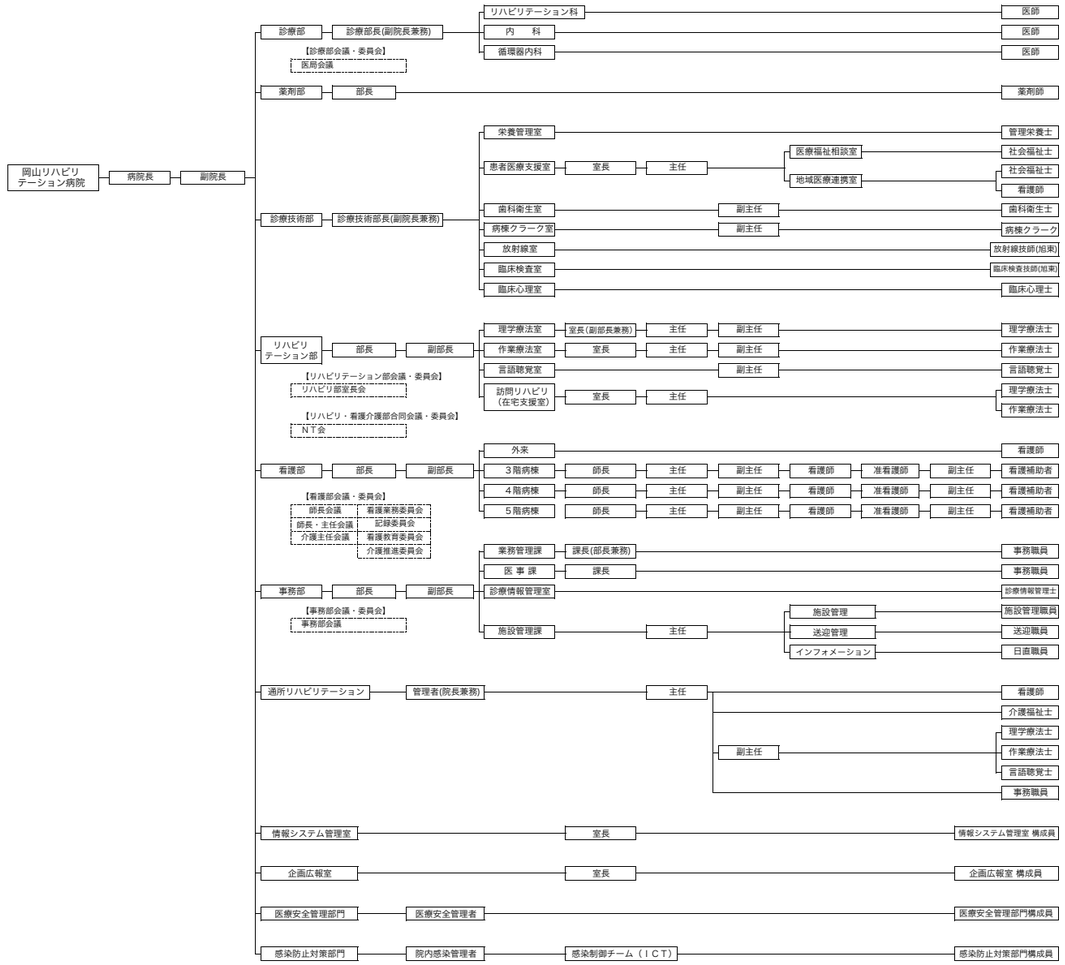
公益財団法人操風会



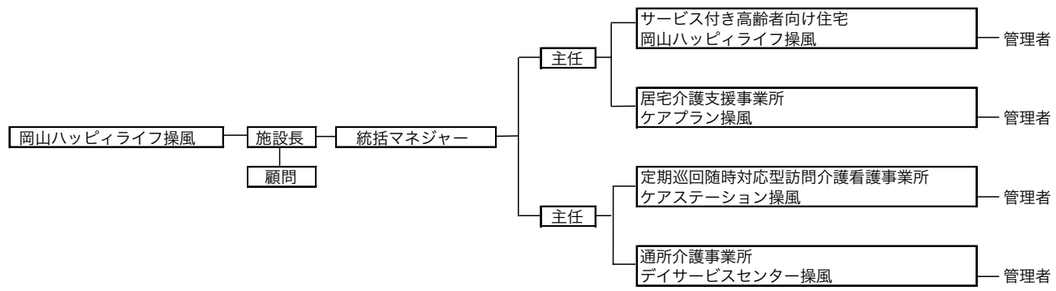
岡山旭東病院（2023.4）



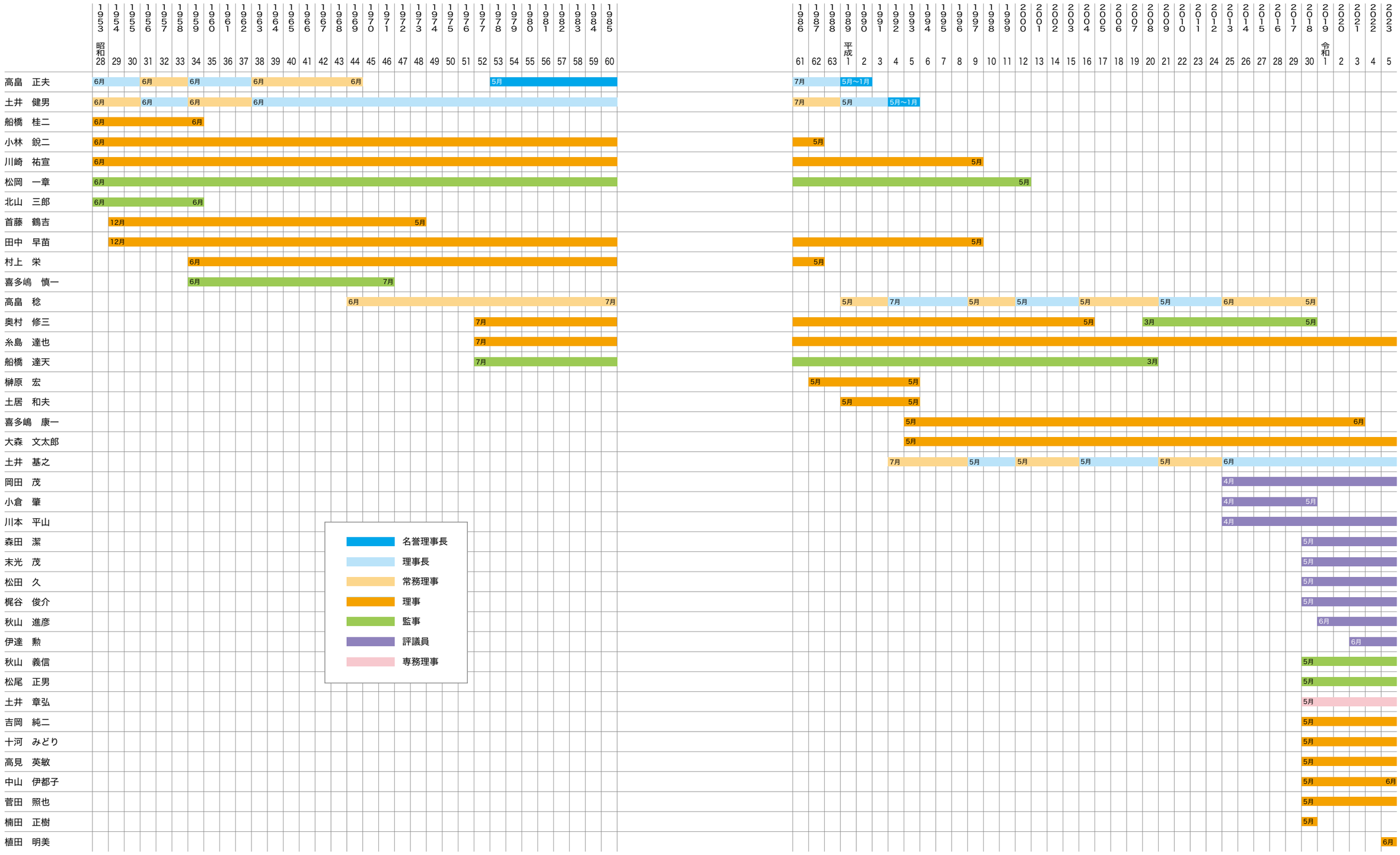
岡山リハビリテーション病院（2023.4）



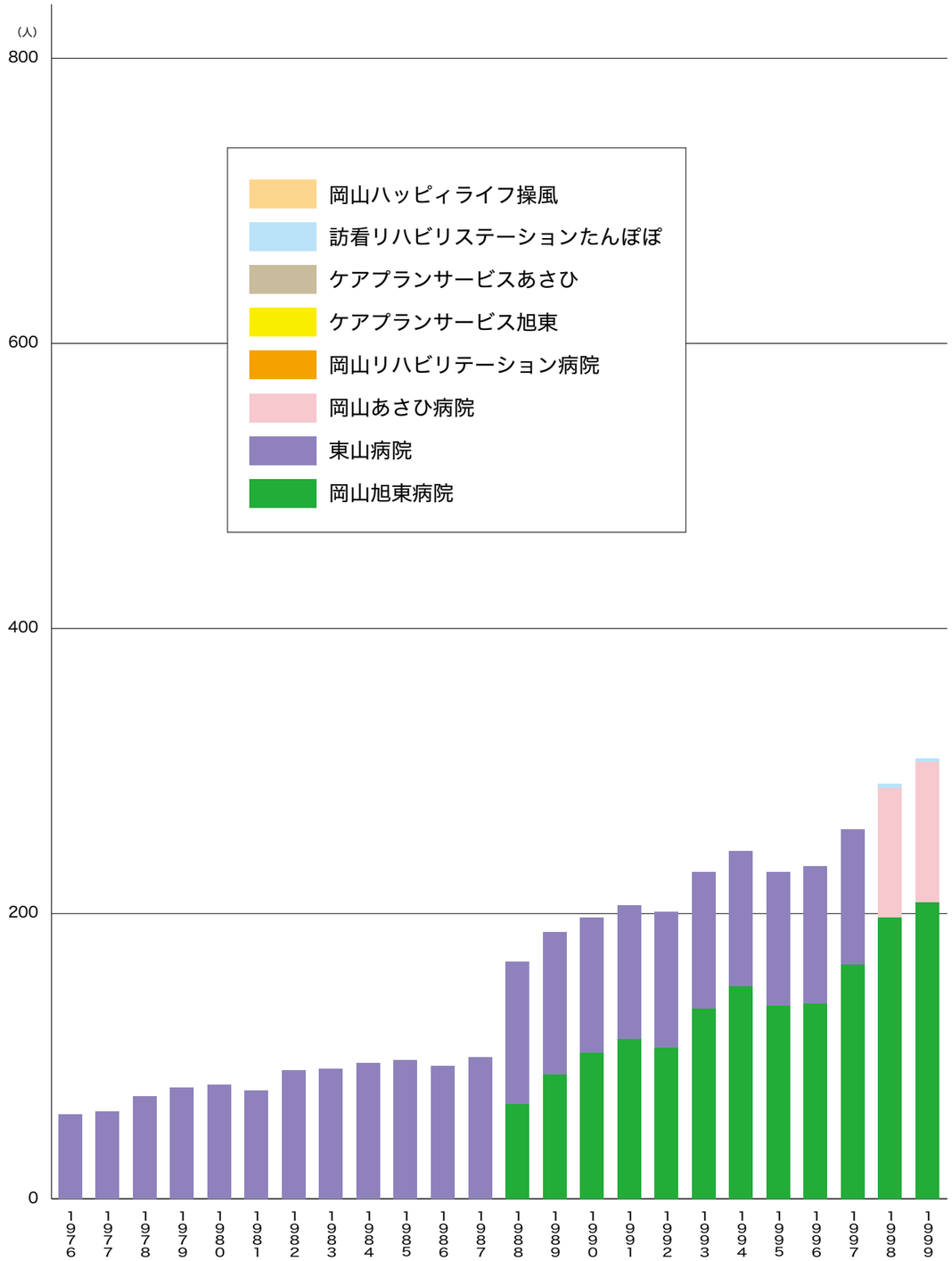
岡山ハッピィライフ操風（2023.4）

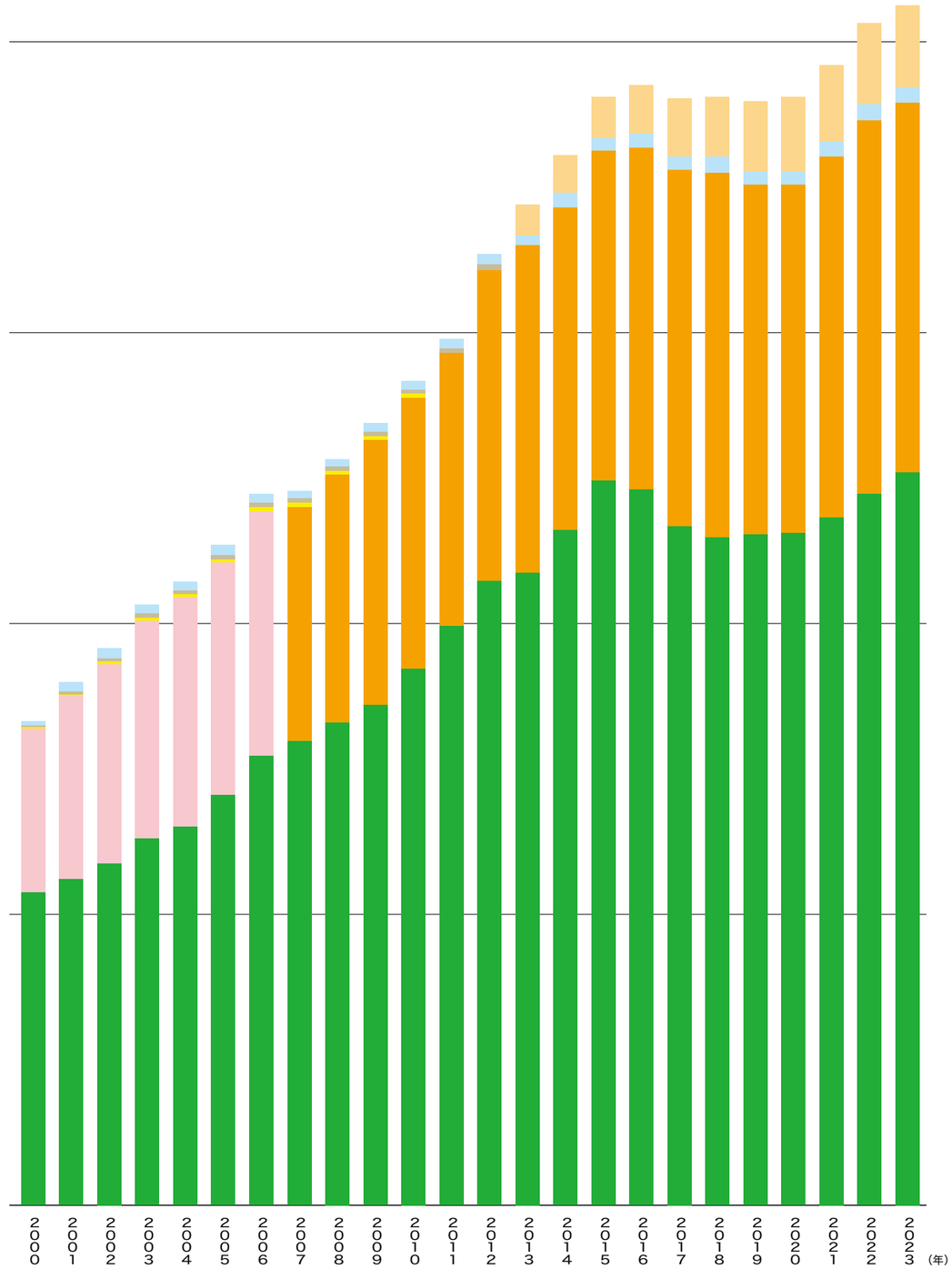


財団法人役員履歴・歴代理事

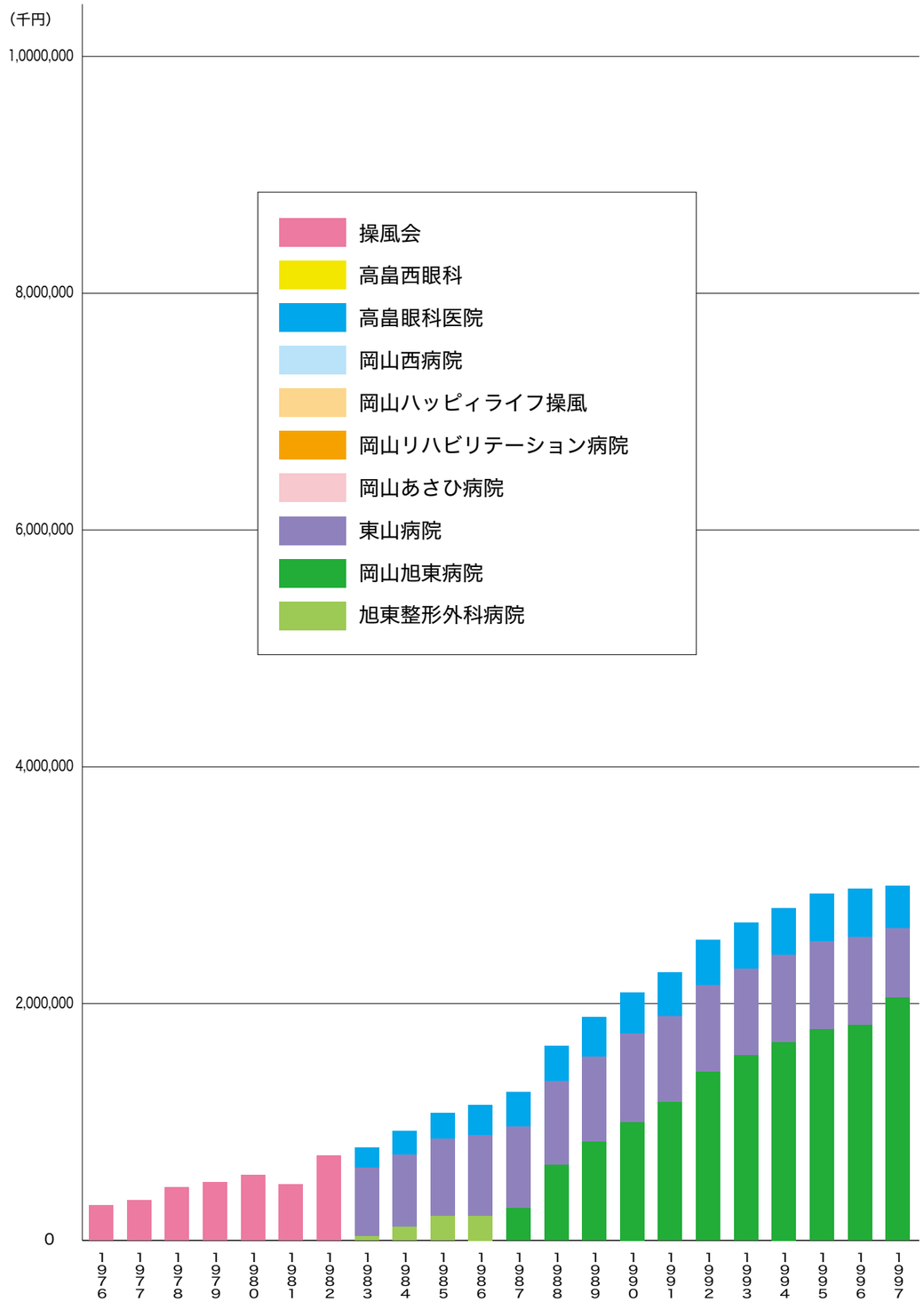


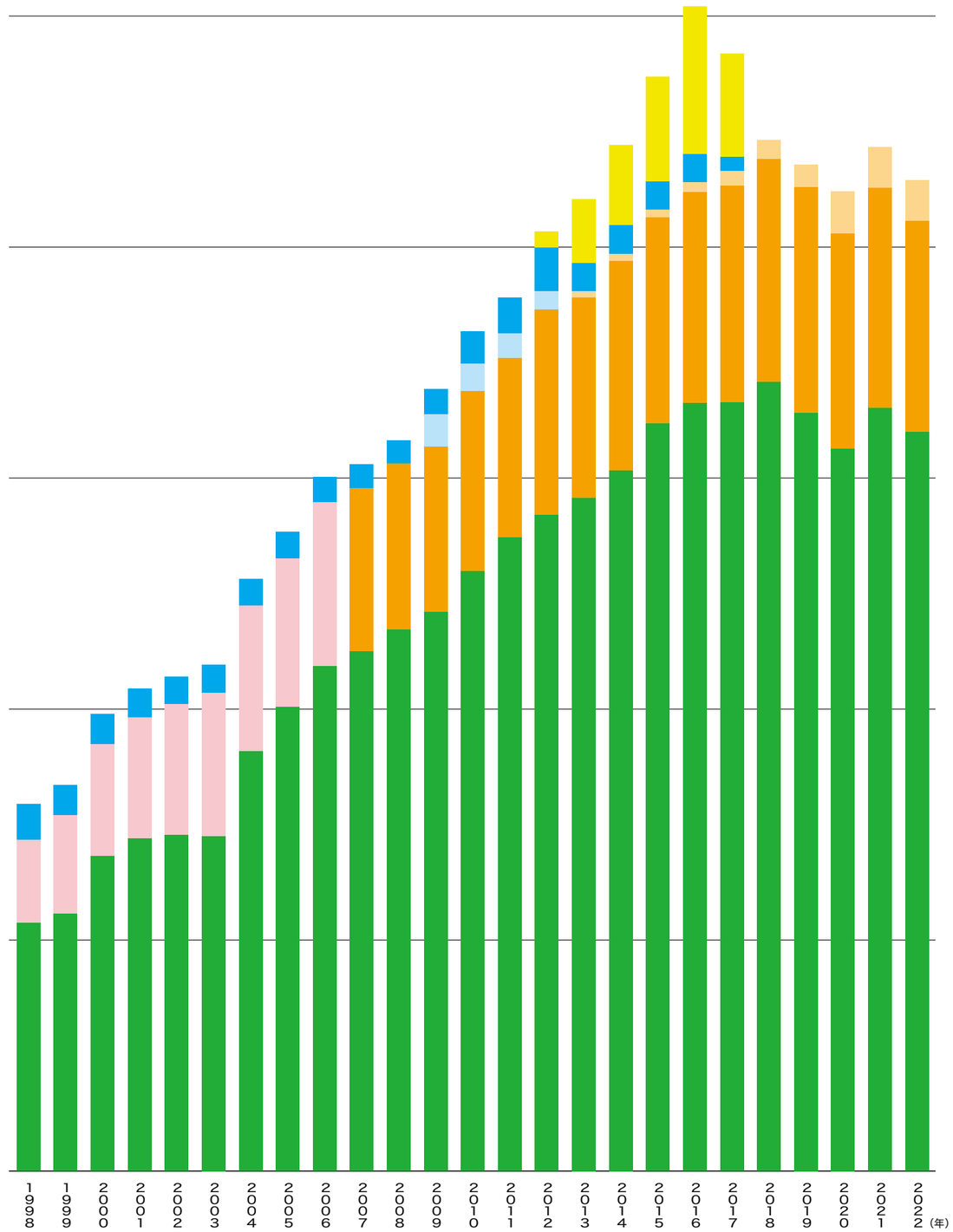
操風会職員数の推移


（人）
800
600
400
200
0
岡山ハッピィライフ操風
訪看リハビリステーションたんぽぽ
ケアプランサービスあさひ
ケアプランサービス旭東
岡山リハビリテーション病院
岡山あさひ病院
東山病院
岡山旭東病院
1976
1977
1978
1979
1980
1981
1982
1983
1984
1985
1986
1987
1988
1989
1990
1991
1992
1993
1994
1995
1996
1997
1998
1999


2000
2001
2002
2003
2004
2005
2006
2007
2008
2009
2010
2011
2012
2013
2014
2015
2016
2017
2018
2019
2020
2021
2022
2023
（年）

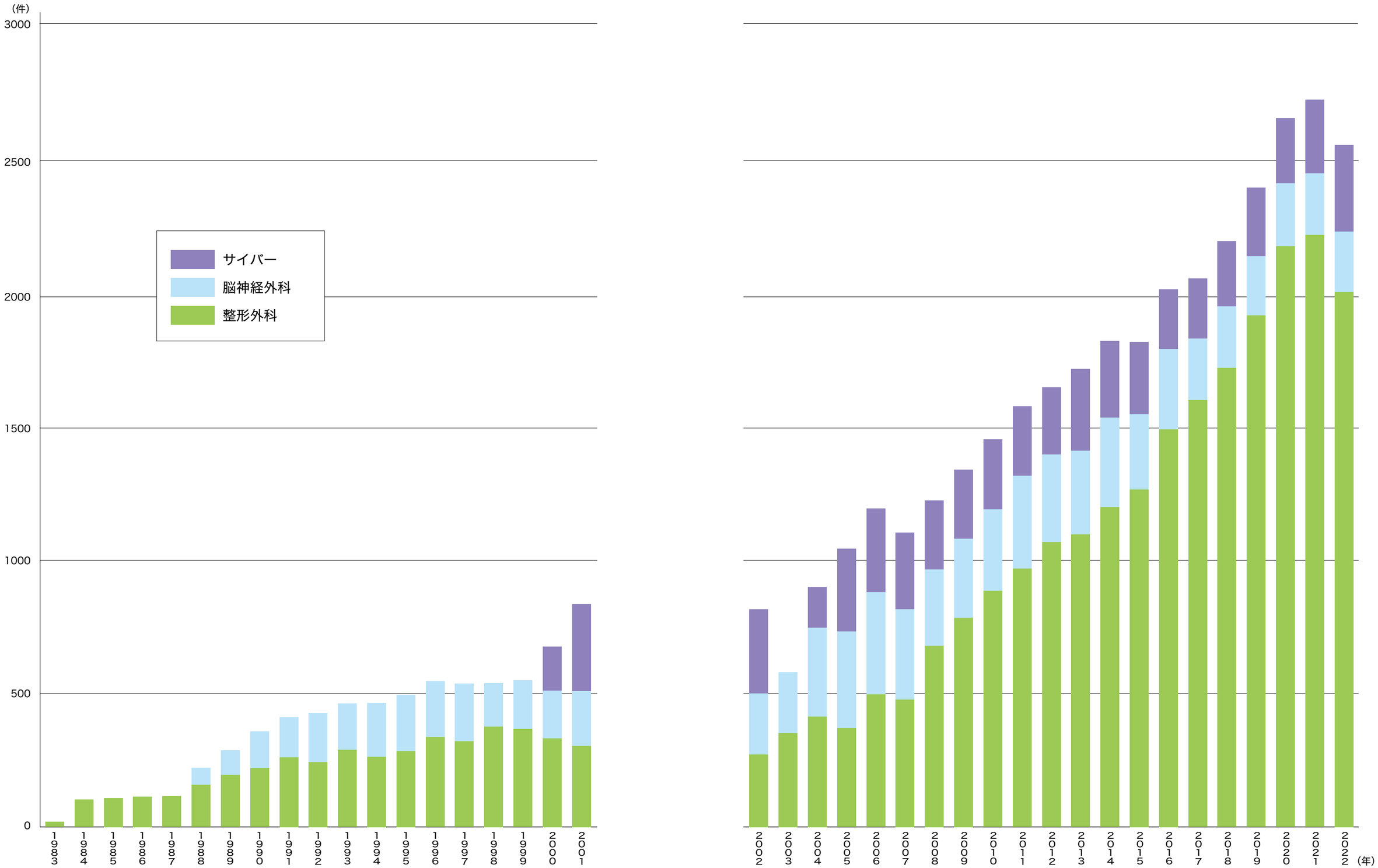
操風会総医業収益の推移



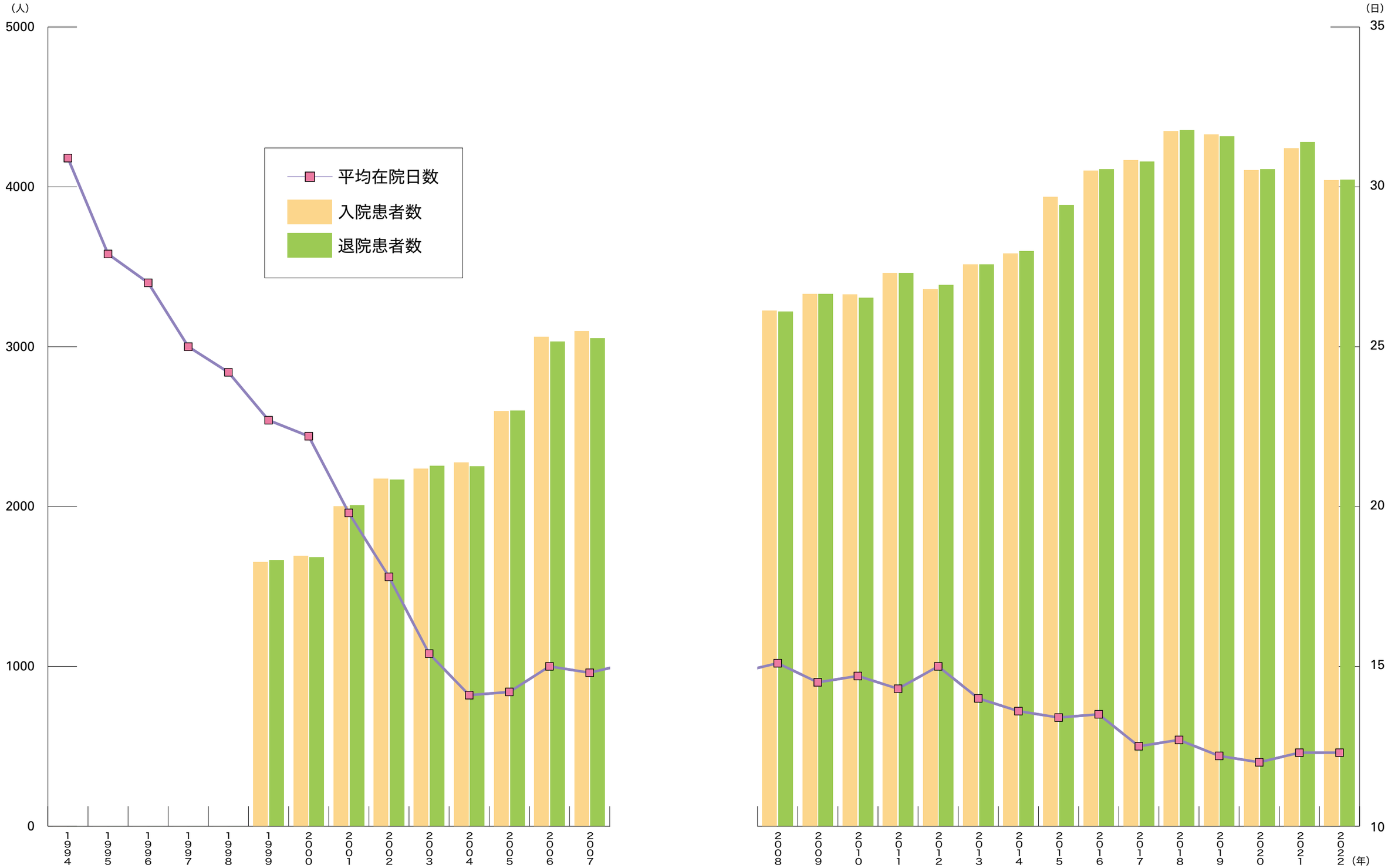


岡山旭東病院手術件数の推移

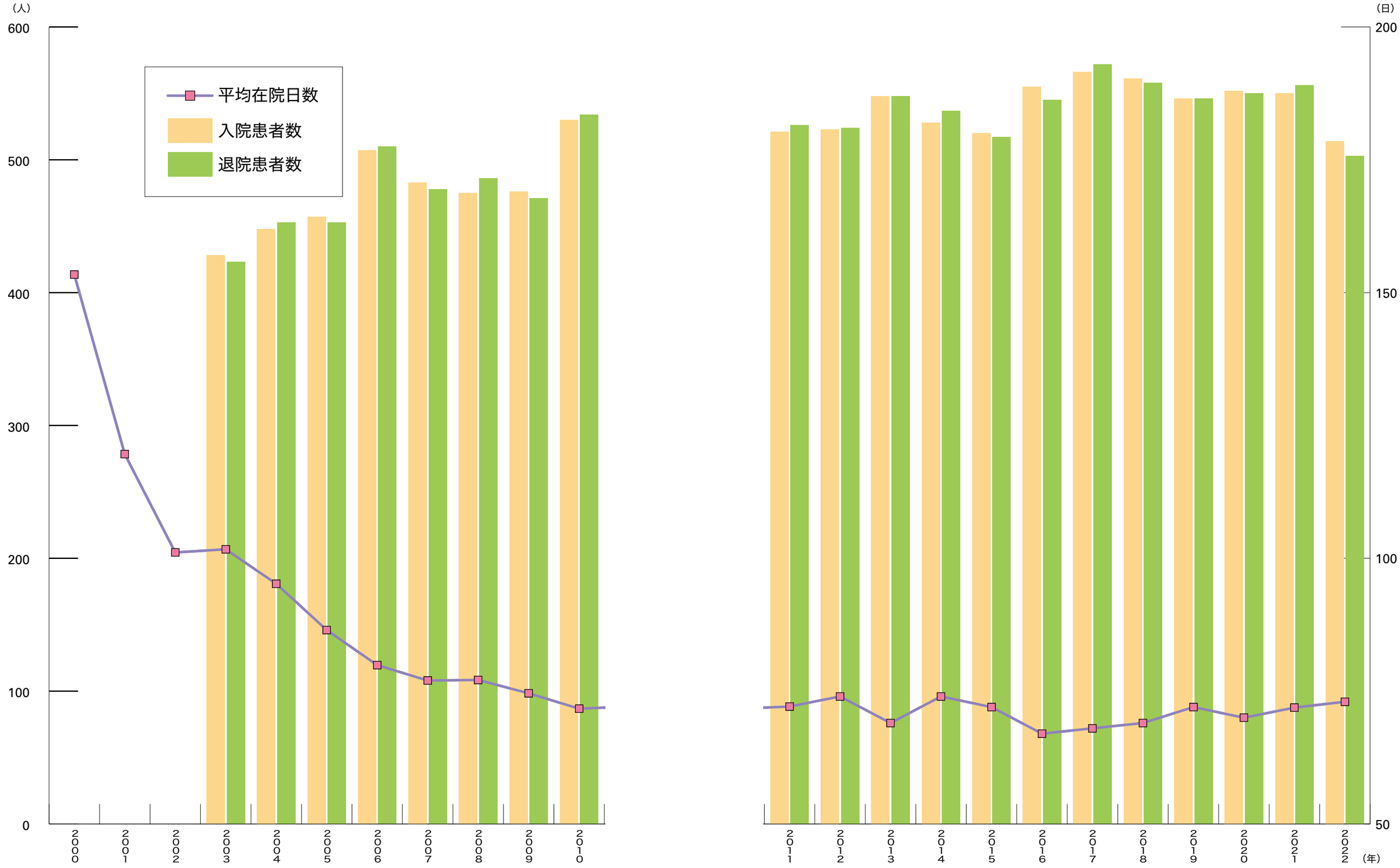
出典：年報（1983～1987、1994～2005）、手術記録（1988～1993）、手術伝票（2006～2022）



岡山旭東病院入退院患者数・平均在院日数の推移

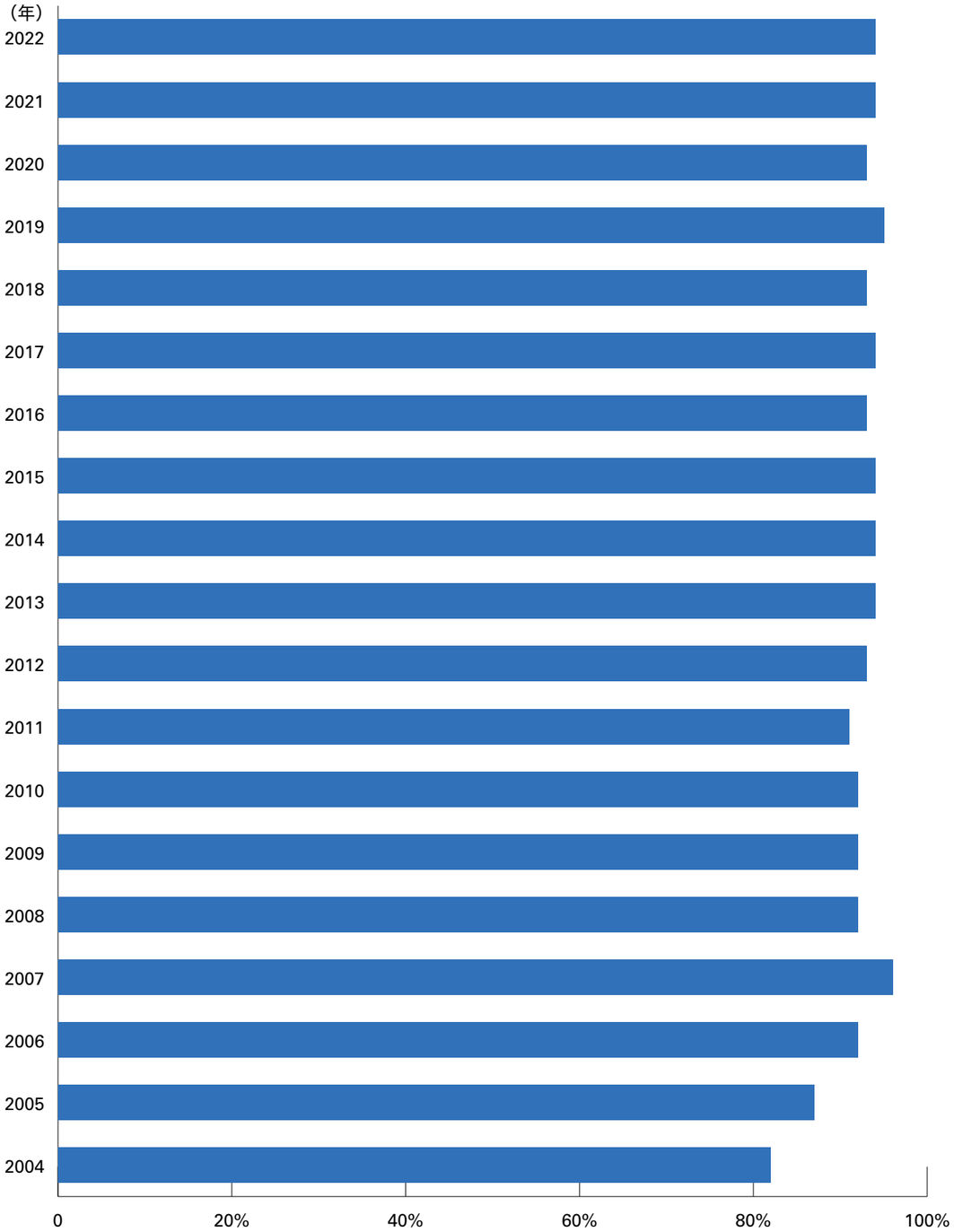


岡山リハビリテーション病院
入退院患者数・平均在院日数の推移

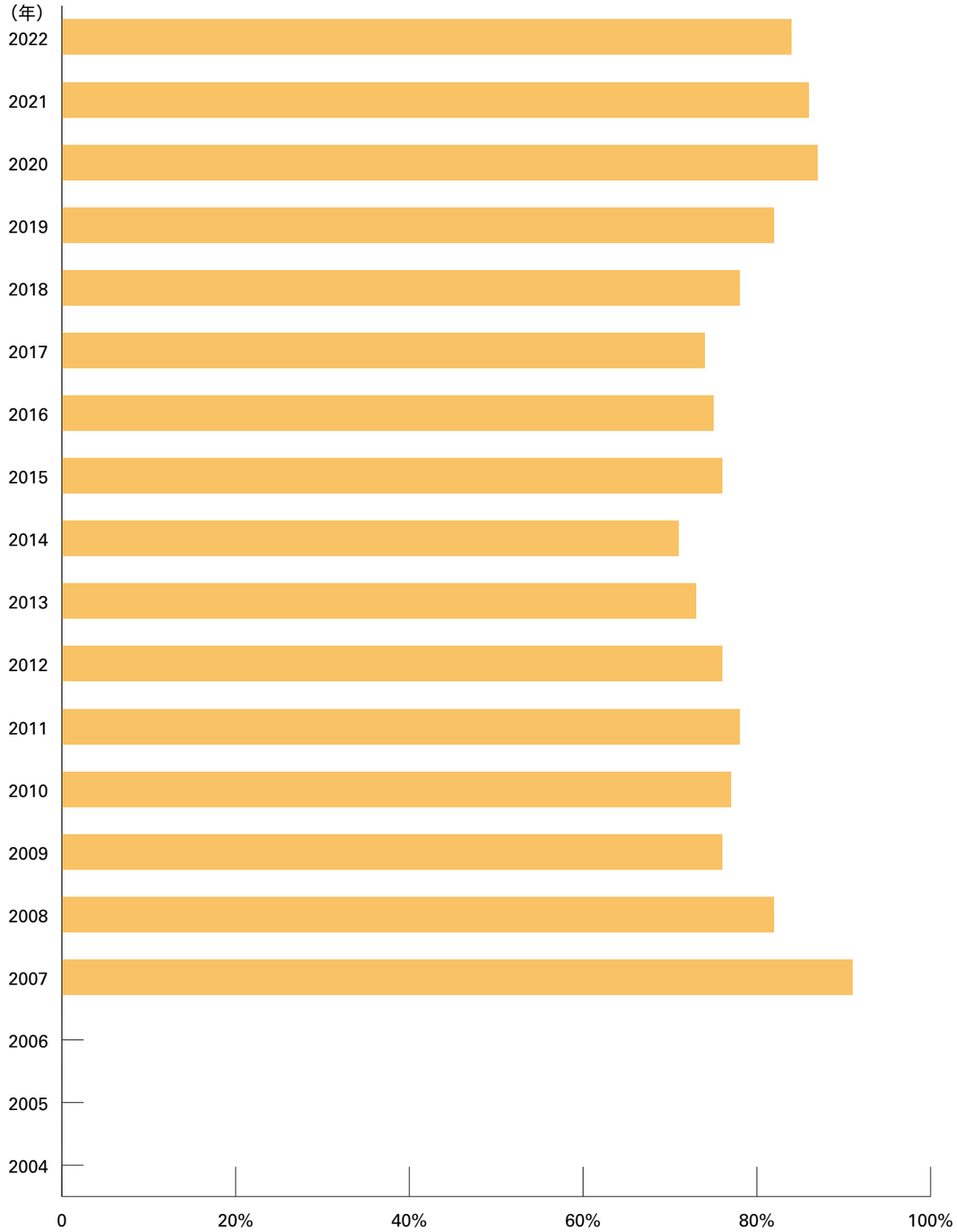


岡山旭東病院患者満足度調査

退院時患者満足度調査（全体評価4以上の%）



外来時患者満足度調査（全体評価4以上の%）



職員やりがい度調査

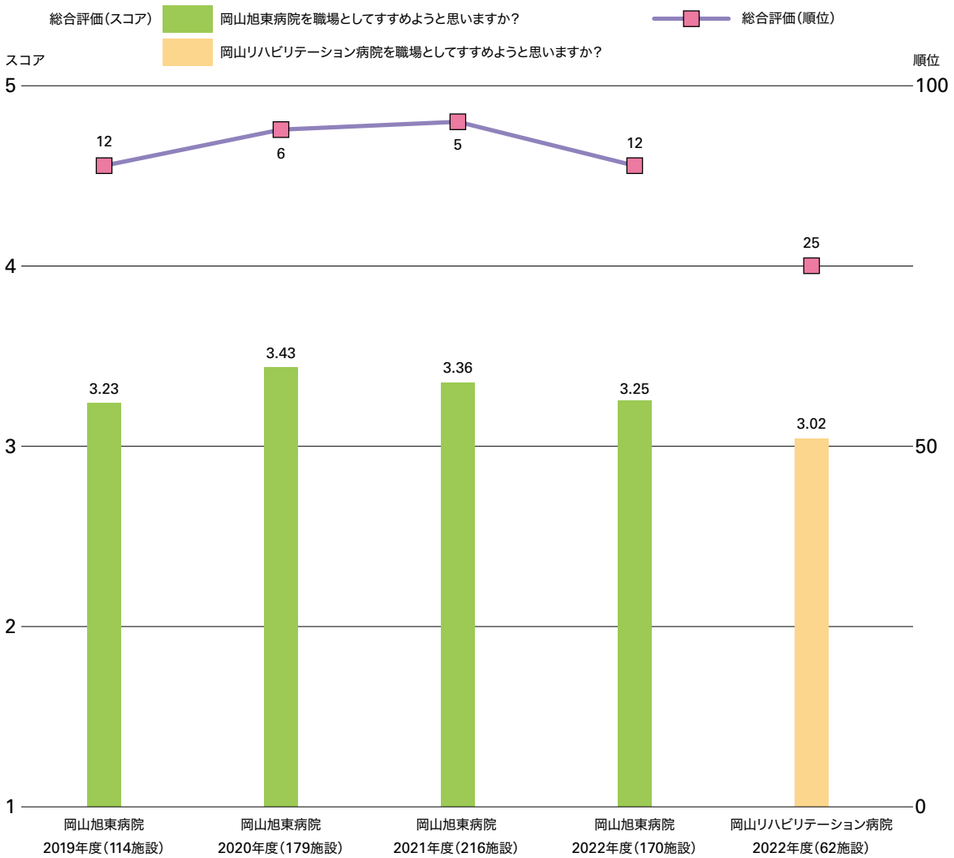
職員やりがい度調査の実施目的と改善活動の体制

岡山旭東病院では2019年度より、岡山リハビリテーション病院は2022年度より、日本病院機能評価機構の「職員やりがい度・患者満足度調査」へ参加している。

日本医療機能評価機構では、医療の質の重要な構成要素である患者満足度および、病院の内部顧客である職員の「やりがい度（満足度）」を測定し、その結果を医療の質向上の取り組みに活用できる環境支援を目的に2018年度より調査が開始された。

2022年度は、病院区分別に300を超える病院が参加し、参加施設から登録されたベンチマークデータで他施設と比較（病院区分別）することにより、自院の位置づけを明らかにし、問題点の把握や改善活動に活用し、医療の質の向上、院内環境の改善に努めている。

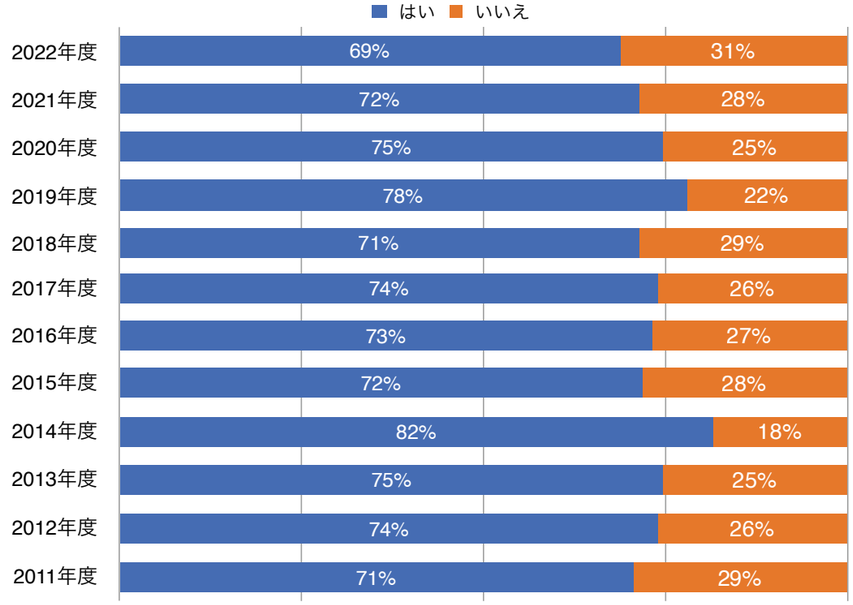
職員やりがい度調査　総合評価　年度比較　（順位／スコア）



岡山旭東病院
Gross Hospital Happiness（病院内総幸福）
～GHHで測る病院職員の豊かさ～

岡山旭東病院では、2011年度より「GHH（病院内総幸福）」調査を実施してきた。経営理念の１つに「職員ひとりひとりが幸せで、やりがいのある病院」を掲げているが、「幸せ」という概念は主観的なもので、数字で簡単に測れるものではない。一方、ブータン王国では、国王がGNH（Gross National Happiness）の言葉を提唱して、GNPでなくGNHを目指すと話題になった。GNHは経済的な豊かさのみを追求するのではなく、国民が幸せを感じることができる環境づくりを目指しているところに特徴があり、当院の理念と共通する。そこで、職員が幸せでやりがいのある病院を実現していく為に、病院としてどのような考えや取り組みが必要かを、GHH（Gross Hospital Happiness）と言い換えて検討した。

岡山旭東病院に就職して、『幸せ』と感じていますか？



年表

●公益財団法人操風会　●岡山旭東病院　●岡山リハビリテーション病院　●岡山ハッピィライフ操風

年	操風会の動き	地域・社会の動き
1935年 （昭和10年）	●11. 高畠眼科医院の開業（岡山市川崎町63番地）	
1936年 （昭和11年）		二・二六事件
1937年 （昭和12年）		日独伊防共協定 第１回文化勲章授与式
1938年 （昭和13年）		国民健康保険法制定
1940年 （昭和15年）		日独伊三国同盟 大日本産業報国会結成
1941年 （昭和16年）		真珠湾攻撃
1945年 （昭和20年）		8/15終戦 国際連合成立
1946年 （昭和21年）		日本国憲法公布、農地改革 生活保護法制定
1947年 （昭和22年）	●12 土井内科医院の開業（岡山市細堀町38番地）	児童福祉法制定、労基法制定、 第一次ベビーブーム 学校給食開始
1948年 （昭和23年）		医療法、医師法、予防接種法 など制定 世界人権宣言
1949年 （昭和24年）		身体障碍者福祉法制定
1950年 （昭和25年）		京都駅が全焼 朝鮮戦争開戦
1951年 （昭和26年）		結核予防法制定、食料配給公 団解散 サンフランシスコ平和条約、 日米安全保障条約
1952年 （昭和27年）		硬貨式公衆電話機登場
1953年 （昭和28年）	●6【財団法人操風会】の設立（高畠眼科（21床）、東山病院（54床）） ●6.15 財団法人操風会「東山病院」（54床）設立	奄美群島が日本に復帰
1954年 （昭和29年）		防衛庁、自衛隊発足
1955年 （昭和30年）	●12. 岡山市三浜町474番地に眼科三浜分院を開設	
1956年 （昭和31年）	●4. 高畠眼科診療棟を建築（鉄筋コンクリート2階建延面積40坪） ●東山病院増築（136床増床）と結核病院へ機能転換	科学技術庁発足 国際連合に加盟、日ソ共同宣 言
1958年 （昭和33年）		国民健康保険法施行 関門トンネル開通
1959年 （昭和34年）		国民年金法制定
1960年 （昭和35年）		国民所得倍増計画閣議決定
1961年 （昭和36年）		国民皆保険制度確立 児童扶養手当法制定
1963年 （昭和38年）		老人福祉法制定 ケネディ暗殺
1964年 （昭和39年）		母子福祉法制定 海外渡航自由化 東海道新幹線開通 東京オリンピック開催
1965年 （昭和40年）		日韓基本条約調印
1966年 （昭和41年）		国民皆保険制度改正（7割給 付）
1967年 （昭和42年）		公害対策基本法制定
1968年 （昭和43年）		国民健康保険３割負担 郵便番号制スタート 大学紛争激化
1969年 （昭和44年）		アポロ11号月面着陸
1970年 （昭和45年）		心身障碍者対策基本法制定、 大阪万博開催
1971年 （昭和46年）		環境庁創設、児童手当法制定 第二次ベビーブーム
1972年 （昭和47年）		札幌オリンピック開催、 沖縄が日本に復帰 日中国交正常化
1973年 （昭和48年）		高齢者医療費無料化、被用者 保険の被扶養者３割負担、 高額療養費支給制度が創設 第１次オイルショック
1974年 （昭和49年）	●5. 東山病院の木造病棟の撤去、鉄筋コンクリート建築に建て替え、122床となる	雇用保険法制定
1975年 （昭和50年）		第１回サミット、戦後生まれ 過半数に
1977年 （昭和52年）		成田空港開港
1978年 （昭和53年）		日中平和友好条約調印 自動車生産台数世界一
1979年 （昭和54年）	●11. 高畠眼科を新築（鉄筋コンクリート5階建て延面積317坪19床）	
1981年 （昭和56年）	●9. 東山病院管理棟を建築（鉄筋コンクリート3階建て延面積277坪199床）増築にて 199床に増床し、老人長期入院病院に機能転換	日米貿易摩擦
1983年 （昭和58年）	●9.9 旭東整形外科医院開設許可 ●10.30 旭東整形外科医院（鉄筋コンクリート3階建て延面積513坪19床）の開院式 ●10. 財団創立30周年記念式典開催 ●11.1 旭東整形外科医院診療開始	老人保健法施行（一部負担の 導入）
1984年 （昭和59年）	●12.1 旭東整形外科病院40床へ増床	退職者医療制度施行 世界一の長寿国（女性平均寿 命80歳を超える）
1985年 （昭和60年）		年金制度改正（基礎年金制度 導入）、医療法改正（地域医療 計画）
1986年 （昭和61年）		円高、地価高騰
1987年 （昭和62年）	●12. 第１次病院増改築工事完成	老人保健施設の創設、エイズ 問題深刻化 労働基準法の改正（週40時間 労働制） JR発足、バブル景気

年	操風会の動き	地域・社会の動き
1988年 （昭和63年）	●1.1 岡山旭東病院へ名称変更102床へ増床〈使用許可〉 ●2. 岡山旭東病院開設披露、岡山旭東病院診療開始 ●4.4 医療福祉相談室設置 ●4. 院内研究会開催開始 ●6.25 岡山旭東病院でリハビリテーションを開始	瀬戸大橋開通
1989年 （平成元年）	●2.1 病院広報誌「愛」創刊 ●4. 理学療法士・作業療法士各１名が半日ずつの交代勤務開始 ●4.14 第１回健康教室開催 ●5. ご意見箱「患者様の声」の設置 ●7. 病院図書コーナー誕生 ●9.9 言語患者交流会「ふれ愛の会」スタート	昭和天皇崩御、「平成」に改元 消費税の創設（3％） ベルリンの壁崩壊 高齢者保健福祉推進十か年戦略（ゴールドプラン）策定
1990年 （平成2年）	●1.31 高畠正夫名誉理事長逝去 ●3.14 週5休（実質４週６休半）制導入 ●4.「臨床MRI入門」刊行 ●4. 理学療法士２名・作業療法士各１名が３カ月毎の交代勤務開始 ●7.13～14 リーダー研修開始 ●10.12～14 第１回病院フェスティバル開催（病院フェスティバル開催開始） ●11. 経営指針書の導入 ●11. 院内看護研究会開催開始	厚生省が「21世紀をめざした今後の医療供給体制の在り方」を発表 老人福祉法等の改正
1991年 （平成3年）	●4.1 4週6休（実質4週7休）制導入 第2次病院増改築工事完成 ●8.1 新検査棟完成、MRI（シグナ）導入 ●8.4「脳ドック検査」開始 ●8.3 新MRI検査棟新築落成披露・学術講演会開催 ●11.30 看護部院内研究発表会開催開始	老人保健法改正（老人訪問看護制度創設） 育児休業法制定 湾岸戦争
1992年 （平成4年）	●1.18 共育文化大学参加開始 ●6.1 外来受付と薬局の改装工事完成 ●7.1 骨密度（骨塩定量）測定装置導入 ●9.24 愛脳会（脳に関する一般向け講演会）開催開始 ●外来受付時間変更　AM8:30～12:00・PM2:00～5:30 ●12.1 院内託児所の開始、夜間宿直警備の開始	第二次医療改正案成立「特定機能病院」「療養型病床群」が制度化 時短促進法が制定 ソビエト連邦崩壊
1993年 （平成5年）	●1.23 第１回経営指針発表会開催（経営指針発表会開催開始） ●3. 土居和夫事務局長逝去 ●7. 病院シンボルマーク採用 ●11.3 財団創立40周年記念式典	パートタイム労働法制定 障害者基本法制定 皇太子・雅子様ご成婚
1994年 （平成6年）	●4. 医事OAコンピュータ導入 ●6. 土曜日の全日診療開始 ●8. 理学療法士１名を常勤配置 ●10. 作業療法士１名を常勤配置	関西国際空港開港 新ゴールドプラン策定
1995年 （平成7年）	●4. 託児所の閉鎖 ●6.28【病院医療の質に関する研究会】による第３者評価受審 ●9. 退院時アンケート調査開始	社会保障体制の再構築 高齢者対策基本法制定 阪神・淡路大震災 地下鉄サリン事件 ウィンドウズ95発売
1996年 （平成8年）	●5.28 院内テレビ・ランドリーのプリペイドカードシステム導入 ●7. 経皮的レーザー椎間板減圧術（PLDD）治療開始 ●7.27 院内スリッパの廃止 ●11.9 経営指針中間報告会開催開始	病原性大腸菌O157問題
1997年 （平成9年）	●4. 第3次病院増改築工事完成 新病棟開設　西館3階・内科新設（124床） ●4.1 療養型病床群整備事業により、療養型病棟（90床）の整備計画開始 リハビリテーション病院への機能転換計画開始 ●4.1 経営指針書の作成と、経営指針発表会の開催開始 ●4.13 新築西館開院式 ●6. 総合リハビリテーション承認施設 ●8. 患者専用食堂開設 ●10.17～18 全職員対象一般職員研修開始 ●12.4 訪問看護ステーションたんぽぽ開所式	結核予防法廃止 総合病院制度廃止 「地域医療支援病院」制度化 インフォームド・コンセント努力義務規定整備 消費税5％に増税 週40時間労働制適用

年	操風会の動き	地域・社会の動き
1998年 （平成10年）	●4.1 東山病院改修工事が完成（岡山旭東病院に60床移床完了） ●4.1 東山病院の名称を岡山あさひ病院に変更 ●4.1 土井健男院長が名誉院長に就任、鼠尾祥三先生が病院長に着任 ●4.1 病室入口ネームプレートの表示、院内スリッパの廃止 ●4.1 病院図書コーナーを設置 ●4. リハビリテーション病院への機能転換の開始 ●5.1 療養型病床群整備事業完了 （完全型療養病棟２病棟90床と一般病棟１病棟39床） ●5.1 老人デイケア（通所リハビリテーション）開始 ●5. 西館２階新病棟開設（162床） ●5.15 新人フォローアップ研修開始 ●6. 院内にWEBサーバーを設置 ●6. 臓器移植提供病院に認定 ●6.27 取引業者様との懇談会開催開始 ●7. 病院ホームページを公開 ●10. 開放型病院（開放病床5床　認可） ●10.24 旭東メディカルフォーラム開催 ●11.16 日本医療機能評価機構・一般病院（B）認定	長野オリンピック開催 明石海峡大橋開通 郵便番号７桁化 Google創業
1999年 （平成11年）	●1. 社会医療研究所主催　アメリカ・カナダ研修参加 ●4.1 職能資格人事制度運用開始 ●4.1 医療福祉相談室設置 ●7.1 磁気カードシステム（エンボス）導入 ●9. EM菌による用水路浄化活動開始 ●10.1 再来受付機導入 ●10.1 居宅介護支援事業所「ケアプランサービス旭東」開設 ●10.1 居宅介護支援事業所「ケアプランサービスあさひ」開設 ●12.1 特定集中治療室管理（ICU）設置基準の届出が受理（8床）、NCUからICUへ転換	臓器移植法施工後初の脳死移植実施 新エンゼルプラン策定 世界人口60億人
2000年 （平成12年）	●1.1 ISO14001自己宣言 ●2 広報紙「あおぞら」の発刊開始 ●3.20 サイバーナイフ開設記念講演会（ホテルグランヴィア岡山） ●4.1 開放型病院（開放病床10床　認可） ●4.1 介護療養型医療施設・短期入所療養介護の施設基準の取得 ●4.1 職能資格人事制度の運用開始 ●4. ふれあい教室「あさひ」の開催開始 ●5.1 総合リハビリテーション施設の施設基準の取得 ●6.1 第4次病院増改築工事完成 ●6.1 サイバーナイフセンター完成・治療開始 ●6.19 日本医療機能評価機構「複合病院種別A（一般・長期療養）」認定 ●7.1 脳卒中センター完成・治療開始（本館2階） ●7.15 第１回夏祭りの開催開始 ●11.1 回復期リハビリテーション病棟（38床）の施設基準の取得 ●11.25 第１回リハビリテーション講演会の開催開始	介護保険法施行 「療養病床」と「一般病床」に区分化 健康日本21がスタート 新エンゼルプラン策定
2001年 （平成13年）	●4. アドボカシー室の開設 ●5. 全館禁煙病院実施 ●5. リハビリテーション週７日制の実施開始 ●7.2 M&Lジャパン設立 ●7.14～15 第２回癒しの環境研究会全国大会（岡山会場）開催	小泉内閣発足 家電リサイクル法施行 アメリカ同時多発テロ事件
2002年 （平成14年）	●2.16 院内研究発表会の開催開始 ●4. 職員情報交換会の開催開始 ●4. 文化祭の開催開始 ●5.1 回復期リハビリテーション病床を52床に増床 ●9.1 Dr.パッチ・アダムス岡山講演会2002 ●11.24 おかやまあかいはな道化教室開始 ●11.30 健康教室「パーキンソン病」開催開始 ●12.1 言語聴覚療法（Ⅰ）の施設基準の取得	日本経団連発足 日韓首脳会議 日韓ワールドカップ開催 健康増進法制定 ゆとり教育実施 ユーロ導入 SARS（重症急性呼吸器症候群）流行

年	操風会の動き	地域・社会の動き
2003年 （平成15年）	●1. PACS（医療用画像管理システム）導入 ●5.1 回復期リハビリテーション設置 ●10.1 がんドック（PET）開始 ●10.7 骨密度検査室リニューアル ●10.23 第１回院内学会開催 ●10.24 病棟オーダリングシステム開始 ●10.30 ISO14001認証取得 ●11. 禁煙実施施設認定 ●12. MRI　2台　バージョンアップ ●12. 患者さまの権利　リーフレット配布開始	DPC制度導入 日本郵政公社誕生 次世代育成支援対策推進法制定 少子化社会対策基本法制定 イラク戦争勃発
2004年 （平成16年）	●3.22 岡山県より「岡山地域リハビリテーション広域支援センター」の指定 ●4. 健康センター開設 ●4.3 PET-RIセンター開設記念講演会 ●4.12 PET診療開始 ●7.1 DPC導入 ●8.1 第５次病院増改築工事完成、岡山旭東病院リニューアルオープン ●9.1 財団創立50周年記念式典 ●1.1 病棟メディカルクラーク導入	高齢者雇用安定法改正（65歳雇用確保措置義務化） 医師臨床研修制度の導入 新潟中越地震
2005年 （平成17年）	●3.1 回復期リハビリテーション病床を58床に増床 ●4.5 情報コーナー「健康の駅」　オープン ●6.19 日本医療機能評価機構「審査体制区分2（Ver4.0）」認定 ●7.1 回復期リハビリテーション病棟廃止 ●7.1 亜急性期病床設置 ●7.11 岡山旭東病院の経営指針実践事例集　出版 ●9. 土井健男名誉院長逝去 ●9.22 医療安全KY活動セミナー（医局研修会開催開始）	愛知万博開催 郵政民営化法成立 中部国際空港開港 個人情報保護法制定 メタボリックシンドロームの疾患概念と基準提示 食育基本法が成立 地域密着型サービスの創設
2006年 （平成18年）	●4.1 脳血管疾患等、運動器リハビリテーション（１）の施設基準の取得 ●6.1 癒しの環境院内学会開催開始 ●7.1 回復期リハビリテーション病床を90床に増床（医療・介護療養病床の廃止） ●7.7～8 第56回日本病院学会開催（岡山会場　学会長：土井章弘） ●9.19 MR/CT棟　地鎮祭	がん対策基本法成立 食育推進基本計画が策定 医療制度改革 医療適正化の総合的な推進 高齢者医療確保法制定
2007年 （平成19年）	●4.2 新画像診断棟（3.0TMR・64列MDCT）稼動開始 ●4.7～8 新画像診断棟記念学術講演会 ●4.29 Packman the clown コメディーライブ2007inおかやま開催 ●6. こそ丸商品化 ●6. 職員間サンクスカード開始 ●7.5 カフェ赤い鼻オープン ●9.1 病院名を「岡山あさひ病院」から「岡山リハビリテーション病院」に改名 ●9.19 プライバシーマーク取得 ●9.19 プライバシーマーク付与認定 ●9.28 病院見学ツアー開催開始	第５次医療法改正による脳卒中地域地用連携体制構築 労働契約法制定 防衛省スタート 年金記録問題 郵政民営化スタート がん対策基本法施行 初代iPhone発売
2008年 （平成20年）	●1.19 岡山リハビリテーション病院「感謝の夕べ」の開催 ●2.28 職員誕生日会開始 ●9.27 生命のきずなフォーラム2008開催 ●10. グループウェア導入 ●10.23 アーティスト感謝の夕べ開催開始 ●11.15 サイバーナイフ2000例記念講演会 ●11.25 おかやま子育て応援宣言企業に登録	高齢者医療確保法施行 後期高齢者医療制度創設 協会管掌健保発足 リーマンショック 岡山県南東部地域連携ネットワーク「もも脳ネット」発足
2009年 （平成21年）	●3.23 臨床検査課　ISO15189認定取得 ●4.1 岡山西病院開院（旧平松病院） ●10. 動物ボランティア（日本動物病院協会）の開始 ●10.26 地域連携懇親会開催開始	民主党政権成立 新型インフルエンザ大流行
2010年 （平成22年）	●5.26 洛陽市医療視察訪日団来院受入開始 ●6.22 転倒予防健康教室開催開始 ●8. 介護福祉士の導入 ●9.9 COML病院探検隊来院 ●10. ケアプランサービス旭東をケアプランサービスあさひへ統合 ●10.1 次世代育成支援認定くるみんマーク取得 ●10.12 日本医療機能評価機構「審査体制区分2（Ver6.0）」認定（更新） ●12. 2 中国洛陽・岡山友好病院称号授与式（洛陽）	社会保険庁廃止 日本年金機構成立 東北新幹線開通

年	操風会の動き	地域・社会の動き
2011年 （平成23年）	●1.23 日本医療機能評価機構（Ver.6.0）認定取得 ●4. 主たる事務所の変更 （岡山市中区奥市2番8号から岡山市中区倉田567番地１に変更） ●5.9 日本医療機能評価機構「リハビリテーション付加機能」認定 ●6. ボツリヌス療法外来開始 ●岡リハ跡地に、「サービス付高齢者住宅」の建設計画がスタート ●7.29 地域医療支援病院認定取得 ●8.26 サマー企画キッズデイ病院見学ツアー開催開始 ●11.1 岡山市倉田へ新築移転（新病院開設） 全病床（129床）を回復期リハビリ病床に転換 入退室・勤怠管理システム「フェリカ」導入 ●11.8 岡山市消防局要請による特別消防訓練実施	介護保険法改正 地域包括ケアシステム導入 東日本大震災、九州新幹線開通 アナログ放送終了
2012年 （平成24年）	●3. 評議員選定委員会の開催（新制度の公益法人改革で必要な評議員会の設置） ●3.19 自動精算機導入 ●3.30 サービス付き高齢者向け住宅事業の登録 ●4.2 外来診察医師事務作業補助者導入 ●7.2 eラーニング導入 ●9.1 iPad導入 ●11.1 高畠西眼科開院（院長　高畠隆）	社会保障・税一体改革（年金機能強化による改正） オレンジプラン制定 東京スカイツリー完成 ギリシャ危機
2013年 （平成25年）	●2.15 立体駐車場完成 ●2.20 おかやま子育て応援宣言企業の優良企業として岡山県知事賞受賞 ●3.16 岡山ハッピィライフ操風開所式 ●4. 財団法人操風会より、一般財団法人操風会へ法人種別を変更 ●4.1 岡山ハッピィライフ操風開所 ●4.1 通所介護事業所、訪問介護事業所の事業開始 ●5. 第一回、法人評議会及び理事会開催 ●10.1 短時間通所リハビリテーション開始 ●10.26 花と緑のコンクール　緑化部門団体の部　最優秀賞受賞 ●11. 血管造影装置（InnovalGS630）更新、3.0T　MRI装置増設	厚生年金基金・連合会の大改正 第２次安倍政権成立
2014年 （平成26年）	●2.15 第６次病院増改築工事完成、本館北棟引渡し式 岡山西病院閉院 ●3.1 新病棟（本館北棟２階）開設（202床）、健康センターリニューアル ●3.20 シンボルアート設置記念　ライアン・ガンダーアーティストトーク開催 ●3. 27 経済産業省 平成25年度おもてなし経営企業選選出 ●4.1 リハビリテーションスタッフ病棟配置開始 ●4.7 中国経済産業局より「おもてなし経営企業」感謝状授与 ●7.1 患者相談支援センター開設 ●8.売店・カフェ赤い鼻リニューアルオープン ●9.1 電子カルテ（MBテック）導入 ●9.20 財団創立60周年記念式典開催 ●10.17 中区包括支援センター・操山地区サ高住と連携して介護予防教室の開催 ●11.22～23 第13回癒しの環境研究会全国大会in岡山開催（会場：岡山旭東病院）	STAP細胞論文問題 消費税8%に増税
2015年 （平成27年）	●5.1 十河みどり院長が就任し、鼠尾祥三前院長は名誉院長となる ●6.1 トヨタ歩行練習アシストロボット試作機GEAR導入 ●7. カルナコネクト導入 ●9.17 第41回日本診療情報管理学会学術大会開催（大会長　土井章弘） ●10. 病院活性化検討会開始 ●10. MR、CT土日検査開始 ●12.1 地域包括ケア病棟開設（本館2階病棟）	健康保険法改正 高額療養費改正 新オレンジプラン策定 欧州難民問題
2016年 （平成28年）	●1.23 日本医療機能評価機構3rdG（Ver.1.1）認定取得 ●3. 特定行為認定看護師誕生 ●6.21 電気刺激機DRIVEを導入 ●6.29 プラチナくるみんマーク認定取得 ●7.1 岡山県回復期リハビリテーション病棟協会事務局受任 ●10.26～28 日本eラーニングアワード2016 厚生労働大臣賞受賞 ●11.6 第１回なかまちーずフェスティバル開催（なかまちーずフェスティバル開始）	持続可能性向上法改正 マイナンバー制度スタート 熊本地震
2017年 （平成29年）	●10. 一般財団法人操風会分割 高畠眼科、高畠西眼科が一般財団法人操志会を創設し、分離 ●11.25 人間ドック健診施設機能評価認定 ●12. 第７次病院増改築工事完成、サイバーナイフ棟完成 ●12.21 JIH（Japan International Hospitals）取得	介護保険法改正（３割負担創設） 民法改正（債権法）

年	操風会の動き	地域・社会の動き
2018年 （平成30年）	●2.6 トヨタ歩行練習ロボットWW-1000を導入 ●3.17 サイバーナイフM6　治療開始 ●5.12 サイバーナイフセンターリニューアル記念式典開催 ●7.2 サイバーナイフ体幹部治療開始	働き方改革関連法成立 大阪でG20サミットが開催 西日本豪雨災害 帯状疱疹ワクチン65歳以上の高齢者に提供開始
2019年 （平成31年 ／令和1年）	●2.5 あっぱれ桃太郎体操活動発足 ●3.20 岡山市デイサービスインセンティブ事業　表彰 ●3. 第８次病院増改築工事完成 画像センター別館リニューアル、MRI更新（1.5T1台、3.0T1台） ●3. インターカム導入 ●4. 泌尿器科診療開始 ●4.1 公益財団法人に認定 ●4.1「訪問看護ステーションたんぽぽ」から、「訪問看護リハビリステーションたんぽぽ」に名称変更 ●4.1 おかやまケンコー大作戦参加 ●7. 第22回日本臨床脳神経外科学会in岡山開催（大会長　土井章弘） ●9.2 医療情報管理アプリ「NOBORI」導入（県内初） ●11.3 電子カルテシステムリニューアル ●12.1 病床数214床（一般病床7:1 172床、ICU 12床、地域包括ケア入院医療管理病床30床）	働き方改革関連法施行 「平成」から新元号「令和」へ改元 台風19号により関東地方の浸水被害 消費税率が8％から10％へ増税、一部軽減税率適応開始
2020年 （令和2年）	●1. 救急科・皮膚科診療開始（13診療科） ●1.17 AI問診「Ubie」導入 ●1.31 運転評価ツールドライブシミュレーター導入 ●4.1 吉岡純二院長・土井英之副院長就任、土井章弘総院長就任 ●4.1 就業時間変更（8:30～17:30） ●4. スポーツ・関節外科センター開設 ●8.6 将来世代応援企業表彰 ●9.24 転倒予防健康教室YouTube動画配信開始 ●11.1 電子カルテを（富士通）に更新（電子カルテの法人内共有を図る） ●11. 岡山リハビリテーション病院と電子カルテシステム統合（法人内の患者IDの統合）	新型コロナウイルス（COVID-19）感染拡大、緊急事態宣言発令 東京オリンピック・パラリンピックの延期
2021年 （令和3年）	●2.4 トヨタ歩行練習ロボットWW-2000を導入 ●5.14 新型コロナウイルス患者入院受入開始 ●5.29 FUS治療開始（中国地方初） ●6. 遠隔運動支援ツール「REHASAKU（リハサク）」導入 ●6. デイサービスセンター操風にて、高齢者活躍推進事業開始 ●7.1 患者さん向け病院スマホアプリ「旭東San」公開 ●9.16 オンライン資格認証（マイナンバーカードによる健康保険情報認証）開始 ●3.10 財団内で介護システム「ほのぼの」統合	新型コロナウイルス感染症ワクチンの接種開始 東京オリンピック・パラリンピック開幕
2022年 （令和4年）	●2. 第５手術室増設工事完成 ●6. 医療情報共有アプリ「JOIN」導入 ●9.6 運動器カテーテル治療開始（中国地方初） ●9.30 おかやま健康づくりアワード2022受賞（職員の部、地域の部） ●12. サイバーナイフ前立腺がん治療開始	成年年齢が20歳から18歳に ロシアによるウクライナ侵攻 安倍元首相襲撃事件
2023年 （令和5年）	●2.27 AI活用ネットワークセキュリティシステムの導入（中四国初） ●5.1 集中治療室（ICU）から高度治療室（HCU）へ転換（12床） ●5.12 日本医療機能評価機構３rdG：Ver2.0「リハビリテーション病院」認定（新規） ●7.1 勤怠管理システム（クロノス）導入 ●8.1 本館北棟２階（脳卒中センター）と本館３階（整形外科病棟）の病棟再編 ●8.31 クラウドファンディング（7/3～8/31）で21,015,000円の寄付募集を達成 ●9. 日本医療機能評価機構 高度・専門 リハビリテーション病院「回復期」認定（新規） ●9.1 床頭台システム「ユカリアタッチ」導入 ●9.30 公益財団法人操風会　創立70周年記念式典開催	第101回全国高校サッカー選手権大会で岡山学芸館高校が岡山県勢初優勝 新型コロナウイルスの感染症法上位置づけを5類へ 藤井聡太棋士史上最年少（20歳）で将棋の名人を獲得し８冠達成

編集を終えて

公益財団法人　操風会　専務理事　総院長

土井 章弘

財団法人操風会は、戦後まもない、1950年（昭和25）、高畠正夫・土井健男が語り合って国民病であった肺結核は専門病院である東山病院で、失明の原因疾患のトラコーマに対しては、細堀町の高畠眼科医院で対応した。その後、1961年（昭和36）に国民皆保険制度が成立し、2000年（平成12）には、介護保険制度が導入され、日本の社会保障の中核として当財団は発展してまいりました。そして、病院組織自体も大きく変貌してまいりました。

1983年（昭和58）、将来の発展を期待して二号線沿いの倉田の地に旭東整形外科医院を開設し、1988（昭和63）年、脳・神経・運動器疾患の総合的専門病院として、急性期の岡山旭東病院（124床）に転換し、現在214床の地域医療支援病院まで発展させてきました。東山病院は、故鼠尾祥三が心血を注ぎ、高齢者医療から転換し、岡山あさひ病院を経て、岡山リハビリテーション病院（127床）へ名称変更し、2011年（平成23）には倉田の地に移転しました。一方、東山病院の跡地は、2013年（平成25）サービス付き高齢者向け住宅に転換しました。2017年（平成29）10月、長年共に歩んできた高畠眼科は一般財団法人　操志会（理事長　高畠稔）を創立し、私どもは2019年（平成31）４月１日に公益財団法人操風会となり、それぞれに新たな道を歩むこととなりました。

2023年秋の時点で、公益財団法人操風会で働く職員は常勤職員約800名、短時間職員約100名となりました。公益財団法人への移行と同時に、組織を統合して、財団の評議委員会・理事会を核として、本部会議で運営を一元化していく方向に徐々に進めてまいります。

私たちの財団が、今日を迎えることができましたのは、高畠家と土井家との間に立って、良好な関係維持にご尽力下さり、長年理事を務めて下さった奥村修三先生（元岡山大学脳神経外科助教授・元岡山国立病院脳神経外科部長）のお蔭であったと感謝しております。

財団共通の４つの経営理念は、１）安心して、生命をゆだねられる病院　２）快適な人間味のある温かい医療と療養環境を備えた病院　３）他の医療機関・福祉施設と共に良い医療を支える病院　４）職員ひとりひとりが幸せでやりがいのある病院で、「いきる・暮らしをまもる・人間らしく生きる」を実現できるよう、理念を目的に経営を行ってまいりました。全職員参加で「経営指針書」を33年間毎年作成して理念経営を実践してまいりました。理念経営を学んだ岡山県中小企業家同友会をはじめ、岡山県病院協会、全国公私病院連盟、日本病院会には多くの学びを頂き、大変お世話になりました。

組織にとって最も大切なことは人が育つ学校に例えられると思います。教育を共に育ちあう「共育」として、学会発表・研修参加・海外研修などへの支援も積極的に行ってまいりました。また、70周年記念誌の特別企画「操風会の未来を語る座談会」として、将来を担っていただく若い人に、15年後、30年後の財団の未来を語っていただきました。

最後になりましたが、弟の基之（現理事長）と仲良くやってこられたことが何よりも経営の原動力となり、今日を迎えることが嬉しく、同時に深く感謝しています。

70周年記念誌の発行に当たっては、吉備人出版山川隆之様、学術管理室井上朝美さんを始め担当していただいた多くのスタッフの皆様に心からの感謝を申し上げます。

2023年12月15日

70周年記念誌実行委員からひと言

早いもので操風会に入職し40年以上の月日が経ちました。操風会70年の歴史の中で、目覚ましい発展の時期とも重なり、微力ながら関わらせていただけたことを幸せに思います。これからの操風会がさらに大きく発展していくことを願っております。

操風会　財団企画部長　菅田照也

岡山旭東病院に就職して35年になります。財団の歴史の半分をお世話になったことになります。記念誌の編集を通じて、先人達が築き上げた礎に敬意を払いながら、自分がその歴史の半分に携えられたことを誇りに思っています。今後、次世代を担う人達が公益財団法人操風会を80年、100年と継続的に発展させてくれることを心から願っています。

操風会　事務局長　高見英敏

創立70周年の記念誌の作成に関わるにあたり、創立者の身を切る決意から始まった当財団が、記念誌に示された経緯をたどり現在に至ったかを顧みる中で、改めて当財団の使命を痛感し、身の引き締まる思いを感じました。公益財団として地域での役割を担うべき組織として、今後の益々の発展を祈念いたします。

操風会　人材育成センター長　河村武人

振り返ると人生の半分以上、岡山旭東病院そして操風会で過ごしてきました。その間、医療者として人として、少しは成長できたかと思いますが、これも様々な経験を温かく見守り、時には、背中を押してくれた組織風土と経営者と仲間のおかげと、あらためて痛感しています。組織の更なる発展を次世代に託すべく、ラストスパートしてまいります。

岡山旭東病院　薬剤部部長　三澤　純

70周年という記念すべき年に岡山旭東病院の職員である事、記念誌作成に携われたことを嬉しく思います。先人の方々が大切に培われたことを守りながらも、これからの時代に沿った新たな事にチャレンジし、次の世代に繋げていけるよう自分の役割に責任を持ち取り組みたいと改めて思いました。

岡山旭東病院　看護部部長　井上マサヨ

70周年記念誌が完成していく過程で、病院の歩みを振り返る良い機会になりました。病院の経営理念の中に「職員ひとりひとりが幸せで、やりがいのある病院」があります。私自身も病院の歩みや職場の取り組みを丁寧に振り返る事ができて感無量です。70年の時を刻み、その中で、目に見えない大切なものや思いを次世代に繋いでいけますように願います。

岡山旭東病院　看護部次長　赤刎　愛

「旭東整形外科病院」そして「岡山旭東病院」に名称変更され、その頃からの経営理念や経営指針書、共に育つ学習型病院など、現在に継承されているものが沢山あると感じています。今回、当院の歴史を振り返ると共に、自身の入職から現在を振り返り、懐かしく回想する機会となりました。今後も、経営理念を継承し、次世代に繋げてまいりたいと思います。

岡山旭東病院　看護部次長　髙橋麻里

この度、初めて記念誌の編集に協力させて頂きました。入社から25年の経過の中で多くの変化はありましたが、70年間の先人の方々が時代の荒波を乗り越えて今があるということに歴史の重みを感じました。先人たちの想いを紡ぎ、まだ続く未来に向けて発展させていきたいと思いました。ありがとうございました。

岡山旭東病院　診療技術部部長　片岡孝史

創立 70周年を迎え、この記念誌を発刊できましたことに心より感謝しています。

編集に関わる中、操風会の歴史・意義の大きさを改めて感じることができました。入職して35年同じ時を共有できたことに幸せを感じるとともに、将来に維持発展していくにあたり、身の引き締まる思いです。操風会の未来に向け新しい発見のある記念誌となれば幸いです。

岡山旭東病院　事務部部長　諏訪仁一

我々職員が財団の歴史を紐解き、共有することはとても意義深いことと考えるとともに、70年という歴史の重みを痛感しております。本誌をもとに、理念経営を受け継ぎ、発展させていくことが、我々に課された役儀だと改めて認識しました。この度は、70周年記念誌の編集委員という貴重な機会を頂きありがとうございました。

岡山旭東病院　事務部次長　木口智明

本記念誌では東山病院から岡山リハビリテーション病院への時代の変遷について担当しました。私は1996年に岡山旭東病院より東山病院に移動し、30年近く勤務させていただいています。その間に当病院は大きく変貌を遂げてきたと感じています。この度の記念誌の作成に当り、残存する資料や記憶を頼りに取り纏めさせていただきましたが、私自身にとっても自分の歩んできた職歴を振り返るとてもよい機会となりました。ありがとうございました。

岡山リハビリテーション病院
事務部部長　山本秀樹

記念誌作成のお手伝いの中で、就職してから現在までの事を振り返る良い機会になりました。この度のように出来事の順を追って思考することで、よりリアルに想起する事ができ、改めて振り返ることの意味を感じられました。また、残りの時間の課題についても考える良い時間になりました。ありがとうございます。

岡山リハビリテーション病院
リハビリテーション部部長　光藤美樹

70周年記念誌を作成するにあたり、財団・病院・地域の歴史と共に、23年間の自分自身の歴史を振り返る機会にもなりました。病院の移転もあり、あちこちに散らばった病院の歴史を集めるのは大変でもありましたが、一つ一つが興味深い作業でした。「継承」という言葉通り、未来につながる記念誌になればと思います。

岡山リハビリテーション病院
患者医療支援室室長　山崎規子

記念誌作成するにあたり、どのような思いで岡山ハッピィライフ操風を設立したのかということを感じ取ることが出来たことで、これから岡山ハッピィライフ操風をどのように盛り上げていくことができるのかのヒントを得ることが出来ました。これからも、操風会と共に歩んでいきたいと思います。

岡山ハッピィライフ操風
通所介護事業所　管理者　真木優子

私は1987年に入職し、36年と長く勤務させて頂いております。記念誌作成に関わらせて頂けた事で、過去を懐かしく思い出すことが出来、操風会の歴史と共に過ごせた事に感謝しております。若い世代の力を信じ、これからの成長と発展を期待いたします。

岡山ハッピィライフ操風　尾崎弥生

「歴史を学ぶことは、誇りをもつこと」という言葉を胸に記念誌作成に挑みました。操風会の歴史を紐解き、多くの瞬間や出来事を詰め込みながら、過去・現在・未来へとつながる記念誌編集に携われたことは大変貴重な経験となりました。歴史を共に築いてこられたすべての方々に心から感謝申し上げます。これからも操風会と共に歩み、未来への架け橋となれるよう精進していきたいと思います。

岡山旭東病院　企画課　学術管理室　井上朝美

入職して10年。再度記念誌作成に関わらせて頂き大変有難く思います。創業者の想い、操風会の由来、先人者の努力、医療の発展、、、歴史を知ることで、操風会に対しての愛着がさらに高まりました。長い時の中で、今この瞬間をこのメンバーと過ごすことが出来ている奇跡に感謝し、今後も未来に向かって前進してまいります。

岡山旭東病院　企画課　学術管理室　内藤早穂子

『理念の継承』操風会70周年記念誌は
電子版で読むことができます。

理念の継承　操風会70周年記念誌

令和５年（2023年）12月31日　発行

発　　行　公益財団法人 操風会

編 著 者　操風会70周年記念誌実行委員会
〒703-8265 岡山県岡山市中区倉田567-1
TEL：086-276-3231（岡山旭東病院内）
http://soufukai.jp/

編集制作　株式会社吉備人

印　　刷　サンコー印刷株式会社

製　　本　株式会社日宝綜合製本